

建築と社会

Architecture and Society

日本建築協会
2013 No. 1091

2

特集：“らしくない”空間

「建築と社会」誌

特集一覧 ●1991～2012

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日

本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。取り上げてきた特集テーマは下記のと

おりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（税込・送料別途）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1991 vol.72	●新しい都市空間づくりーIー	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくりーIIー ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識ー複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局管轄部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集1000年記念	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木ー構造技術の世界ー ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語ー人がかわる、まちがかわるー	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザインー東海支部＊	●建築家のための設備知識ー集合高層住宅の設備システムー	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創りー住宅・都市整備公団関西支社10周年ー	●木構造を使ってみませんかー集成材による構造ー	●接着ー建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「夢」、作品」＊	●舞台ー仮設の魅力に学ぶーハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第38回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府管轄	●東海的美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境ー限りある自然と建築とのかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生ー構造技術の役割ー ●大阪市管轄	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境一人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島市の街創りアジア競技大会	●九州のインステレーションと貌	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かってー会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●建築の再生ー構造技術の役割ー ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美ー建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音ー騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃ーまちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法ー会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江ーその地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAP Towers	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元氣りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建管轄部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●銀、能登・風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念／建築と私と社会ー80人の眼ー＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興ー法・制度の運用と新たな展開ー ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改組への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法ー会員作品一	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州ー諏訪とその周辺ー	●街並みの演出ー最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備ービルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98ー21世紀に向けて	●ゆれをとめるーたえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●JR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を結ぶ小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃ー街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法ーまちづくり・すまいづくりへの展開ー	●私の目のみた環境問題	●アーバンインテリナー都市空間としてのインテリア	●来世紀に引き継ぐーわざ、もの、こころー	●私の空間作法ー会員作品一	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所所創業75周年	●中国支部ーしなみ海道と中国地方の街づくりー	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山ー地域文化の発展と新たな施設づくりの流れ	●ここを癒す環境デザイン	●測るー測定方法と測定結果が意味するものー	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法 ーパートIIー	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐーわざ、もの、こころー	●時間	●私の空間作法ー会員作品一 ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エス・ティ・ティファントリーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●I.T社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境ー近未来に向けて今できることー ●大建設計ー作品特集1996-2001ー	●建築の力都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法ー会員作品一 ●NHK大阪放送会議・大阪歴史博物館＊	●第48回青年技術者 ●大阪府中央公会堂
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局管轄部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心 ーパート2ー	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●清洲リバープレイス	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えてーサステナブルエンジニアリングの現在～	●私の空間作法ー会員作品一	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋ーこの地の文化・芸術と建築・街づくりを考えるー	●サステイナビリティー次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザインー	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョンーインテリアから発信するまちなみー	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジーー建築の主観的価値についてー	●力と楽しくつきあう方法	●私の空間作法ー会員作品一	●第50回青年技術者 ●顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」＊	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design+1	●銭湯ー心地よさを求めて～	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法ー会員作品一	●第51回青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ＊	●私の空間作法ー会員作品一	●第52回青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインに参加のまちづくり	●「地方空港の時代」～まちと共存する空港づくりー	●東海支部会員作品2006 ●十東海支部特集3部作＊	●都市再生の本質ー光と影のはざまでー	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギーーエネルギーをたぐいあ、有効利用するー	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心＊	●第53回青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…ー構造が未来へつなぐ夢ー	●私の空間作法ー会員作品一
2007 vol.88	●光り輝く京都の景観まちづくり	●学校新時代	●東海支部会員作品2007 ●十東海支部特集3部作	●創立90周年記念ーこの10年、これからの10年	●あそび考	●こだわりの創る住まいのカタチ	●住まいの設備と空間の移り変わり	●建築系雑誌が伝えるもの	●建築基準法等大改正	●第54回青年技術者	●ガラスを考える	●楽しい構造の世界
2008 vol.89	●私の空間作法ー会員作品一	●PFI事業、その後	●東海支部会員作品2008 ●十東海支部特集3部作	●まちづくり2011年宣言	●新ホテル物語	●設備に役立つ地震対策	●中国地方を訪ね歩いて見えるもの ●小林聖心女子学院	●建築と景観	●第55回青年技術者	●木造住宅を巡って	●建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？	●自然と戦う構造
2009 vol.90	●私の空間作法ー会員作品一 ●前版電車・中2線ー新線が延伸・島崎明代ー	●水の都にぎわいのある未来にに向けて	●東海-TOKAI オムニバス	●楽しい福祉	●体感するインテリア	●建築空間が求める空気環境（空気質）	●建築と水	●実用レベルで展開される施工管理のIT化	●第56回青年技術者	●地域の歴史資産を活かしたまちづくり	●第16回会員作品特集「私の空間作法」	●構造家日記ー頭の中をのぞいてみたら～
2010 vol.91	●創業110周年記念特集 NIKKEN SEKKEI	●建築とエコ技術	●東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	●食と建築・都市	●ホスピタリティのあるケア空間	●太陽光発電	●建築と石	●再生・受け継ぐ・繋がる	●第57回青年技術者	●建築ストック社会の形成への展望	●LED照明の活用・将来を考える～人・地球への思いやりー	●東京スカイツリー
2011 vol.92	●UR向ヶ丘緑地ストック再生実証実験ーストック活用時代の夜明け第1回 会員作品「私の空間作法」	●BIMは設計を変革するか？	●東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	●まちなかのサードプレイス	●変遷する“身の置きどころ”	●ECOー建築設備が出来るECO技術～	●建築と土	●鉄道駅に注目する	●第58回青年技術者	●火災に強い建築を考える	●コンクリートという素材	●構造教育と社会
2012 vol.93	●自然災害に立ち向かう力を求めて	●今、私が思う「和」	●東海支部特集	●第18回会員作品「私の空間作法」	●中国市場に挑む	●ZEB ネット・ゼロ・エネルギービルを目指してー低炭素社会の実現に向けてー	●建築と窓	●巨大地震に備える	●第59回青年技術者	●超高齢社会に求められる住まい	●歴史的建造物の保存活用	●身のまわりの「世界」を探る

＊は欠号

第12回 読者と選ぶ 「建築と社会」賞のための アンケート回答募集

2012年1～12月号
「建築と社会」誌から

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

■選考対象

「建築と社会」2012年1～12月号に掲載された作品、及び個別の論文・記事を対象とする。

・「作品作風頁」欄、及び「本会支部作品頁及びそれに準ずる作品頁」掲載の建築作品

・「特集頁」掲載の個々の論文・記事
—特集頁全体は選考対象としない—

・「シリーズ頁」の論文・記事 (gallery、法令コーナー、構造の頁、設備の頁、再読関西近代建築、関西の建築界／群像、新建材の頁、素材最前線、REPORT頁、Member's Forumほか)

■賞の部門

作品部門／1～4点

論文・記事の部門／1～4点

■会員読者による第一次選考

会員読者から投票された「作品」及び「論文・記事」に、編集委員会の意見を加味して各部門10点程度選出。これを第二次選考対象とする。

■選考委員会による第二次選考

第一次選考を通過した選考対象を、選考委員会で選出。(該当者に写真、図面、設計主旨などの説明資料を求めることがある)

■第11回選考委員 (予定)

田中直人 (摂南大学理工学部・教授
／選考委員長)

井上雅人 (武庫川女子大学生活環境
学部生活環境学科・講師)

高砂正弘 (和歌山大学システム工学
部システム学科・教授)

谷口与史也 (大阪市立大学大学院工学
研究科・教授)

■発表と表彰

作品部門は建築主、設計者、施工者の中の代表者に、論文・記事部門は執筆者 (複数の場合は代表者) に、賞状 (記念楯) を贈呈する。表彰式は6月中旬を予定。入賞発表は「建築と社会」2013年7 or 8月号予定。

■投票締め切り

2013年3月8日 (金)

■送付先

(社) 日本建築協会

FAX 06-6946-6984

e-mail: kyoukai@aaj.or.jp

〒540-6591

大阪市中央区大手前1-7-31

OMMビル7階

*2012年の誌面詳細は、2012年12月号p53に掲載している総目録または日本建築協会HPをご覧ください。

なお、日本建築協会ホームページ<http://www.aaj.or.jp>からも、ご投票いただけます。

「建築と社会」賞 読者アンケート

送付先

(社) 日本建築協会
FAX 06-6946-6984
e-mail: kyoukai@
aaj.or.jp

「建築と社会」2012年1～12月号で、よいと思われた作品・論文・記事 (特集の場合は個々の論文・記事を対象とする)、その他本誌に対するご意見を記入の上、e-mailまたはFAXで、(社) 日本建築協会へご投票下さい。

(2012年〇〇月号掲載の作品、論文・記事名及び同執筆者名を明記してください)

(1) お名前

(2) 勤務先または連絡先

(3) とくによいと思われた作品とその理由

(4) とくによいと思われた記事とその理由

(5) 本誌についてのご意見や、取り上げてほしい内容などがありましたら、ご記入下さい。

若き創造者たちへ

「第60回青年技術者顕彰」へのおさそい

日本建築協会では、昭和29年から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年は第60回という節目の年となりましたが、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（平成25年3月29日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。

2. 原則として、すいせん者を通じて応募する。

すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3. 応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしたげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。

4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。

5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第60回青年技術者特集号」（平成25年7月号）に掲載する。

6. 提出資料

■すいせん用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードして下さい。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めてA3判用紙5枚以内にまとめる。

① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料

④ 上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者本人の執筆に限る。このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。

7. 提出期限 平成25年3月29日（金）

8. 提出先 日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャンダイズ・マートビル7階

電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984

Email : h-katayama@aaj.or.jp

9. 提出方法 郵送（当日消印有効）または持参

10. 青年技術者選考委員会（平成24年度）※3月現在

委員長 米井 寛／㈱東畑建築事務所執行役員大阪事務所副所長

委員 吉岡 聡司／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻／キャンパス地域デザイン研究室助教

佐々木 栄／㈱昭和設計執行役員建築部門建築設計部統括

八木 康行／スタジオエイトアーキテクト代表

高梨雄二郎／㈱竹中工務店プロジェクト開発推進本部副本部長（西日本担当）

山浦 晋弘／㈱安井建築設計事務所構造部長

辻 聖晃／京都大学大学院工学研究科建築学専攻准教授

高山 真／㈱日建設計設備設計部門設備設計部長

井村 隆／清水建設㈱関西事業本部設備設計部設計長

山辻 直樹／大成建設㈱関西支店建築部購買管理室課長

阪井 聡／㈱大林組大阪本店建築事業部生産技術部部長

第29回茶室見学会 真澄寺別院流響院 (通常非公開)

日 時 2013年 3月16日(土)
14:00~16:30 (予定)

講 師 中村昌生氏
京都工芸繊維大学名誉教授

見学会 真澄寺別院流響院
(京都市左京区南禅寺下河原43-1)

集 合 現地(京都市営地下鉄東西線「蹴上駅」下車)

定 員 30名(申込み多数の場合は、
会員優先の先着順)

申込締切 2月27日(水)
(定員に達し次第締切)

参加費 会員4,000円、一般5,000円
学生は各半額

申 込: FAXまたはE-mailで、
①催し名「茶室見学会」
②氏名
③会員・一般の別
④職場名または学校名
⑤参加証送付先(郵便番号)
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。

申込先: (社)日本建築協会編集事業課
TEL: 06-6946-6981
FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaj.or.jp

流響院は、明治42年南禅寺界隈の開発を手掛けていた塚本与三次氏の邸宅として建設されました。大正14年に敷地が分割され、清流亭と三菱財閥の岩崎小弥太の別荘になり巨陶庵と名付けられます。その後、進駐軍の接収により洋風に改築されていた時期もありましたが、老舗織物会社の所有を経て平成17年に現在の所有者に譲渡され、大正時代の巨陶庵期の図面や写真をもとに、屋敷や庭園の復元・修復工事を現代の名工たちの手によっておこない、平成21年に流響院と命名されました。

近代日本庭園の先駆者である七代目小川治兵衛と長男保太郎親子が手がけた池泉回遊式庭園と数寄屋造りの主屋からなり、東山連峰の景観を借景に、琵琶湖疎水の水を取り入れた広い池や川の流れ、築山からの二段の滝を主体に、茶室「涼流亭」などの建築が巧みに構成されています。庭内には守山石や鞍馬石などの名石の他、約70種類1000本以上の樹木があり、四季折々の美しい景色をみせてくれます。中村先生の貴重なお話とともに、流響院の名の由来となった清らかな水の流れの響きを感じて頂きたいと思います。



全体平面図

同志社大学今出川キャンパス 「良心館」見学会

この見学会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。
(社)大阪府建築士会(2単位)
(社)日本建築家協会(2単位)

●建築概要

所在地 京都市上京区今出川通烏丸東入御所八幡町106番

建築主 学校法人 同志社

設計 同志社大学今出川キャンパス整備事業
東畑・類 設計共同企業体
担当 東畑建築事務所

施工 戸田建設株式会社

敷地面積 56,602.17㎡

建築面積 8,619.19㎡

延べ面積 40,273.47㎡

構造規模 SRC造、RC造

竣工 2012年10月末(建物本体)

建物用途 大学

2010年秋に同志社中学校が岩倉に移転後、その跡地を大学が利用、教学体制の再構築を行うことによりこの新棟を建設することとなった。

この良心館は、主に学生数増加に伴う教室・ゼミ室の新設、食堂・コンビニ・書籍販売などの福利厚生施設の移設のほか、国内では最大級となるラーニングcommons約2,550㎡を設けている。

建物の構成としては、北側から「教室エリア」、教務・事務、ラーニングcommonsのある「中央エリア」、チャペルに面した南端に「学部エリア」を配置した明快なゾーニングとし、建物中央部に南北に貫く吹抜け空間「ルーセントプラザ」を中心に一体的に構成している。

建物デザインは、歴史あるキャンパスの景観を受け継ぎ、既存校舎群との調和を図りながら、新しい今出川キャンパスのシンボルとなる施設として整備した。外装はレンガの中空積とタイルで構成し、上層部は白を基調としたタイルとすることで圧迫感を軽減している。烏丸通に面する北側には、キャンパス内に現存する「啓明館(登録有形文化財)」をデザインモチーフとしたツインタワーを

設計、今出川キャンパスの新たなランドマークとした。南側上部にはレンガルーバーを設けることで新たな表情をつくりだしている。

今回、新棟周辺外構の整備も同時に行い、良心館南側にある建物を撤去し、芝生広場「サンクタスコート」を整備し、キャンパスの通りに面して、彰栄館・礼拝堂・ハリス理化学館(重要文化財)が大学創生期の配置になり、原風景を思いおこす空間として整備される。

(笹村欽也、石井康彦/東畑建築事務所)

日 時 2013年 3月23日(土)
14:00~16:30 (予定)

講 師 笹村欽也氏、石井康彦氏
(株)東畑建築事務所

集 合 現地(京都市上京区今出川通烏丸東入御所八幡町106)

定 員 30名(申込先着順)

参加費 会員1,500円、一般2,500円
学生1,000円

申込方法 FAXまたはEメールで、
①催し名「同志社大学」
②氏名
③会員・一般の種別
④職場名または学校名
⑤参加証送付先
⑥連絡先電話番号
⑦CPDを申請される方は、
申請先の団体名とIDを明記

申込先 (社)日本建築協会編集事業課
TEL:06-6946-6981
FAX:06-6946-6984
E-mail:jigyoka@aaj.or.jp



第8回学生のための見学会 ～ショールーム巡り～ 「(株)ユニオン」 と 「(株)ダイナワン」

申込はFAXかE-mailで
FAX 06-6946-6984
E-mail : h-katayama@aaaj.or.jp

学生のための見学会とは、建築及びデザインを学ぶ学生のために、進行中の建築現場や工場を紹介し、見学の機会を提供するものです。大学などの授業だけでは、建築現場や工場での製品が作られる過程やものづくりのポイントを伝えることは困難な面があります。そこで、日本建築協会では、教育現場からの要望を取り入れ、その要望を橋渡しする役目を担うべきと考え、この企画を開催しています。

第8弾の今回は、大阪市内のショールームの見学を企画しました。ドアハンドルの「ユニオン」と(株)LIXILの100%出資子会社の「ダイナワン」です。「ユニオン」では、オーダーハンドルのデザインから製作過程を見ていただきます。「ダイナワン」では、意匠性の高いタイル製品の見学とタイルができるまでの工程を、ビデオを見ながらレクチャーしていただきます。教室内の議論では決して学ぶことが出来ない制作の現実を、是非見学してみてください。

日 時 2013年 2月14日(木)
13:30～16:30

見学先 「(株)ユニオン」
13:30～14:30
大阪市西区南堀江2-13-22
「(株)ダイナワン」
15:00～16:30
大阪市西区新町1-7-1
LIXIL四ツ橋ビル13F東

集 合 「(株)ユニオン」ショールーム前

定 員 30名

参加費 500円(保険代、資料代)

申 込 申込用紙に記入の上、FAXまたはE-mailで。
FAX 06-6946-6984
E-mail : h-katayama@aaaj.or.jp
(社)日本建築協会編集事業課
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31
TEL.06-6946-6981

締切り 2013年 2月 6日(水)

集合場所：(株)ユニオン



地下鉄四ツ橋線四ツ橋駅 6号出口より西へ徒歩 8分
地下鉄千日前線西長堀駅 6号出口より東へ徒歩 6分
地下鉄長堀鶴見緑地線西大橋駅 3号出口より南へ徒歩 6分

名称	「(株)ユニオン」・「(株)ダイナワン」ショールーム見学会
学校名・学部・学科	
引率者職名・氏名	おられない場合は記入不要
学生氏名・学年	
学生氏名・学年	
学生氏名・学年	
参加通知書送付先住所 TEL・E-mail	〒 TEL E-mail

建築と社会

Architecture and Society

2 | NO.1091 | 2013
日本建築協会

■特集予告

●3月号／東海支部特集

●4月号／第19回 会員作品“私の空間作法”

今月の表紙

強調された垂木と格子窓に、なまこ壁。松林に覆われた小高い丘の頂にスツと置かれた姿はまるで城郭。巨大障子と華奢な杵、針描の金蒔絵脇に竹が貫く大きな中庭、極太漆喰目に極小モザイクタイル…。スケール感が狂う。なまこは奥にガラスサッシやスチールパネルが仕込まれ外皮となる。数奇屋とは異なる吉田建築の粗細と奥行感に只々圧倒。

(大西広朗)

大和文華館

設計：吉田五十八

竣工：1960年

所在：奈良県奈良市

デザイン・建築写真：

嘉村知紀（東出清彦写真事務所）

J o u r n a l o f t h e A r c h i t e c t u r a l A s s o c i a t i o n o f J a p a n

特集●“らしくない”空間

【総論】

“らしくない”の追求—既成概念のなせる業— 柏木浩一 24

【各論】

1 インタビュー 代官山 蔦屋書店 ●福田正純・外園卓也 28

2 “らしくない”住まい ●横山俊祐 32

3 海外事例に見る“らしくない”ホテル ●浦 一也 34

4 一般解から個別解への転換

“オフィスらしさ”からの脱却 ●岸本章弘 36

5 “最もらしい”商業施設とは ●山崎康正 38

【編集後記】 40

小特集●中之島フェスティバルタワー

作品 中之島フェスティバルタワー 11

本文 計画の経緯 ●江副敏史、来住竜一 16

建築計画 ●中島 究、山本武志 17

ホールの計画 ●甲 勝之、中川浩一＋永田音響設計、小野茂樹 18

構造計画 ●阿波野昌行 19

環境・設備計画 ●小稲克也・牛尾智秋 20

施工計画 ●岡橋 稔 21

会告 第12回読者と選ぶ「建築と社会」賞のためのアンケート 1
回答募集。若き創造者たちへ「第60回青年技術者顕彰」へのおさそい。第29回茶室見学会真澄寺別院流響院（通常非公開）。同志社大学今出川キャンパス「良心館」見学会。学生のための見学会～ショールーム巡り～「(株)ユニオン」と「(株)ダイナワン」。

作品作風 ニシヤマ大阪支店 6
空港施設株式会社北九州空港トレーニングセンター 8

gallery 往年の旅館をバーとして再生 10
●山根健太郎・武田憲人・山田央彦

法令コーナー 建物全体の省エネ性能を評価する基準へ一本化—改正 41
省エネ基準の概要— ●植村義幸

設備の頁 “有機ELといえば山形”の実現に向けて 42
～広がる有機EL照明の可能性～ ●村上賢一・島田新一

再読 甲子園ホテル ●桐谷邦夫 43
関西近代建築

関西の建築界 尾瀬耕司 ●中村圭祐 47
群像

茶室への 流響院の茶室 ●中村昌生 48
いざない

審査発表 「新ええとこ」提案コンクール 50

information 「河口龍夫—聴竹居で記憶のかげらをつなぐ」展。特別 52
企画展 国立トレチャコフ美術館所蔵 レーピン展。特別展 天下の城下町 大坂と江戸。日中国交正常化40周年 特別展 中国 王朝の至宝。第12回村野藤吾建築設計図面展—都市を形づくる村野藤吾のファサードデザイナー—。「こころの京都百選」完成記念特別展 日本画 こころの京都

月間の動き 平成24年12月 54



建築主 株式会社ニシヤマ
設計 KAJIMA DESIGN
監理 鹿島建設
施工 鹿島建設

ニシヤマ大阪支店

2重サッシ打ち込みPC板による高性能外皮

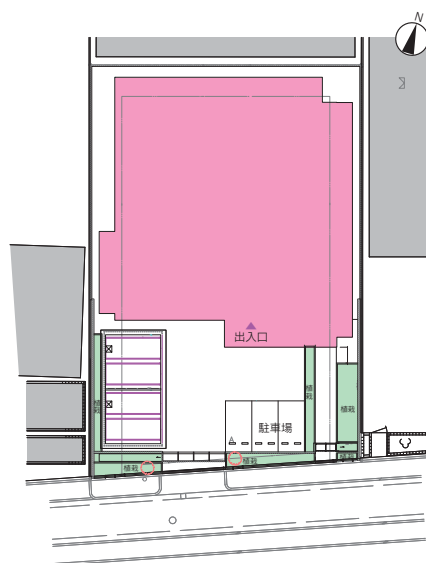
建物外皮の設計に際しては、状況に応じた、防火、採光、止水、断熱、遮音、意匠、経済性などの各パラメーターの設定が求められる。今回開発した2重サッシ打ち込みPC板は、開口を設けたPC板にアウターサッシとインナーサッシを組み合わせたユニットパネルで、アウターサッシとインナーサッシの間の空気層をエアフローとして利用し、高度な環境性能を実現した。

PC板に開ける開口サイズは採光条件により決められ、アウターサッシの形状は、外観の意匠性から、インナーサッシは遮音性や断熱条件により仕様決定される。また、ユニット化することで工期短縮につながり、安定した品質の外皮をつくることが可能となった。

今回のPC板は、2種類の厚みの部分からなり、PC板の厚い部分は、そのまま外部仕上げ面とし、PC板の薄い部分はアウターサッシをはめ込み、ガラス面が厚いほうの板面と同面で納まるようにしている。アウターサッシは、PC板端部までをガラス面とすることで、L型のPC板面とガラス面が織りなすリズムカルな表情を創りだした。PC板の表面は淡いグリーンの骨材が研ぎ出しされており、さらに豊かな表情の外観となっている。

(松島茂樹・日吉良平／鹿島建設)

所在地——大阪市淀川区西宮原1丁目
敷地面積——990㎡
建築面積——521㎡
延床面積——2,786㎡
構造規模——S造、地上6階
工期——2011年11月～2012年8月
最寄駅——JR新大阪駅
撮影——福澤昭嘉





外観全景
CIカラーを採用した飛翔感あるカラーリング



2階見学者スペース
大きな開口部からフルフライトシミュレーター、エントランスホールを見る

建築主 ■
空港施設株式会社

設計・監理 ■
大林組九州支店 一級建築士事務所

施工 ■
大林組九州支店

空港施設株式会社 北九州空港トレーニングセンター

■新しい航空会社の企業イメージを象徴した内外部空間

周防灘に浮かぶ人工島である北九州空港島内に立地し、ブラック＆ホワイトをCIカラーとしているスターフライヤー社の訓練施設。

外観は航空機の翼や尾翼をイメージし、大胆で飛翔感のあるカラーリングとすることで、離着陸時にも窓から施設を認識でき、最大限に企業イメージをアピールできた。

見学者対応をしているフルフライトシミュレーターとモックアップ施設の配置は、建物中央に見学スペースを設けることで、両方が同時に、かつ俯瞰的に見える断面構成とした。また、全フロアを通じて廊下端部には窓を設けることで、自然光が入り明るく清潔な見学者空間とすることができた。

構造的には、シミュレーター作動時の振動を、事務室及びその他諸室へ伝播させないために、建屋基礎とシミュレーター基礎との縁を切り、快適な環境の事務エリアを確保した。

(片木龍太／大林組)

所 在 地——福岡県北九州市小倉南区空港北町2-5（空港島内）

敷地面積——1,650.05㎡

建築面積—— 912.13㎡

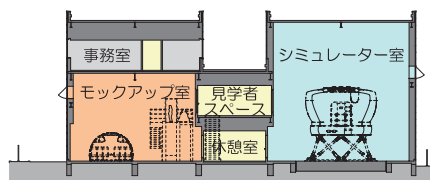
延床面積——1,965.48㎡

構造規模——S造、地上3階

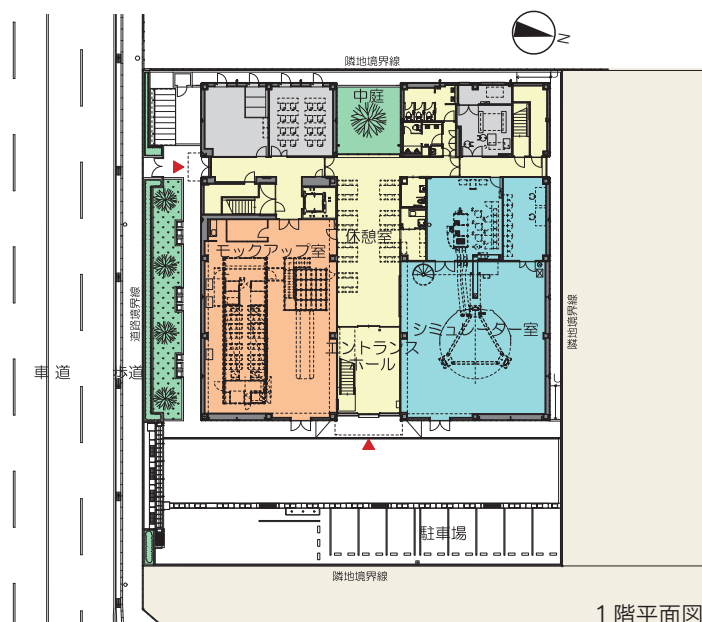
工 期——2012年2月～2012年8月

最 寄 駅——JR日豊本線 杵網駅

撮 影——寺崎健（SS九州）



南北断面図



1階平面図



エントランスホール



シミュレーター室



モックアップ室



エントランス 夕景



往年の旅館をバーとして再生

改装設計

山根 健太郎

武田 憲人

山田 央彦

一級建築士事務所expo

山根 健太郎（やまね けんたろう）
1973 京都府生まれ
1999 京都工芸繊維大学工学科学研究科
造形工学専攻修士課程修了
1999 expo共同設立
現在 京都芸術デザイン専門学校非常勤講師
大阪市立大学非常勤講師

武田 憲人（たけだ のりひと）
1973 大阪府生まれ
1999 京都工芸繊維大学工学科学研究科
造形工学専攻修士課程修了
1999 expo共同設立

山田 央彦（やまだ てるひこ）
1973 京都府生まれ
1997 京都工芸繊維大学造形工学科卒業
1997 株式会社アーバンハウス研究所
2003 expo加入



元は宿の帳場であった場所に新たにバーカウンターを設置

京都の“島原地区”にある老舗旅館の一部を改装した カフェ＆バー「ぎんせ」

1641年に現在の下京区にあたるこの地に移されてから、格式の高い花街として島原は存在してきたが、明治以降徐々に衰退し、昭和後期にはお茶屋組合も解散し、現在は普通の住宅地となっている。往時の雰囲気を残す多くの建物や門も、取り壊しなどで姿を消す中、築250年の空き旅館の一部を改装し、飲食店として再生させることになった。

内部は80年ほど前に作られた華やかなつくりのダンスホールなど、洋館の雰囲気を未だ濃く残しており、時代ごとに職人によって手を加えられ再生を繰り返してきた生命力と色気に満ちた物語が潜んでいる場所や設えを丹念に見つけ出し、“それらに合わないことはやらない”というシンプルなルールに則って設計することとした。新たに手を加える際には、古いものとのコントラストを強調するのではなく、あたかも始めから同じ時間の流れに乗り続けているかのように見えるよう、改装の痕跡を消したり整えたりしていくことが主な作業であった。現代的な機能を備えつつも、表面的なデザインだけに囚われることなく、時の移ろいをじっくりと味わえる格式高い空間となっているはずである。



かつてのダンスホールは終戦後、進駐軍に接収され多くの調度品が失われていた。可能な限り当時の雰囲気に近い器具を揃えかつ、現代の機能的要求に応えた。
企画編集 加嶋章博（作品作風小委員会）



——中之島フェスティバルタワー——

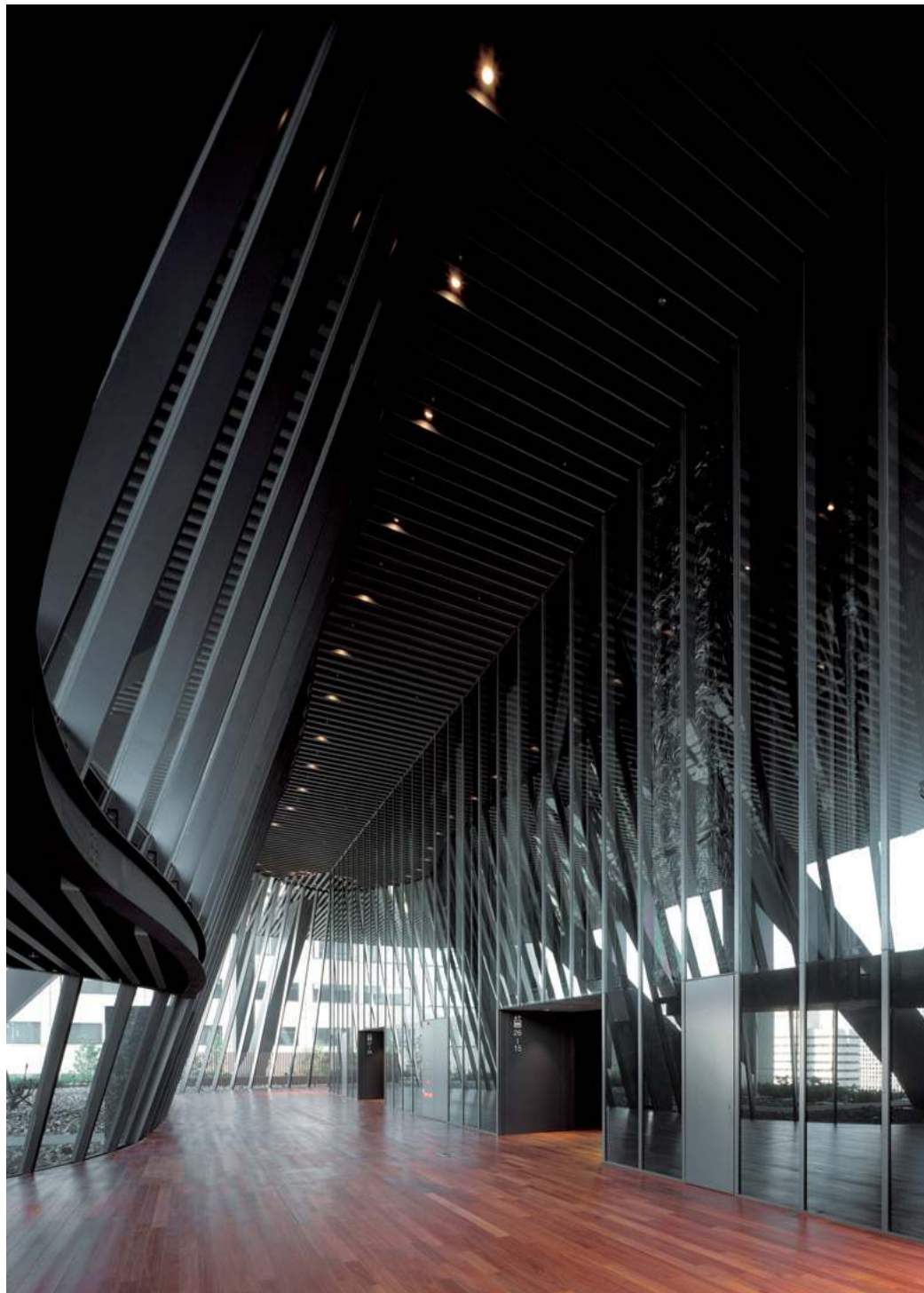
建築主 ■ 朝日新聞社

設 計 ■ 日建設計

施 工 ■ 竹中工務店



南側外觀



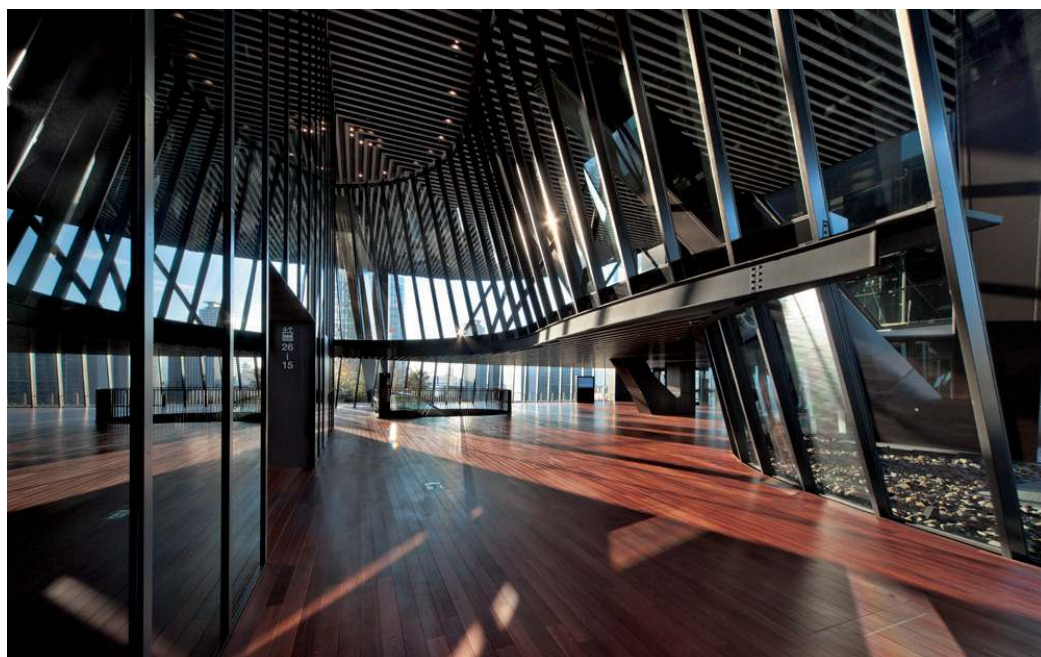
13階スカイロビー



13階スカイロビーテラス



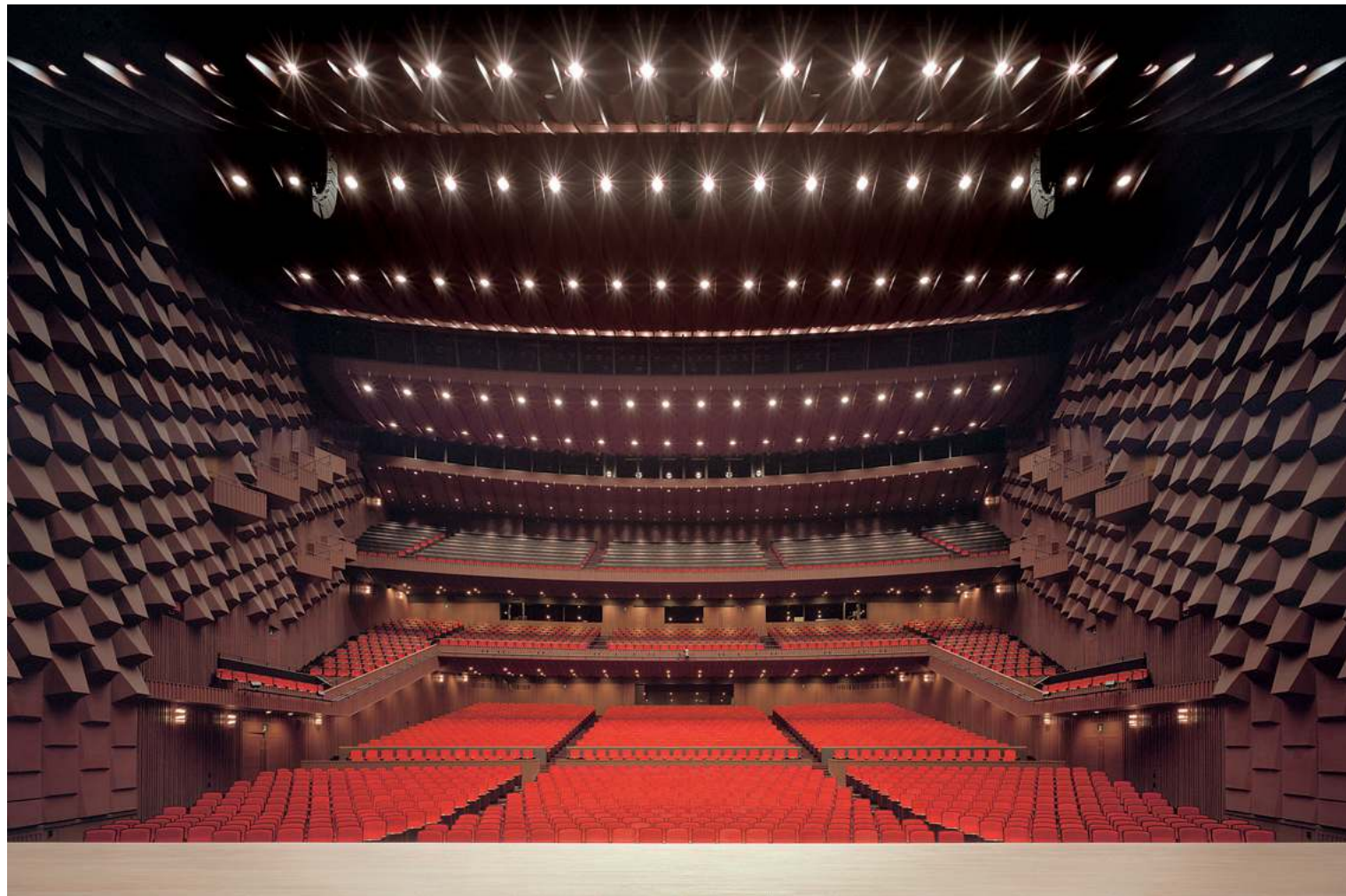
1階ボルティコ



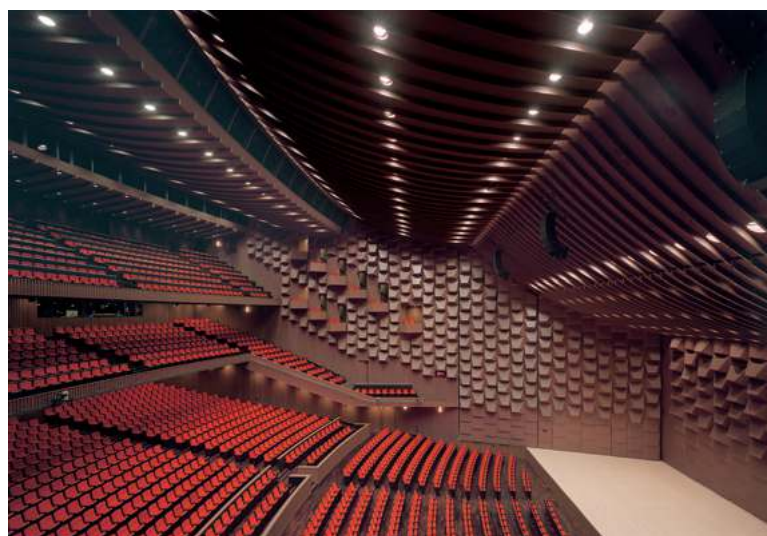
同上



朝日新聞ビル（左側）のアールに呼応する外観



フェスティバルホール



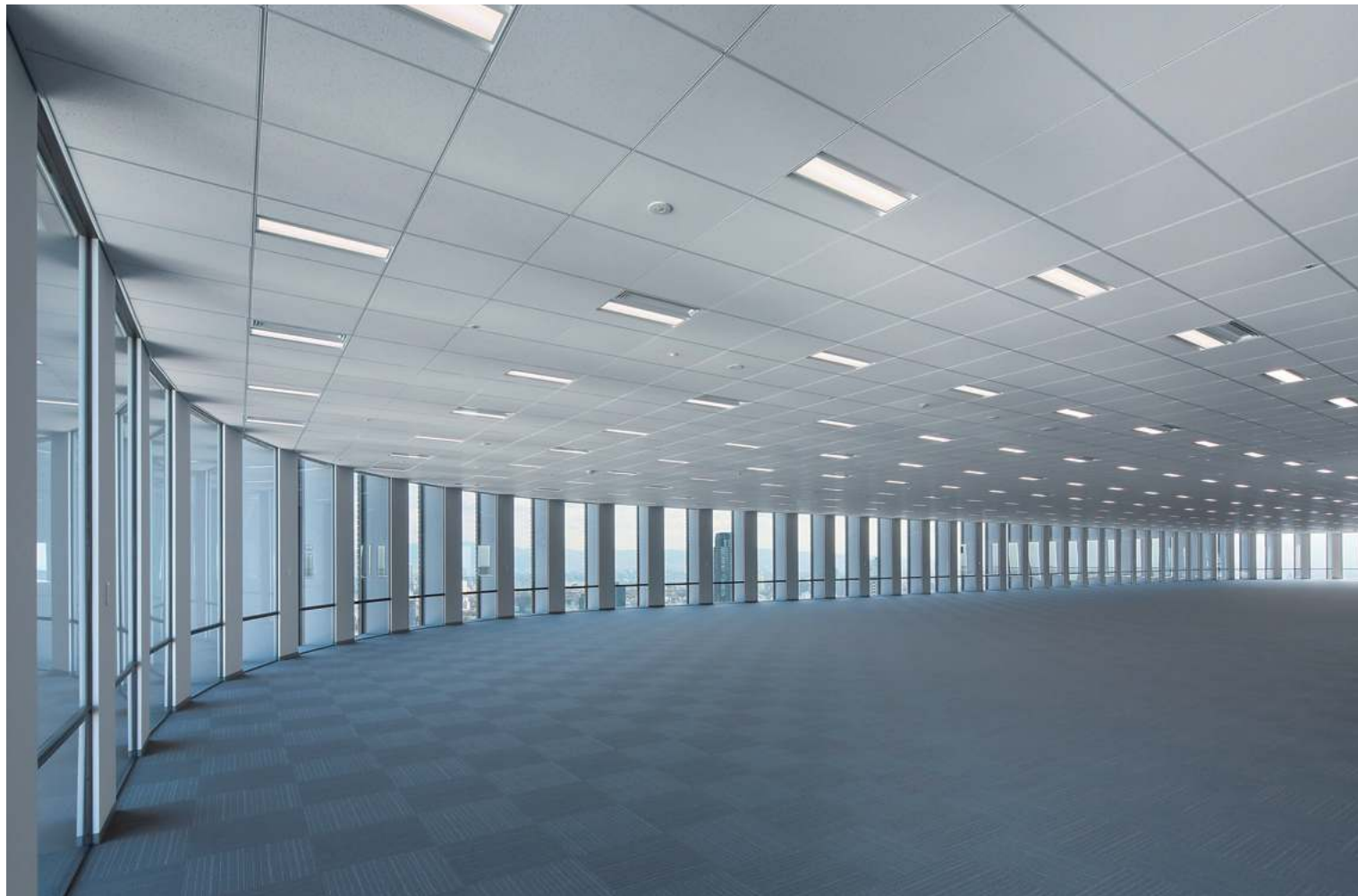
フェスティバルホール側面



2階ホールエントランス



5階メインホワイエ



テナントオフィス



1階エントランス大階段



1階シャトルエレベータホール



西側夜景

1 計画の経緯

■はじめに

中之島は堂島川と土佐堀川に挟まれ、大阪の政治・経済・文化の中心地であり、豊かな水と緑そして歴史的建築が水都大阪を代表する景観を形づくっている。御堂筋と並ぶ大阪を代表するメインストリートである四つ橋筋の両側に位置する朝日新聞ビル、大阪朝日ビル、新朝日ビルは、永きにわたって中之島を代表する建物として親しまれてきた。またフェスティバルホールは1958年4月にオープンし、以来関西の人に親しまれてきたことはもちろん、世界の音楽家から称賛されてきた。

新しいフェスティバルタワーは中之島の環境と調和させ、その風景とフェスティバルホールの記憶を受け継ぐデザインが求められた。コーナーが柔らかに描く円弧とベージュ色の煉瓦の壁面は朝日新聞ビルと朝日ビルのイメージを継承する。そしてフェスティバルホールを象徴する鮮やかに復元されたレリーフ「牧神、音楽を楽しむ図」とホールインテリアのレッドカーペット、シャンデリア、天井と壁の形状などは旧ホールの記憶を繋げるものとした。

建物構成としては2700席のフェスティバルホールと朝日新聞大阪本社、そして高さ200mの超高層オフィスをいかに最適に組み合わせるかという課題があった。敷地の面積からは、フェスティバルホールの舞台・客席・ホワイエ

をしっかりと確保すると建物が敷地一杯に広がる。またオフィス部分は大阪のマーケットで貸しやすさを優先すると建物中央にエレベータ・階段・トイレを集約するセンターコアが望ましい。これらの設計条件を満足させながら、この目的を達成するには、オフィスとホールは縦に積み重ねて行かなければならなかった。この課題を解決するために、オフィスの中央部の柱を、ホールで外周に広げるメガトラス構造を採用した。高層のオフィス部分は360度広がる眺望を満喫できるように1.8mピッチの細柱からなる開放感ある空間、そして13階のスカイロビーでその圧倒的なメガトラス構造の力強さをそのまま表現した。そして低層部はこれらを支える強固な構造体を素材感ある煉瓦で包み、さらに深みある重量感を与えた。

円弧を描くコーナー形状やスカイロビー階の建物のくびれ、低層部の深い庇は建物周辺の風環境を和らげることも風洞実験により確認されている。そしてアクティブスキン、エコボイド、河川水利用冷暖房システムなどの環境技術、中間層免震による国内屈指の耐震性能、「天井から音が降り注ぐ」とたたえられた旧ホールの響きをさらに深める音響性能など、環境・構造・音響の最新の設計技術を建築デザインと調和させながらこの建築に込めることができたと考えている。

(江副敏史／(株)日建設計 役員)

■事業計画

●最高の立地環境

敷地は水都大阪のシンボルアイランドである中之島の中央に位置する。中之島は大阪の行政・中枢業務・文化交流の中心であり、2008年には京阪中之島線渡辺橋駅が敷地の北隣に開業しアクセスも飛躍的によくなった。

●競争の激しい事業環境

構想時、世の中はファンドバブルで湧いており、大阪都心でも高容積でのビル開発計画が相次いだ。中でも、うめきた先行開発を含む梅田が最大の脅威であったが、一流企業が集積する中之島の中心という立地と、フェスティバルホールのブランド力で競争力は確保可能と考えた。

●東西一体の事業計画

フェスティバルホールの再生を公共貢献とした都市再生特別地区適用が事業の前提であった。基本構想段階で事業採算検討を積み重ね、東地区のホールの事業負担を西地区でカバーするシナリオを描き、両地区とも容積率1600%が必要と判断した。

●都市再生特別地区で1600%に

東西で容積率600%の緩和には他に多様な公共貢献が求められた。ビル足元には広がりのあるボルティコ空間、地下街や地下駅とのネットワークを改善する風と光を導く地下広場、生駒山〜大阪港までが一望できるスカイロビーなど、人々の回遊を誘い、まちの賑わいを再生するための様々な貢献要素を提案した。多岐にわたる関係者協議と複雑に絡み合い、他協議とのスケジューリングなど、開発マネジメントには苦労したが、ほぼ満室稼働でオープンを迎えることができたのが何よりである。

(来住竜一／(株)日建設計 企画開発部長)

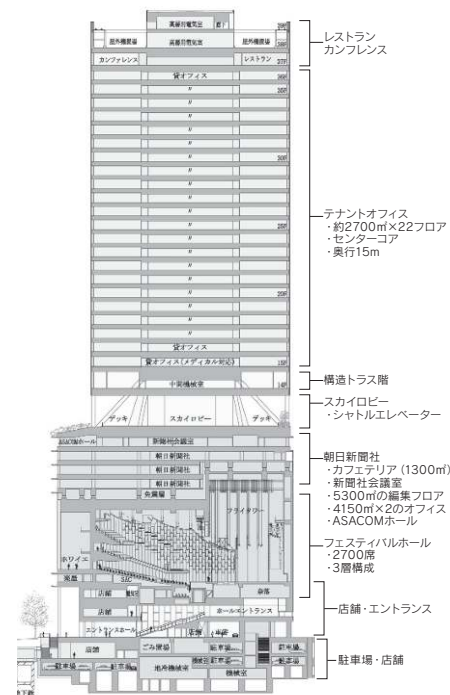


図1-1 東西断面図

●建築概要

建物名称	中之島フェスティバルタワー
建築地	大阪市北区中之島2丁目22
建築主	(株)朝日新聞社
設計監理	(株)日建設計 (音響設計協力: (株)永田音響設計)
施工	(株)竹中工務店
建物用途	劇場・本社ビル・事務所・店舗
建築規模	地上39階 地下3階
敷地面積	8,150.09㎡
延べ面積	146,054.00㎡
建物高さ	198.96m
構造	中間層免震構造 S造・SRC造・RC造
工期	34カ月 (2010年1月〜2012年10月)



図1-2 容積1600%ボリューム模型

2 建築計画

■高層棟の計画

●高層オフィス平面

中之島地区の風景として長年にわたりに親しまれてきた、朝日新聞ビルの外壁アール形状の継承が外装デザインのテーマであった。

高層オフィスは、支店需要の多い大阪のオフィスマーケットを意識して、小間仕切りでの分割がしやすいように、コーナーをアールとした奥行き15mのオフィス空間が取り囲む、センターコアの「ロの字」平面を採用した。H-400×400の構造柱を耐火被覆兼用のケイ酸カルシウム版で囲った約500角の柱を1800mmピッチに外周に設置し、柱間をエアフローウィンドーとして利用することにより、平面的に凹凸の全く無いフレキシブルでプレーンなオフィス空間とした。

このエアフローウィンドーは、腰部分から上部をフロートガラスの嵌め殺しとし、腰部分は、強化ガラスがケンドン式で脱着が可能な機構を採用し、ディテールレスで透明感のある窓廻りを実現している。

●外装カーテンウォール

カーテンウォールには、低層部のレンガ（右記参照）に呼応するように、幅530mm×H100mmのベージュ色の大判珪素質タイルを採用し、アルミカーテンウォールに乾式で取り付けるディテールとした。

ただし、万が一のタイルの破損・脱落への対応として、タイル小口に溝を切り、アルミ押出型材に機械的に引っ掛けた（さらに安全性を高めるために弾性接着剤を併用）ものをタイルユニットとし、そのタイルユニットをカーテンウォール型材に止めつけている。

タイルの色合いも7種類の色幅を設定し、遠望からの印象が、平滑とならず、自然な色むらを感じさせるように配慮した。高層部のタイルであるため間近に見ることはできないが、オフィス窓際からは、タイル張りであることが室内側から認識できるように、タイルの左右の小口を表しとした。

ガラスはアウター、インナーサッシともフロートガラスとしてコスト面に配慮しながら、アウターガラスは15～22mmの厚板を採用し、平滑で気品のあるカーテンウォールとすることができた。

（中島 究／㈱日建設計 設計部長）

■低層棟の計画

●レンガの外装

本プロジェクトでは、地下1階から地上7階までの低層部における大部分の壁面をレンガで構成した。

レンガの外壁は、この建物が建つ中之島の代表的景観をかたちづくるにふさわしい風格を持ち合わせるとともに、その風格が時とともに味わいを増し、更なる価値を生み出す理想的な材料と考え採用した。

レンガの色は、旧社屋の柔らかなベージュ色のイメージを継承しながら、還元焼成による自然な色むらをもった深く味わいのあるものをめざし、実現した。

大きさは、幅約540mm（最大のもので560mm）、高さ135mm、奥行き80mmという大変大きなもので、重量は約10kgある。これを18,000㎡の壁面に22万個の一つひとつ手作業で積み上げている。

大きなレンガは、大壁面に負けることなくその豊かな表情を見せている。

●スカイロビー

本プロジェクトでは「低層部にある2700席のホール」の中心に「高層階のセンターコア」が下りてくるという問題を解決する必要がある。

スカイロビー階を設け、高層部分のエレベータを外周部に移し、高層部の中央コアの荷重を後述のメガトラスによって外周部に流すことにより、ホールの上にセンターコアオフィスが載る計画を実現した。

スカイロビーの有機的な形状は、「風」から想起された形状で、「風」のテーマは、スカイロビーがこの建物に吹く風の通り道となり、周辺に吹く風の影響をできるだけ小さくするという役割を果たしていることから導いたものである。

外周のサッシは柱や横つなぎを一切排し、ガラスと縦方立のみで成立させている。これによりサッシのドレープ感や風に揺らめくイメージをより鮮明にさせた。

中央のコアは、EVシャフトをはじめ、各種縦シャフト類を全てガラスで構成した。この意匠は、メガトラスにより高層部分が持ち上げられている構造計画をより明快に示すことを意図したものである。

（山本武志／㈱日建設計 主管）

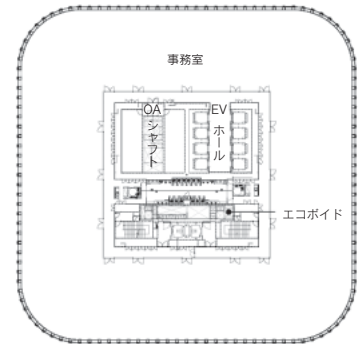


図2-1 オフィス基準階平面図

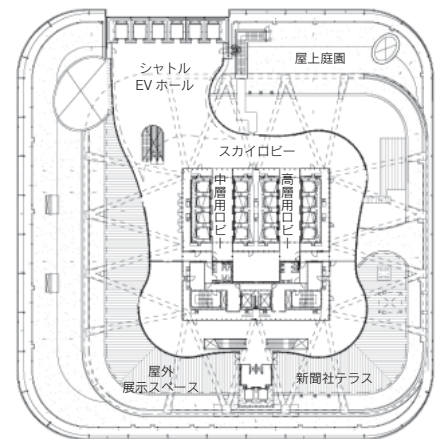


図2-2 13階（スカイロビー階）平面図



写真2-1 高層棟外装モックアップ



写真2-2 レンガのテクスチャ

3 ホールの計画

■意匠計画

2008年末に閉館した旧フェスティバルホールは国内有数の音楽ホールとして知られ50年間で4000万人の観客が来場した。生まれ変わったフェスティバルホールは幅30mの広い舞台間口、赤を基調とした椅子に代表される旧ホールの特徴を継承しつつ、舞台設備・音響など機能面のさなる進化をテーマとする「継承と進化」を設計コンセプトとしている。

新しいホールは旧ホールと同じ2700席で計画し、旧ホールの2層（1・2階席）から3層（1～3階席）としたが舞台から最後部席までの距離は新しいホールの方が2m近くした。客席椅子は幅5cm、前後4cm旧ホールより広げ観客の快適性を向上させた。内装は木を基本とし、客席の床材には高級材であるローズウッドを選定した。ローズウッドはバイオリン、ギター、クラリネットなどの楽器に多用されている。舞台上で奏でるローズウッドの楽器たちの音楽を、客席内装のローズウッドが協働して豊かな響きを観客に届ける。フェスティバルホール自体も楽器であるのです。

(甲 勝之/㈱日建設計 監理部 主管)

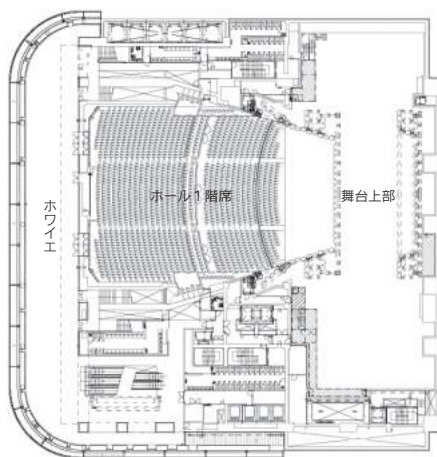


図3-1 ホール5階平面図

■音響計画

「静けさ」「よい音」「よい響き」に着目し、「継承と進化」がテーマのホールに相応しい音響性能の実現を目指した。

近接する地下鉄軌道や建築設備など建物内外からの影響の遮断と上下階のオフィス等への音漏れ防止のため防振遮音構造を採用し、NC-20未満の「静けさ」を実現している。クラシックコンサート時の音響効果を重視し、舞台開口から客席にかけて横幅を絞った平面形状や、一体型音響反射板とプロセニアム可変パネルによる舞台と客席の一体化等の工夫により、「よい響き」に重要な初期反射音（直接音に引き続き0.1秒以内に到達する反射音）が十分得られる形状とした。旧ホールにもあった壁面拡散体をより効果的に配置し、音量感がありクリアで温かい響きを得ている。音響反射板から舞台幕への転換によって響きを抑制し、ポピュラーコンサート時の明瞭さも確保している。

舞台音響設備による「良い音」の基本となる、音量、音質、分布性状、ハウリングに対する安定性等の諸特性も十分な性能が得られている。

(中川浩一/㈱日建設計 設備設計部 主管+㈱永田音響設計)

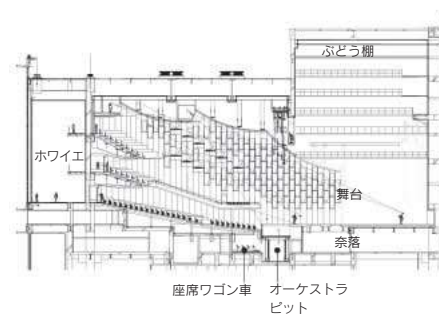


図3-2 ホール断面図

■舞台設備計画

旧ホールに比べ舞台面積が約2倍に増加し、様々な演出や舞台転換にも対応できる吊物機構や照明・音響設備の拡充と技術進化を図ると同時に、伝統的な機能性にも配慮しながら新生ホールとして到達点の高い水準と品格を兼ね備えた設備計画としている。

主舞台上部の道具バトン約20本増の54本装備し、国内最高水準の静音レベルと高速可変速制御が可能な電動ドラム巻取ウインチによる駆動方式を採用している。また、多様な演出に求められる創造的な運転操作も実現可能な運転制御システムを構築している。

クラシック公演で使用する音響反射板装置は舞台後方に格納した状態から懸垂レールに吊り下げて走行する方式を採用することで、転換作業の時間短縮と省力化を図ると同時に総重量120トンの大規模構造体を安全で迅速に運転することができる。

その他の機構には、音響効果を高めるためのプロセニアム可変パネル、前舞台にも利用するオーケストラピット迫り等を備える。

照明設備は旧ホールに比べて受電容量、調光回路数ともに2倍の規模に拡充している。また、調光制御の基幹信号にはイーサネット信号を採用して、照明技術の進歩による制御チャンネル数不足等の問題を解消した。

音響設備はデジタルミキサーを核にして音声信号は光ケーブルによるデジタル伝送を行い、また音響電源は専用ノイズカット変圧器を使用するなどノイズレス化と最良の音質を追及した。バックアップ回線としてアナログ回線も主要機器間に併設している。プロセニアムスピーカーは高性能なラインアレイ形式で構成し、良質な明瞭性と均一な音圧レベルを実現している。

(小野茂樹/㈱日建設計 監理部 主管)



写真3-1 ホール椅子詳細



写真3-2 検討に使用した1/10縮尺音響模型



写真3-3 舞台と音響反射板

4 構造計画

構造計画上の最大の命題は、座席数2700席の大ホールの上にセンターコアの超高層オフィスを積み上げることを高い構造性能を確保しながら実現する、という点である。この命題を実現するために採用した構造計画の特徴は次の2点である。

- ・高層階の荷重をホール外周部に伝達して、ホールの大空間を確保するための「巨大トラス」架構
- ・ホールとオフィスとの境界に免震層を設けた「中間層免震構造」

図4-1に本建物の架構断面図を示す。構造形式は、ホールを含む低層階が鉄骨鉄筋コンクリート造（SRC造）、オフィスとして使用する中間階と高層階が鉄骨造（S造）であり、低層階と中間階の間のホール直上部に免震層を設けた中間層免震構造を採用している。

S造の高層階については、敷地条件と使い勝手・貸室効率の観点からセンターコア形式の平面計画となっている（図4-2）。構造計画としては、耐震ブレースを組み込んだコア（センターコアフレーム）に加え、縦基調の繊細な外装イメージを活かして1.8m間隔で128本のH形鋼柱を並べたベアリングウォールの外周架構（アウトチューブフレーム）で所要剛性および耐力を確保する計画とした。コアには地震時の応答抑制と風揺れ対策の目的で、オイルダンパーを設置し、また、建物頂部には、建物全体の曲げ変形の抑制を目的としてハットトラスを設けた。

高層階と中間階の間、13～15階が本建物の最大の特徴の一つである、巨大トラスを有する部分である。この部分には、メガトラスとベルト

トラスという2つの巨大トラスを設けている（図4-3）。メガトラスは13階床から15階床までの高さ約20mを有する巨大立体トラス構造であり、高層階コアの柱軸力を支持し、高層階の外周部直下に姿を現す16本の大断面柱にその荷重を流している。また、ベルトトラスは14階の外周部に帯状に設けた平面トラスであり、高層階外周部に立つ128本の柱軸力を前述の16本の柱に集約する働きを担っている。従って、関係者間で「大臣柱」と称しているこの16本の大断面柱は、13階以上の荷重を全て支持する柱となっており、メガトラスとベルトトラスにより高層階の荷重を全て大臣柱に流すことで、低層階のホール大空間を実現しているのである。

中間階と低層階の間に設けたのが、本建物のもう一つの特徴の中間免震層である。大地震後も構造体の被害を軽微とし主要機能を確保することを目標とし、低層部がホール、高層部がオフィスという用途の違い、それぞれの構造特性の違いを勘案し、両者の間に免震層を設ける中間層免震構造を採用した。

免震装置としては鉛プラグ入り積層ゴムアイソレーター（LRB）を採用し、エネルギー吸収要素として、オイルダンパーを併用している。なお、本建物の免震層は低層階のホール直上にあるため、舞台上部のフライタワーと呼ばれる部分が2層分高い段違い免震層となっている。免震層以下の低層部（図4-4）については、ホールの遮音性に配慮してSRC造とし、十分な量の耐震壁で地震力に抵抗する計画とした。ホール外部に配された、高層部の大部分の重量を支持する16本の大臣柱は、低層部では断面

3.0m×1.5mの巨大SRC柱となっている。基礎は上部鋼管巻きの場所打ちコンクリート杭基礎であり、支持層は最も深いところで地表から約86mの第三洪積砂礫層とした（図4-1）。高い支持力が求められる杭については、杭先端部に加え、中間部にも拡径部を有する多段拡径杭を採用した。

（阿波野昌幸／株式会社 構造設計部 技師長）

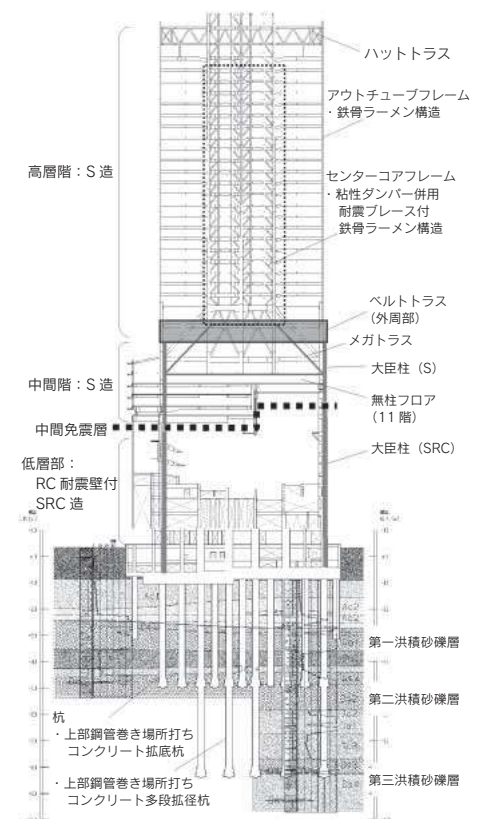


図4-1 架構断面図

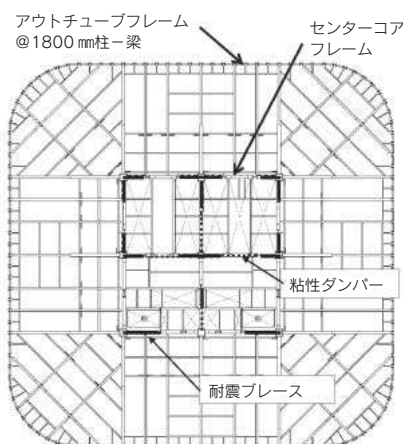


図4-2 高層標準階伏図

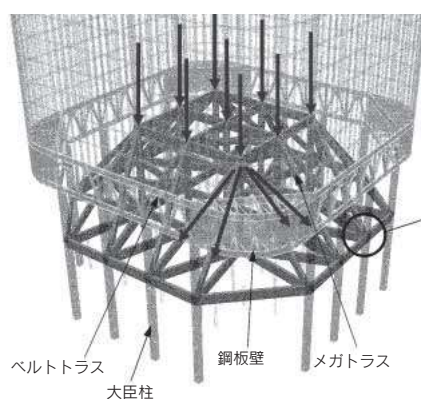


図4-3 メガトラス・ベルトトラス

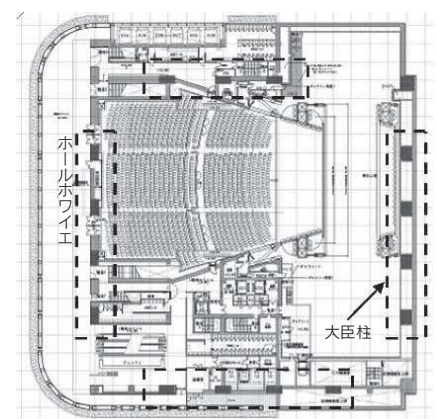


図4-4 ホール階平面図

5 環境・設備計画

大阪を代表するビジネス街、中之島におけるサステナブル建築を目指して、快適な室内環境を確保した上で、省エネルギー化を図った。川に挟まれた地の利を活かして、施設全体の熱源として、河川熱を利用した。また、既存省エネルギー技術の進化を目指して、オフィスは、アクティブスキンとタスクアンビエント空調、ホールは変風量床吹出空調などを採用した。なお、本計画は国土交通省平成21年度第2回住宅・建築関係省CO₂推進モデル事業採択プロジェクトに採用されている。

■河川水利用冷暖房システム

北側の堂島川から取水、熱交換器を通した後、南側の土佐堀川へ放流することで、河川熱を利用している。大気に放熱する冷却塔を無くし、ヒートアイランド現象を抑制している。

■テナントオフィス

- LED照明
耐久年数が高く、効率が高いLED照明をオフィス執務室に全面採用した。
- 昼光利用
明るさセンサにより、窓際を調光した。
- アクティブスキン
外部環境に応じてペリメータファンを制御して窓廻りの熱性能を変える事を目指した。
夏冬：寒暖が厳しい時は、二重ガラス内に室内空気を流し、外部熱の流入を遮断する。

春秋：内部発熱により室内は冷房が必要で、外が涼しい時は、二重ガラス内の空気の循環を止めて、断熱性を弱め外部へ放熱を促す。

- エコボイドを利用した外気冷房
高層の中央にボイドを設け、センタコアで計画が難しい外気冷房を可能とした。
- タスクアンビエント空調
人感センサにより、不在部の外気供給と空調を各々止められるようにした。

■フェスティバルホール

- 変風量床吹出空調
快適性と省エネルギー化を両立させるため、床吹出空調を採用して、給気を客席と通路の2系統に分けた。静寂な環境を要求される客席は風量を変えず、熱負荷により通路部の風量を減らして、搬送動力を減らした。
- 外気制御
観客数に応じて、効率良く、外気を温調するため、排気熱による外気の予冷予熱と、室内CO₂濃度による外気取り入量を制御した。

■水のリサイクル

雨水、空調ドレン水、雑排水、厨房排水を処理して便所洗浄水に利用した。

■エネルギー情報開示

スカイロビー情報パネルに、省エネルギーの仕組みと実測に基づく効果を表示している。
(小稲克也、牛尾智秋/株式会社 設備設計部 主管)

電力	22kV×3・SNW受電 地域冷暖房施設共用受電
照明	事務所：LED照明、昼光調光
監視	電力・空調統合監視制御
通信	統合IPネットワーク
熱源	河川水利用地域冷暖房 施設より冷水・温水受入
空調	事務所：小型分散空調 ホール：床吹出変風量空調 店舗：外調機+FCU
配管	低層・ホール：冷水・温水4管式 事務所：冷水・冷温水4管式
排煙	一般部：機械排煙、 ホール・ホワイエ：蓄煙
給水	飲用雑用二系統給水 全館加圧給水方式
給湯	局所給湯
消火	全館スプリンクラー (舞台：開放形、ホワイエ：放水形)
排水処理	生物処理+砂式ろ過

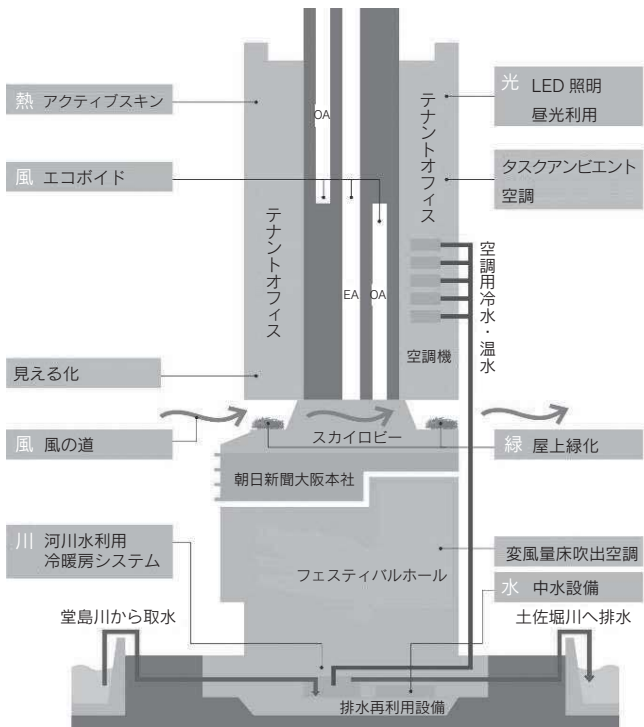


図5-1 環境配慮手法

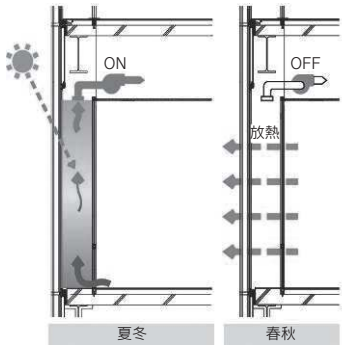


図5-2 アクティブスキン概念図



写真5-1 オフィスLED照明

メガトラス架構、超大深度多段拡張径、中間層免震、大ホール、巨大レンガ外装等、高難度の施工技術が求められた当工事は、全体工期34か月の短工期で施工することになった。

■国内最大級深度の多段拡径杭の施工

■短工期を実現した多段施工の実施

な施工量があった。また、大ホール内部も二次鉄骨へ仕上げの工事量が多く、長い工期を要した。さらに、大臣柱の軸力が大きいため、多段拡張杭でも1柱／1杭で逆打荷重を支持できず、高層鉄骨開始までに大臣柱下部の基礎躯体の完成が必要であった。これらの条件を満足させつつ、所定工期で完成させるため、地上と地下を並行施工する一般的な逆打施工で積み上げた工期をさらに8か月短縮し、躯体着手から13か月後には高層躯体を開始させる必要があった。そこで、低層部はSRCの鉄骨を先行建方して支持柱とし、免震層下部基礎レベルをトップスラブとしてSRCのRC工事と免震層より上位の高層部鉄骨工事を同時に進め、地下工事とあわせ三段の並行施工とした。

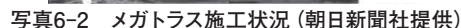
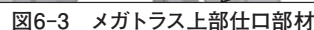
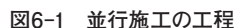
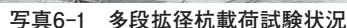
動線計画では、地下・低層・高層の3段の車両動線が1階部分で集中するため、地下へ直接車両を下す仮設スロープを設置し、資材供給・掘削搬出の効率化を図った。また、低層SRC躯体とホール内部工事の早期着手を実現するため、メガトラスは1Fからのベント構台により仮支持する工法ではなく、下階を複層にわたって仮設トラス補強して作業地盤とする工法を採用した。さらにホール1F席（建物4FL）には、段床部に仮設構台を設置し全面フラットな作業床を確保し、ラフタークレーンを据えた。

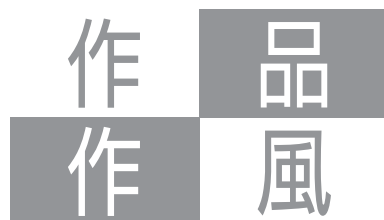
これらにより躯体の目標工期を達成し、かつ、地下・低層・高層の動線を完全分離することで施工効率向上と安全確保にも効果大であった。

メガトラスは、最大板厚100mm、単材重量が最大65^{トン}、梁成最大2400mm、総重量4500^{トン}、6mm換算の現場溶接量が24万メートルもあり、ボックス形状の柱、梁、そして24本の斜材から構成されている。各々が立体的に複雑に取り合っており、部材形状、寸法、重量共に従来のスケールをはるかに越えたものであった。新築工事着工前から、設計者・施工者・ファブ・検査会社・溶接業者等関係者の英知を結集したワーキンググループにて、製作～検査～運送～建方における課題を徹底検討し、解決を図った。構造図の詳細な照査・検討からはじめ、製作前に実物大モックアップを作成し、細部の納まり、溶接姿勢、溶接可否、変形防止策、溶接順序、UT検査の可否などを検討し、実製作に反映させた。現場施工にあたっては、部材分割を重量や仮支持方法はもちろん、現場継ぎ手の溶接姿勢・検査方法等を詳細に検討したことにより高い品質を確保することができた。100パスを超える極厚部材の生々しい溶接痕は、13Fスカイロビーにてその一部を見ることができる。

上記以外にも当工事では、沖積粘性土地盤下での地下鉄道営業線の近接施工対応、中間層免震に伴う諸課題への対応、客席数2700席のハイグレード・ホールの施工、内外装で約22万個の巨大レンガ積施工、と多くの課題を解決しながら、工事を完成させたことを報告する。

(岡橋 稔／(株)竹中工務店 工事課長)





作品募集

(社) 日本建築協会では、「建築と社会」作品作風頁に掲載する作品を募集しています。掲載作品の用途は問いません。応募をお待ちしています。

作品掲載料 カラーグラビア2頁 250,000円 (消費税込み)

* 作品作風小委員会による選定があります。

* 会員に限らずどなたでも応募できます。

問合せ先 社団法人 日本建築協会 編集事業課
TEL.06-6946-6981 FAX.06-6946-6984
E-mail : koukoku@aaj.or.jp

特集

“らしくない” 空間

空間デザインに「あるべき必然性」とは一体どういうものか。逆に、かつてより求められていた「それらしい」空間を切り崩している事例やその背景を探り、「らしくない」空間とはどういうものかを検証したい。オフィスはオフィスらしく、銀行は銀行らしく、学校は学校らしく、それぞれあるべき姿のものが、複合用途化・コンバージョン・使われ方の変化など、様々な要因により、偶然、あるいは意図的に「らしくない」姿として生まれ、営まれている建物を紹介する。

この「らしくない」空間を追求することによって、本来の「建物らしさとは何か」を浮かび上がらせることを期待するとともに、特異なデザインとして「らしくない」空間を目指したものの、それらが現実社会でどのように活かされているのかを検証することを本特集のテーマとしたい。

インテリア・住宅系分科会幹事／間瀬一博



橋をパーティー会場に グラーツ（オーストリア）

総論

“らしくない” の追求 ―既成概念のなせる業―／柏木浩一

各論

インタビュー 代官山 蔦屋書店／福田正純・外園卓也

“らしくない” 住まい／横山俊祐

海外事例に見る“らしくない” ホテル／浦 一也

一般解から個別解への転換 “オフィスらしさ” からの脱却／岸本章弘

“最もらしい” 商業施設とは／山崎康正

編集後記

企画：インテリア・住宅系分科会

川合隆之／黒柳 亮／小西貴宏／酒井雅男／谷垣浩一／塚口真佐子／ペリー史子／間瀬一博

“らしくない” の追求

—既成概念のなせる業—

ファセット・スタジオ・ジャパン代表

柏木浩一

1946年兵庫県生まれ。
1968年神戸大学卒業（建築）。同年、竹中工務店入社。プリンシパル・アーキテクト（筆頭建築家）を経て、2003～2011年兵庫県立大学環境人間学研究科教授。現在、ファセット・スタジオ・ジャパン1級建築士事務所代表。
著書に『建築家であること』（共著、日経BP社）、『インテリア・アイデンティティ』（共著、学芸出版社）、『建築概論』（共著、学芸出版社）他。
建築作品受賞に「JID大賞、BCS賞」（神戸改革派神学校）、「BCS賞」（アシックス・スポーツ工学研究所）、「インテリアプランニング賞」（須磨の浦女子高校）、「アルヴァ・アアルト生誕100年記念国際コンペ買い上げ賞」他。

私に与えられたテーマは「“らしくない”の追求」。特集企画者は「その建物らしくないものを追及することは、新たな価値を生み出しているのか？ また、最終的には『建物らしさ』とは何なのか？」を述べよと言う。らしくないから、らしさを……!?

頭を整理するため、まず、らしくないの前提となる、らしいとは何かから考えてみる。

■ヴィトンとジーンズ

白衣を着ていると医者か実験系の研究者、軍服を着用していると軍人、エプロンに白帽子ならばコックさん。らしいを代表するものの一つは、ユニフォームであろう。中身がどんな人物であろうとユニフォームさえ身につけていれば、世間は職業上のらしいを信じて疑わない。ところが、例えばその医者が飲み会で若者の流行り歌を歌いだすと「あの人、お医者さんらしくない!」となる。どうも、らしい、らしくないを判断するのに、何かの要素が介在するようである。

次に「ヴィトンを提げるジーンズ姿の女性」を思い描いていただきたい。これってらしいのか、らしくないのか。上流階級の象徴である高級バッグとブルーカラーの象徴であるジーンズが一体となる。革新的な感覚の人にはらしいと映っているが、保守的な感覚の人にはらしくないと見えている。ファッション感覚一つとっても、社会に定着するまでは不安定なものである……。結論を急げば、らしい、らしくないの鍵を握るのは「既成概念」ではないか。「既成概念」として社会に定着した段階で、らしいかららしくないへ、もしくは、らしくないかららしいへ、その評価がひっくり返るのではないだろうか。

さてこの推論は、インテリアや建築の分野でも当てはまるのだろうか。

「既成概念」という捉えどころのない精神領域を手掛かりに、インテリアや建築という物体領域を一気に突き崩すことはできない。常套手段だが「過去もの」を紐解き、その中に「既成概念」が介在する類似の現象があるのかを探ってみる。次の段階は「生きもの」。どういう風に心の働き（今日では、もう、脳の作用と言っても良いだろう）で「既成概念」

が形成され、らしい、らしくないと関わっているのか。そのシステムさえ解明できれば、自ずと答えは見つかっていくのではないだろうか。

■らしいと折衷様式

建築で、らしいと関わりそうなのがビルディング・タイプ。ビルの用途と連動した作りからも、それらしい建物と認識される。面白いことに19世紀の折衷様式の時代には、ビルディング・タイプと様式を連動させる手法が流行する。例えば、市庁舎は中世様式、博物館・図書館はルネサンス様式、劇場はバロック様式で設計される。説明しなくとも何の建物かが一目瞭然となったのである（蛇足ながら、別々の様式を内部と外部や諸室ごとに使い分ける手法や、異なる様式の細部を組み合わせたり並存させる手法も盛んとなり、その折衷ぶりはインテリアにも及ぶ。19世紀に生まれた、過去の建築群を分類・理解するための様式という概念が、カタログを選ぶように選択し組み合わせるという新たな設計手法を作り出したのである^(*)）。

それらの事例が多くなり、「このイメージは、あの用途の建物に違いない」と「既成概念」として定着してしまうと、社会システムとしても有用となるのである。もっとも、様式という分類概念が生まれる前から、らしい見せ方はあった。教会の形式、邸宅の形式、神殿の形式と、どんどん紀元前までさかのぼっていく。また日本でも、つい最近まで、銀行のらしい見せ方は、列柱のそびえたつ威風堂々とした「らしい面構え」が定番だったではないか。古今東西、特徴ある形の組み合わせが印象深く人の心に刻み込まれ既成概念となっていくことは、どうも間違いないようである。

■非日常の場・特異な住人を設定

らしい、らしくないを生み出す手法として、インテリア分野では「非日常の場、特異な住人を設定してみる」というのがある。正確には1980年代のポストモダン台頭時に流行ったといった方が良いのかもしれない。

例えば「非日常の場」の設定である。「洞窟

らしい」とくれば「薄明かりのなか、天井や壁・床がうねり連続した空間」となり、「宇宙船コックピットらしい」とくれば「ハイテク材料で仕上げられ計器類が所狭しと並べられた空間」と誰しもが思い描いてしまう^(＊2)。こうした「非日常の場」は、実物を見たことがなくとも、色んなメディアを通して知らず知らずのうち人々の頭中に、固有のらしいを創ってしまう。既成概念の仕業である。海底の洞窟、砂漠の遺跡、金鉱の坑道、酒蔵、茶室、オペラハウス、飛行機機内、ハイテク工場……、どの言葉も、他とは明らかに異なる空間性となって迫ってくる。蛇足ながらこの作用を利用して、ザッピング（テレビのチャンネルをガチャガチャと変更する行為）により、次々と「非日常的な場」を組上にのせながらイメージを絞り込んでいくという手法がある。例えば、大規模施設の一面とか地下の部分などの商業施設で、外部との繋がりがほとんど無い。そんなとき企画、設計の関係者が集まって、「今度は、静かな雰囲気のある『洞窟』でいいかい？」、「いや、若者向きに『宇宙船のコックピット』でいこうよ！」と意見を出し合い一つにまとめているのである。

同じように「特異な住人」を設定し、その人にふさわしい、即ち、らしいの舞台装置を設計していく手法がある。例えば住宅。その家の、つまらないくらい普通の住まい手が建築主だったりすると、発想の段階でノリが悪く思考が止まってしまう。そんな時、「特異な住人」にすり替えてみる。設計の手法として使うのである。例えば建築主が、マリリン・モンロー、マイケル・ジャクソン、アンネ・フランク、自殺した若き詩人、宇宙人……だった。自ずと発想が動きだす。

蛇足ながら、大学の生活系学科の1年生にこのやり方を課題で出すと効果てきめんである。特異な住人の住まいを絵で描かせ、教室を実測させ、その実測図に絵を落とし込ませる。図面なんか書いたことのない学生でも、3回の授業で、あっという間に面白い住まいが設計できたような気になって、異常なほどに設計に興味を持つこと請け合いである。ここまで過激な設定でなくとも、「海外帰国家族が友人を招いてパーティーを開催する」とい

うような少し特殊な状況を設定しイメージを絞り込む手法が、インテリア・コーディネーターの分野で流行ったのも懐かしいことである。

■ディスプレイ・プログラミングの手法化

らしいを意図した設計手法がある。バーナード・チュミ1989年新建築設計競技の趣旨文「ディスプレイ・プログラミング」の中にある。若い読者には馴染みがないと思うので、少しだけポイントを引用させていただく。

クロス・プログラミングとは、「お互い隣り合わせの状態にある二つのプログラム。お互いが競争しあうことのない関係を持つもの。例えば、人々がゴルフのトレーニングを駐車場でやっている、図書館とスイミングプールを一緒にする、競技場でフットボールとスケートを同時進行的に行う」。またトランス・プログラミングとは、「まったく無関係のプログラム（この場合は『用途』と考えても良い）に移行する、シュール・リアリスティック（ロートレアモン解剖台上でのミシンとコウモリ傘の出会いのように……）。例えば、工場を住宅に、図書館としてレストランを使う、レストランとして教会を使用する」である。

これら、らしいを意図した設計手法の発見は刺激的で、特に近年「トランス・プログラミング」手法を地でいくような建築が世界中で建築されている。話題になったものを挙げておくと、発電所を美術館にした「ティート・ギャラリー別館^(＊3)」、鉄道駅舎を美術館にした「オルセー美術館^(＊4)」、ガスタンクを住居と商業施設にした「ガソメーター^(＊5)」等である。外見と中身のイメージが全く違う。外から判断したらしいという既成概念を見事に裏切ってくる。らしいだけで新鮮なのである。伊東豊雄も「確固としたビルディング・タイプに沿ってやる限り、そう新鮮な建築が生まれにくいという確信に近いものは持ち始めています^(＊6)」と看破する。

■既成概念の脳科学

さていよいよ「人はなぜ既成概念を築き始めるのか」の本丸を攻略する。いかに脳の作

用で既成概念が形成され、らしい、らしいと関わっていくかの核心に迫っていくのである。

この解明には、心を形成するとされる脳の働きから紐解かなければならない。脳科学から幾つか引用（私の専門領域外なので誤解があるかもしれない。出典を詳記する）してみると、『節約的安定化原理』とは、なるべく少ない情報で分り易くて都合の良い安心できる結論を出すこと^(＊7)、「脳は、常に、ある『想定』のもとに現実社会に対応している（例えば、世界はある程度安定しているはず）。想定を超える変化があると体を動かす際に脳は混乱してしまう^(＊8)」、「脳はもともと思い込みの強い性質がある^(＊9)」、「変化盲は、変化（チェックイン記帳時に受付嬢が変わる）に気がつかない現象（人が突然入れ変わることはないとの暗黙の前提で日常生活する）^(＊10)」、「意識的に何かに注意を向けるとき、無意識のうちに自分の記憶をふりいにかける、その認識と結びついている幾つかの記憶だけを意識化する^(＊11)」、「心的イメージ（知覚像）は、外界の像が未処理のまま心の中に保存されているものではない、それはすでに処理され、構造化され、意味を付与されたものである^(＊12)」、「脳は情報に『価値』があるかを大雑把に判断、より詳しい分析を『認知』。価値情報システムは、入力情報が認知情報システムを高速検索するためのインデックス付加をおこなうシステム^(＊13)」、「潜在記憶とは、無意識的に見ることができるのと同じように無意識的に覚えることができること^(＊14)」、「直観情報処理とは、初期外因シンボル処理形成と多様相連化による粗いが素早い概念化処理。扁桃体出力経路が新皮質に粗い概念信号を送っている。霊長類は、直観の駆動をさらに有効に利用する機構を開発。予測・想像・イメージ^(＊15)」とある。

もうお分かりであろう。五感覚から入力される膨大な情報をそのまま知覚にまで至らせようとすると、脳がもたない。情報処理に疲れ切ってしまうのである。そのため、下等動物と異なり人への進化の過程で「手を抜くシステム」を構築してしまった。自分にとって価値のない情報を無視するのと同様に、一旦、

既成概念で処理したものに、いちいち疑義をはさんでいる暇を持たない。らしいと判断したら、瞬時に次の作業に取り掛かるのである。

■単純形での知覚

既成概念の存在理由が解き明かされたとして、次はどんな形態が記憶として定着しやすいかである。

記憶は、まるごとそのままするのではない。何か特徴を掴んでザックリと知覚・認知する。ということは、特徴のある「単純な形」の組み合わせに可能性があるようだ。これも脳科学から抜き書きしてみると、「パイナップルの葉っぱに反応した細胞は星印のようなものがあれば反応する。抽出された図形の基本パターンは500個、この組み合わせで複雑なものを認識可能とする^(※16)」、「複雑な視覚イメージの基本要素となる文字（単純化された図形）の数は1000程度、例えば、中央が白く抜けた黒い円・縞模様は、基本となる刺激^(※17)」、「36個のジオン、ジオンはかたちをつくるアルファベット^(※18)」、「ピーダーマンの『ジオン』は、どんな複雑な形でも24種類の基本形（例えば、直方体、円柱、円錐形、くさび形）の組み合わせ^(※19)」とある。

記憶に残る形の数に大きく差があるが、あらゆる角度から実験されている過度的状況では致し方あるまい。でも、膨大な情報を、効率よく、単純な形とその組み合わせで知覚していることだけは間違いないようである。例えばある日、私が髪型をがらりと変えて登場する。下等動物だと別人と知覚するようだが、高等動物の人間は私だと識別し「え！どうしたの？」と驚く。特徴ある形とその組み合わせをピックアップして記憶しているので、かなりの変化にも対応できるのである。……と言うことは、真似をしたいインテリアや建築に潜む特徴ある形や組合せを読み解き、それを自分の設計に呼び込めば、らしいを再現することは比較的容易なのかもしれない。

■視覚認識の構造

結論めいたことを先に言ってしまったが、改めてインテリアや建築分野で重要な視覚認識の構造を整理しておきたい。ここにも、らしい

の手掛りがあるかもしれないからである。

我々の職業分野が視覚偏重であることは否めない。設計職能のアウトプットが図面の類だからである。でも視覚至上に胡坐をかいてみると、とんでもない落とし穴がある。その視覚は自分の好みで作り上げたもので真実とも言えないからである……。脳科学に登場していただくと、「2次元画像を3次元に戻す過程で脳は過去の経験や物理法則についての前提知識をうまく利用する。最終的に得られる情報はいわば捏造したもの^(※20)」、「影があるように見えれば、人間の目はそこに奥行きを感じてしまう^(※21)」、「遮蔽関係とは、物体が部分的に他の物体で覆い隠されていたりキャストシャドウ（物体が自らに落とす影）ができていたりすると奥行きを感じる手がかりになる^(※22)」、「視覚認知におよぼされる『トップダウン形式』の影響とは、視野の部分（盲点）に経験すべく、期待するに相応しいものなどによって補填されること^(※23)」、「2次元網膜像と拘束条件（3次元物理世界のルール）から3次元構造の復元。盲点で証明される^(※24)」とある。

少し補足させていただくと、そもそも視覚認識の不思議なところは、見る対象物が立体という3次元であるのに、眼球の網膜に投影された時点では2次元図像に1次元減少している。それを脳の中で再び、こっそりと、立体という3次元に復元していることである。「脳の中で捏造したもの」と言われても、論理的には返す言葉もない。内実は、脳の中のあらゆる過去の経験・知識を総動員し「既成概念での決めつけ」と言う荒っぽい方法を駆使して、瞬時に足りないところも補っているのである。原始的な脳も併せ持つ我々は、知覚不可能だと自己の生命も危うくなると思うらしく、盲点（本来は網膜の構造上、情報が入力されない部分で見えるはずがない）すら、無理やり見てしまう。動物としての生存本能である。……ということは、例えば室内に障壁などを立てると、見えない向こう、知覚不可能な部分に異常な関心を持つということになる。らしいの探究からは脱線するが、これは設計の手法としても大いに使えそうである。

■1/2視覚+4感覚

脳科学の最後に「らしいの追求」とは距離を置くが、視覚偏重でない設計分野にも少し触れておきたい。この、見えない領域の設計という高度な手法もインテリア、建築の分野ではおこなわれている。視覚に頼らず「場の空気感」みたいなものを設計するのである。図像をデザインするのではなく、ちょうど薄目を開け残りの4感覚で空間を感じさせる設計のことである。解りやすく「1/2視覚+4感覚」の手法とでも言うておこう。「何か、ここ落ち着くよね。ここへ来るとホッとするんだよ……」とか言う類の空間づくりである。

実験の前提条件は不明であるが脳科学に以下のデータがある。「脳に影響を与える入力刺激の割合は、視覚83.0%、聴覚11.0%、臭覚3.5%、触覚1.5%、味覚1.0%^(※25)」、「マガーク効果とは、矛盾する2つの刺激に視覚情報が優位となること^(※26)」、「脳使用の30%は視覚とそれに係わる処理^(※27)」、「視覚情報が脳の20小領域を次々と転送される^(※28)」。いかに視覚からの入力膨大で、絶対的で、その処理に費やすエネルギーの多大なことか……。あえて一旦、この疲れてしまう視覚からの入力を少なく設定してみる。そのとき立ち上がってくる「空間のもつ空気感」を強調する方向でデザインするのである。

改めて、1/2視覚の意図することを脳の作用から明らかにしておこう。

脳科学の知見に「上丘は、緊急時のための視覚系。事態に関連する視覚情報を即意識に上らせることもできる^(※29)」、「目からの信号を処理する部位は、視覚野と上丘を含め10にのぼる^(※30)」とある。また、我々の分野でも一時話題となったものであるが「知覚には、『ヘルムホルツの見解』（無意識的推論を経て成立とする説。主体内に蓄積した既存の知識や記憶、および期待や推論などの内的媒介過程が積極的に働くことにより成立）と『ギブソンの見解』（環境中の情報を直接検出することによって成立とする説。解釈や推論などの内的処理は必要ない）^(※31)」とある。要は、我々が視覚と一枚岩のように考えているものが、そうでない。人間への進化以

前から引きずっている原始的な視覚類と、進化の過程で容量が大きくなった大脳を駆使する高度な視覚の、複数を駆使して世界を見ているのである。私の問題にする1/2視覚とは原始的な視覚のほうで、上記の「ギブソンの見解」に当るのだろうか。高度な個々の形態の正確な視覚認識でなく、ざっくりした光や影が、空気感の設計には大切であることを指摘したかったのである。この領域はもっと詳述したいが、今回の特集趣旨から外れていくので、この辺でやめておく。

■「建物らしさ」とは何なのか？

企画趣旨にあるように、本特集の目的は、“らしくない”空間とは一体どういうものかを検証することで、本来の「建物らしさ」とは何なのかを浮かび上がらせることにあるらしい。私に課せられたテーマ「“らしくない”の追求」からこれらを導くのは少々荷が重いが、総論を任されたものとして逃げる訳にはいかない。多少乱暴であるが私なりの回答を出してみる。

まず、「らしくない空間とは一体どういうものか」への回答である。

既に述べたように、らしくない空間とは「既成概念を覆したところ」にあるようだ。その実例として今回取り上げられる「代官山 蔦屋書店」を見に行った。たしかに書店という既成概念をことごとく覆し、今までになかった驚くほど新鮮な雰囲気醸し出している。上手である。大部屋に書架がずらりと並ぶのではなくコーナー空間の連続体に手の届かない天井までの書架、書店一画の喫茶コーナーではなく書架と豊かに一体となった気持ちのいいラウンジ、凄まじいのは書架の横に飲食部分が広がりウイスキーを飲みながらバックナンバーを読みCADを操る人のいる空間。書店らしくないのである（見方を変えれば、住宅の居間で飲食しながら本を読みCADを操る雰囲気。書店らしくないけれど住宅の居間らしいとも言える）。ただ、このらしくないも、それが新たなビルディング・タイプとして量産され、社会の既成概念となっていくときは、その新鮮な魅力を徐々に失っていく。らしくないは、常に消費される運命にあるのか

もしれない……。

次に、「本来の『建物らしさ』とは何なのか」への回答である。

「建物らしさ」は、前述の既成概念を精査する中に、まだまだ素晴らしい手掛りは残っている。ただ、「本来の……」という前提を置く限り、それ以外に二つの原点遡行が必要だと思う。一つは、今日のモダニズムでは不可解なもの、科学的に価値を証明できないとして切り捨てられてきたものを見直すこと。合理性、機能性では評価できないが「人生に潤いをもたらすもの」の中に手掛りが潜んでいると思う。もう一つは、もっと遡行して「人間の脳にも残存する『原始的な脳』が欲するもの（人の本能領域）」にまで手掛りを求めること、だと思う……。

（かしわぎ こういち）

出典

- (※1) 2005年『図説・西洋建築史』陣内秀信＋他（彰国社）：165頁
- (※2) 2003年『建築概論』柏木浩一＋他（学芸出版社）：119頁
- (※3) 2000年「テイト・ギャラリー別館」設計：ヘルツォーク＋ド・ムーロン。1980年代初頭まで稼働の火力発電所を近代美術館に用途変更したもの。155×35mの巨大なタービン室をギャラリーに仕立てている。
- (※4) 1986年「オルセー美術館」設計：ACTアルシテクトゥール＋ガエ・アウレンティエー。1900年完成の鉄道駅舎を、ルーブルの印象派美術館として再生。駅舎としての細長い平面形状は、美術館として多少無理な個所も作り出すが、ヴォールト状の高い天井と一体となった見事な大空間を産みだしている。
- (※5) 2001年「ガソメーター」設計：ジャン・ヌーベル＋コープ・ヒンメルブラウ＋他。築100年のガスタンクを615戸の集合住宅、オフィス、ショッピングセンター、ホールに改修。外壁と屋根のフレームを生かすのがコンペ条件。
- (※6) 1994年『10+1』(INAX)：105頁
- (※7) 2004年『あぶない脳』澤口俊之（ちくま新書）：32頁
- (※8) 2004年『Mind Hacks』トム・スタッフォード＋他（オライリー・ジャパン）：231頁
- (※9) 2002年『海馬 脳は疲れない』池谷祐二十糸井重里（朝日出版社）：102頁
- (※10) 2006年『脳はなにかと言いつつ』池谷裕二（祥伝社）：90頁
- (※11) 1999年『脳の時計、ゲノムの時計』ロバート・ボラック（早川書房）：79頁
- (※12) 1996年『認知心理学を知る・3』市川伸一＋他（ブレーン出版）：102頁
- (※13) 1996年『愛は脳を活性化する』松本元（岩波書店）：16頁

- (※14) 2002年『脳と心的世界』マーク・ソームズ＋他（星和書店）：120頁
- (※15) 2002年『情と意の脳科学』松本元＋他（培風館）：241・242頁
- (※16) 2002年『海馬 脳は疲れない』池谷祐二十糸井重里（朝日出版社）：233～235頁
- (※17) 1998年『心や意識は脳のどこにあるのか』ニコラス・ウェイド（翔泳社）：46頁
- (※18) 2008年『感覚知覚心理学』菊池正（朝倉書店）：89頁
- (※19) 1997年『複雑性としての身体』養老孟司＋他（河出書房新社）：79頁
- (※20) 2004年『Mind Hacks』トム・スタッフォード＋他（オライリー・ジャパン）：85頁
- (※21) 2004年『Mind Hacks』トム・スタッフォード＋他（オライリー・ジャパン）：67頁
- (※22) 2004年『Mind Hacks』トム・スタッフォード＋他（オライリー・ジャパン）：78頁
- (※23) 2002年『脳と心的世界』マーク・ソームズ＋他（星和書店）：226頁
- (※24) 1999年『実験医学Vol.17脳・神経科学の最先端』御子柴克彦・編（羊土社）：160頁
- (※25) 2007年『竹中技術研究所報』
- (※26) 2001年『心を生み出す脳のシステム』茂木健一郎（日本放送出版協会）：73頁
- (※27) 1996年『意識とは何か』荻阪直行（岩波書店）：21頁
- (※28) 1993年『脳と心を考える』伊藤正男（紀伊国屋書店）：59頁
- (※29) 2004年『Mind Hacks』トム・スタッフォード＋他（オライリー・ジャパン）：42頁
- (※30) 2004年『Mind Hacks』トム・スタッフォード＋他（オライリー・ジャパン）：145頁
- (※31) 1996年『認知心理学を知る・第3版』市川伸一＋他（ブレーン出版）：11・13・16頁

インタビュー 代官山 蔦屋書店

カルチャ・コンビニエンス
・クラブ株式会社

福田正純
外蘭卓也

●福田正純
1969年生まれ。
大阪芸術大学 デザイン学科卒業。
全国のTSUTAYAの店舗設計に携わり、2010
年代官山プロジェクトに参画。現在も大型店
のプロジェクトを中心に設計を進めている。

●外蘭卓也
1974年生まれ。
京都市立芸術大学デザイン学科卒業。
2009年より代官山プロジェクトに参画、コ
ミュニケーション企画担当。現在、カルチュ
ア・コンビニエンス・クラブの広報を担当。

代官山の旧山手通り沿いの緑豊かな広大な敷地にある複合施設「代官山T-SITE」。その中心となる「代官山 蔦屋書店」には、書籍・CD・DVD販売のコンテンツのほかに、ライブラリーラウンジやカフェ、文具コーナーにトラベルカウンターまでがパッケージされている。建築 クライン ダイサム アーキテクト、グラフィックデザイナー 原研哉氏、クリエイティブディレクター 池貝知子氏などが参画し、いままでの書店のイメージを変えるまでに至ったプロジェクトについて、TSUTAYAを展開するカルチャ・コンビニエンス・クラブ株式会社（代表取締役兼CEO増田宗昭氏）の店舗設計担当の福田正純氏と広報担当の外蘭卓也氏にお聞きした。

■今までの書店からは「らしくない」蔦屋書店

—「代官山 蔦屋書店」を企画された経緯を教えてください。

外蘭：TSUTAYA 1号店がオープンした1983年から、我々の顧客の中心は若者で、10代～40歳が多い状況でした。しかし、その当時若者だった方々が団塊の世代になりました。2012年の今、日本の人口統計では、35歳以下の人口が減少傾向となっており、逆に団塊の世代と呼ばれる60歳代は多いことが見て取れます。今回のプロジェクトでは、団塊の世代

を中心に55歳以上をターゲットとして、「大人のための書店」をビジョンに掲げました。

—「大人のための書店」とはどのようなものでしょうか。

外蘭：我々は、団塊の世代を「シニア」ではなく、「プレミアエイジ」と呼んでいます。音楽業界やクリエイターの中でも団塊の世代でありながら、今も第一線で業界をリードし発信を続けている方々に注目しました。私たちは今も影響力のあるこのような方々を「大人を変える大人たち」とであると位置付けています。そうした60歳近い年代で、アンテナの感度の高い方々にも来てほしい場所として「代官山 蔦屋書店」を考えました。

■シニアではない「プレミアエイジ」

—「プレミアエイジ」とよばれる大人たちをどのようにとらえて、かたちに結び付けたのでしょうか。

外蘭：我々が思っていた以上に「プレミアエイジ」は一般的にイメージするシニアではなく、想像以上に闊達な人たちでした。いわゆる、「おじいさん」や「おばあさん」ではありません。実は、今の若い世代よりももっと海外旅行の経験もあり、時代の変化の中でコンビニやファミリーレストラン、インターネットなどが普及したときにも、常に最先端のものを利用してきた方々だったのです。今まで、



3つに分かれている棟を対面する窓により一体化を図る

私たちはそういった人たちを、正確にとらえきれていなかったと思います。

シニアマーケットにはいろいろな企業がトライアルしていますが、成功事例は多くはありません。我々は、多くのマーケティング調査をする一方、60代である当社のCEOの増田本人がお客さんの気持ちになって、一番欲しい店やサービスを具現化したものになっています。

当初、書店内のラウンジ「Anjin」になぜ、増田が「平凡パンチ」を全巻集めることにこだわるのかがわからなかったのですが、オープンしてみると、「平凡パンチ」のアーカイブに60代が共感されるということがよくわかりました。増田の様な「活動的なプレミアエイジ」が行きたいと思う書店の実現にチャレンジできたと思います。

オープンの後に気付いたのですが、リアルな本として「平凡パンチ」のバックナンバーに触れるということは、シニアの人たちではなくても、若い人たちにとって新しい刺激となっており、それが集客にもつながっていると感じます。

このプロジェクトを通じて、世代を超えたプレミアムな人たちのライフスタイルが見えてきました。「代官山 蔦屋書店」は、単なる本屋ではなく、ライフスタイルを提案していると思います。

■本へのこだわり

—「ライフスタイルの提案」とのことですが、その中心は「本」なのでしょうか。

福田：そうですね。一番重要なのは「本」で間違いありません。それぞれの空間で本をどう見せるかにこだわっているように、本が第一の優先順位です。レンタルやCDなどは流行がありますが、本は普遍的なものと考えています。

あまり語られてはいませんが、最初の頃は、もともとこの場所が、徳川家の跡地で、長い間、森のようになっていたイメージを継承しようということで「森の中の図書館」をつくろうと考えていました。

外園：「マガジストリート」は全長55m、全部で30,000冊、2,300種類の雑誌が並べあり、ほぼ世界一の品ぞろえです。3つの建物の真ん中を串刺しするようにマガジストリートが通っており、両サイドに、車、旅行などの小部屋があります。その小部屋をそれぞれの専門のコンシェルジュが管理しており、いわば、神保町の小さな専門書店がひとつの建物の中に集まっているようなかたちです。

中央の建物の2Fにある「Anjin」は、「平凡パンチ」や「Vogue」などの雑誌のバックナンバーを創刊号から最後まですべてを揃えているラウンジです。ネーミングは、^{みうらあん}三浦按

^{じん}針（江戸初期に徳川家康に仕えたイギリス人、ウィリアム・アダムス）からとっていて、未来の道先案内人の様な意味合いでつけています。正面の巨大な屏風とクラシックなソファで落ち着いた空間になっています。

—「Anjin」は、「代官山 蔦屋書店」の象徴的な場所なのでしょうか。

外園：はい。心臓部だと思います。もともとはいろいろなカフェのプランが出ていましたが、伝統的なホテルにあるような、少し威厳のあるラウンジが必要と考えました。

福田：この「Anjin」が、一番苦勞した部分です。プランが二転三転して、いまでは「プレミアエイジ」のための落ち着いた空間になっていますが、この空間ができるまでに、近くのマンスションの一部屋に内装も同じモックアップをつくり、何回もやり直しをしています。「Anjin」の小さいバージョンにコストをかけて同じインテリアのものをつくり、家具を選ぶのにも時間をかけました。そこまで検証してから本番に臨みました。

「Anjin」は、池貝さんのアイデンティティが詰まった空間です。たとえば、「平凡パンチ」などのバックナンバーを置いていますが、普通に古い雑誌をおくと、本棚がきれいに見えないばかりか、むしろ、汚く見えてしまいます。ここでは、合本にしてきれいな表紙で並べたら空間に映えるのではないか、という



T字ファサードとマガジストリート



建築コンペ時の模型



3万冊2300種類の雑誌のそろうマガジストリート

池貝さんの提案を実現しています。

外 菌：池貝さんはジャンルを問わず、ディテールまで細やかにすべてをディレクションされました。その結果、オリジナリティーがあると評価を受けていると思います。

■「選ぶ場」にふさわしい場所

— インテリアのコンセプトについてお聞かせください。

外 菌：モノがあふれている時代のなかで、人がモノを買うにあたり、どのような場所をつくったらよいのかを考え、モノを「買う場」ではなくて「選ぶ場」にしようと考えました。一般の方におこなった代官山にあったらいい施設は何か？というリサーチデータでは、「落ち着いて、くつろげる場所」というニーズがあることがわかっていたので、「お家」のようにくつろぎながら選ぶ場となるよう、「お家」の感覚をお店のインテリアに生かすことにしました。

— 「お家」の感覚とはどういうものなのでしょうか。

福田：「小部屋」が、ひとつのキーワードとなっています。本の売り場は、大空間ではなく、各々のテーマごとに8畳くらいの小さい空間に区切られています。それぞれの専属コンシェルジュがひとりで仕入れから陳列まですべてを管理しているため、彼らの感性が生

かされた空間になっています。まるで、自分の家の書斎の様にくつろいでもらえる。それが、今回の本売り場における「お家」感です。

外 菌：それに加えて、照明、家具なども工夫をしました。「マガジnstロート」では、照明の直接光源が見えないように間接照明やランプシェードなど、優しい光の「お家」感を出すようにしました。また、通路幅を小さくしてわざと人と人がすれ違うときの距離感に配慮しました。

福田：普通の本屋さんに行くと、家具はスチールなどの金物の什器ですが、今回は徹底的に本売り場も木製什器にこだわりました。その分、コストはだいぶ上がってしまいましたが、木のぬくもりを感じる質感を大事にできました。増田からは「新しさだけではなく、経年変化を楽しめる店にしよう。いつまでたっても、10年、100年たっても流行り廃りに左右されない、味わいが出る空間にしてほしい」というオーダーをもらっていたため、什器の質感以外にも、照明、床材といったものの質感を大切に設計しました。

外 菌：キーワードの「経年変化」は、プロジェクトの初期、建築のコンペ時から出ていました。

福田：建築と内装を担当されたクラインさんらしいデザインは、比較的、前衛的でポップだと思うのですが、今回のプロジェクトで

は、彼らしいテイストのみではなく、インテリアでは「経年変化」などの我々の要望も取り込み、過去のものとは異なる新しいディテールが生まれていると思います。

■本屋にできる最大限のこと

— 「書店らしくない書店」と感じたのですが、いかがでしょうか。

福田：「らしくない」ときいて、「らしくない」半面、「らしい」のかな？と思っています。この店は代官山でしか実現できなかったと思います。このような特殊な立地だったからです。うまく立地と重なって、代官山だけの「らしい」店が出来たのではないかと、「らしくない」とも「らしい」とも、どちらでもとれるのではないのでしょうか。

書店と言うと、普通は本しか置いていないけれど、「代官山 蔦屋書店」は書店と言いつつも書店ではないかもしれません。書店でもあり、カフェでもあり、代官山に住んでいる人のリクエストを全部入れ込んだ楽しく過ごしてもらおう空間ができたのだと思います。

— 本質的な書店らしさを実現した「代官山 蔦屋書店」が、いままでの書店にはないかたちなので、「らしくない」ように感じたようですね。

福田、外 菌：そうですね。

外 菌：「代官山 蔦屋書店」は、上質な時間



ラウンジ「Anjin」



バックナンバーが揃う本棚



本を積み重ねたカウンター

を提供する場所であって、書店というカテゴリーではないのかもしれませんが。今、アマゾンなどネットを使うことで、非常に手軽にものが手に入る時代になっています。そういう時代だからこそ、今、本屋が出来る最大限のことをやろうとしています。リアルに体験できることの大切さを具現化するためにコンシェルジュがいるように、書店の形を追究したのが「代官山 蔦屋書店」ともいえるかもしれません。

■反響

一オープン後の反響は、予想どおりでしょうか。

福田：「プレミアエイジ」をターゲットとしてはいましたが、途中から、プレミアムな人（VIP）をターゲットにすれば、感度の高い若い世代の人たちも必然的に共感してもらえるだろうと考えていました。東京に限らず、感度の高い人たちは、全国から集まって来ます。そういう意味では、予想以上の反応をいただいています。

外薗：エッジのたった人たちを狙っていけば、フォロワーもちゃんと付いてきくささるというのは想定通りでした。

福田：エッジのたった人たちとは、若い人たちだけではなく、年配の実績のある方々も指しています。ただ単に若くてエッジのたった

人たちだけでは、流行り廃りで、すぐになくなってしまいます。そういったVIPが来られていることが大事で、安心感にもつながっています。

外薗：ここでいう、VIPとは、経済的に豊かな人という意味ではありません。感性が高く、時間をうまく使いたいと思う人だと思っています。それはオープンしてから理解できたことでした。

一逆に予期しえなかったことはありますか。

福田：このプロジェクトをきっかけに、多くの方々からお話をいただきました。佐賀県武雄市の市長が図書館プロジェクトで見に来られ、ぜひうちの図書館も「代官山 蔦屋書店」のようなコンセプトやノウハウを導入してほしいとの要請をうけて、プロジェクトに参画し、2013年の4月にオープンする予定です。

外薗：オープン後1年間、予想しなかった出会いやご縁がたくさんありました。おかげ様で日々たくさんのイベントも開催させていただいています。リアルな場所が引き付ける力はすごいと改めて実感しました。

また、非常にたくさんの人に来ていただき、敷地前の通行客数がもともと1,500人／日であったのが、オープン後は10,000人強、週末は30,000人となりました。代官山駅の乗降者数は、2割増えたと聞いています。もともと地域との共生もテーマに掲げていましたので

街と共に活性化しているのはとても嬉しいことです。

福田：そもそも、この場所は、集客の観点からは住宅地も近く、商売に適した立地ではありません。普通の書店は、どうしても駅前などに建てなければ、成立しません。このプロジェクトではこの場所に来る理由をしっかりとつくっていかうと肝に銘じて、店づくりをしました。

外薗：人が来ないからこそ、企画が出来るのだと増田はよく言います。人がいるところだと、何をオープンしても形になってしましますが、人がいないからこそ、いろいろな工夫が出来るし、価値のあることを真剣に考えることができます。だからこそ、不利な立地の代官山を選んだといえます。

今後も皆様に喜んでいただける施設になるよう、様々な工夫とトライアルを行なっていくと思います。

（ふくだ まさずみ／ほかぞの たくや）

聞き手 谷垣浩一／日建スペースデザイン



計画前の代官山 旧山手通りと敷地



フロントも新しい店名ロゴ。原研哉氏のデザインで、代官山蔦屋書店のコンセプトを表現している。

Photo by Nacasa & Partners

「らしくない」 住まい

大阪市立大学大学院教授

横山俊祐

1954年福岡県生まれ。

東京大学大学院工学研究科建築学専攻単位取得退学後、熊本大学工学部建築学科助手などを経て、現在、大阪市立大学大学院教授。

専門は建築計画学。集合住宅、教育施設、地域施設、福祉施設、まちづくり等を研究対象として、「住民の住民による住民のための建築計画」をモットーに、利用者の立場からの計画の課題やありようを提起することに重点を置く。

主な著書に、「これからの集合住宅づくり」（晶文社）、「住まい論」（放送大学）など。熊本アートポリス推進賞、日本建築学会作品選奨などを受賞。

■「らしくなさ」への期待

「らしさ」が、あるものに固有の本質・典型（アイデンティティ）であり、さらには、内面を基準にした外面の整合性の問題でもあるとするならば、建築でいうビルディングタイプは、「らしさ」の典型であろう。「らしさ」は固定的・永続的なものではなく、時代・地域によって変化する。今日、「住宅らしい住宅」が褒め言葉に聞こえないのは、「住宅らしさ」の既定概念が現代の居住観や家族観に対応していないことの証左であろう。nLDKに代表される陳腐化した住宅計画からいかに逸脱するかなど、賞味期限の切れた「住宅らしさ」の呪縛からの解放に向けて、あるいは、「住宅らしさ」そのものの価値や意義の希薄化・流動化を踏まえて、デザインやカタチといった表層的なレベルでの「らしくない住宅」が数多く提起されている。残念ながら、それらの試みは、常態化した住宅観を変革する力にはなり得ていないようだ。

「らしくない住まい」への期待は、外面としてのカタチの問題に留まるのではなく、寧ろ、「らしさ」の枠組み自体を転換すること、あるいは、「らしさ」とは次元の異なる超越性をもって新たな住世界を構築することにある。それには、カタチとクラシがともに「らしくない」ことで、「らしくなさ×らしくなさ」という相乗性のある強さと仕組みが求められる。それこそが型破りの住まいとしての潔さや清々しさを有するのだと思う。ここでは、カタチとクラシともに「らしくない住まい」として、不便さの中に暮らしの本質的な豊かさが垣間見えるものを紹介したい。

■下寺住宅：バイタル出し家

わが国の集合住宅は、画一的なプランと最低限の仕様によって単調で無機質な外観を呈している。それに対して、大阪市浪速区に

あった大阪市営下寺住宅は、各々のバルコニーから空中に張り出すように増築されたアクロバティックな「出し家」が、有機的で迫力のあるファサードをかたちづくり、「日本の集合住宅」らしからぬバイタルな集住景観を生成していた（写真1）。生活への執念と場の確保に向けての究極のやりくりの結果であり、予定調和的な計画・デザインを旨とする建築家の職能では実現不能な、アドホック（場あたる）なブリコラージュでもある。

1931年にRC造で建設され、戦後の混乱期や第一次・二次ベビーブームを契機として、6畳＋3畳という住戸の狭小性を補うために、幾度となく「出し家」の増築が行われ、全体の約8割を占めるに至った。当初は、子供部屋が主流であったが、家族人数が減少すると、余剰空間として、個性的なライフスタイルが展開される場になった。出し家は、住まうことの主体性と小さな豊かさの実践である。

① [カラオケステージ]：一段高い床レベルを活用して、出し家はカラオケセットが置かれたステージとなり、のど自慢の賞状の展示場所になっている。手前の6畳が観客席となっており、同好の士が集まって大いに盛り上がったと想像される。住み手による空間のアフォーダンスを生かした使われ方である。（写真2）

② [ホワイトルーム]：出し家の増築を機に内部をすべて白色に塗装している。出し家には、白のマットレスが敷かれ、天井にはステレオスピーカーが設置されている。小振りな出し家の包み込むようなスケール感と白のインテリアとが相俟って、あたかもレースの天蓋付きのベッドを思わせるような幻想的な夢空間を創造している。（写真3）

③ [メゾネット出し家]：使用している上下二住戸の行き来に便利のように、二階建ての出し家をつくり、階段を設置している。住戸本体の床スラブを破壊せずにメゾネット住宅が実現されている。



写真1 出し家全景



写真2 カラオケステージ



写真3 白の夢空間

■大阪長屋：間口2間のお屋敷

長屋といえば、破れ障子に六畳一間の八つあん、熊さんの庶民的な住まいを想像するが、大阪市阿倍野区昭和町・阪南町の長屋は、間口がたったの2間程度ながらも、長屋らしからぬお屋敷の趣を醸し出している。平瓦の載った板塀・漆喰塀に数寄屋風の外玄関や式台玄関、一間幅をわざわざ四つ割りの舞良戸として左右に引き分け、その先の長押付きの2・3畳の取次ぎの間など、アプローチ空間から格式性が意図されている。裏庭・縁側に面して、床の間・違い棚・天袋・地袋・付け書院・長押などを備えた本座敷が配置され、同様な仕様の二階座敷までもが設けられている。透し彫りや障子の欄間、円窓の下地窓、縁側の化粧垂木、簾掛けなど、書院風・数寄屋風の趣味の良い造作が随所に見られる。(図1)

洋風化にも敏感であり、当時のお屋敷で流行した和洋折衷型を取り入れ、母屋を和風に、通りに向いた棟を洋館にした長屋、さらには、玄関ポーチ、急勾配の屋根、スパニッシュ瓦、突き出し窓、ガラリの小屋裏換気口、二階バルコニー、下見板張りなど、外観上は完璧な洋館づくりの長屋もある。残念ながら、内部は畳の敷かれた和室で構成され、洋館らしからぬ和のしつらえとなっている。(写真4)

いま一つの「らしからぬ」特質は、都市型住宅としての緻密な計画手法にある。1924～31年に、阪南土地区画整理事業が行われ、スプロール化する人口の受け皿が先行的（予防的）に整備される。その際、①長屋建設を見越して街区のサイズ（幅60間×奥行き20間）を決定するといった基盤と上物の一体的な整備、②街区に3尺の背割り路地を設け、各戸の裏庭、便所、物干し台を集め、表通りから視覚的・物理的に完全に分離された裏空間を形成、③表通りは、対面アクセスと1.5尺の壁面後退によって、向こう三軒両隣の付き合



写真4 洋館長屋

いや植栽帯が誘発され、オモテの性格が強化されている。特に、背割り線が汲取り路地となることで、表通りからの汲取りが回避され、住戸内に通り土間を設けたり、東京・月島のように二戸一長屋として、妻側に汲取り口への出入りのための隙間を設ける必要がなくなり、フロンテージセーブと戸数密度のアップに寄与している。(図2)

■西成：「らしからぬ」コンバージョンが生んだ「らしからぬ」最小限住宅

日雇い労働者のねぐらとして、寄せ場には欠かせない簡易宿泊施設である「ドヤ」の街が、福祉マンションの街に様変わりしている。それも建替えや改修を殆ど行わずに、「〇〇ホテル」の看板を「〇〇マンション」に架け替える（上貼り？）という究極のリノベーション（お金も手間もかけずに建物資源を再生するという点ではサステナブルの哲学を最もスマートかつ本質的に具現化する手法）によって、効率的・経済的にドヤから集合住宅へと「らしからぬ」コンバージョンがなされている。その背景には、ドヤ需要を落ち込ませている労働者の高齢化、日雇い仕事の減少という問題に対して、福祉面からの救済を図り、「働けない高齢者の生活保護受給の促進→受給の要件である定住化を実現→その受け皿としてドヤを活用する」という発想がある。ドヤにとって逆風となる地域課題を集合住宅にとっての追い風に転換する、カミカゼ的なコンバージョンである。

住戸は、広さ3畳程度、家賃4.2万円以下で、共用のトイレ・風呂・台所設備、洗濯室、コモンリビングなどが付属している。超高級マンションに匹敵するような坪あたりの賃料らしからぬ最小限住宅の住まい方をみると、

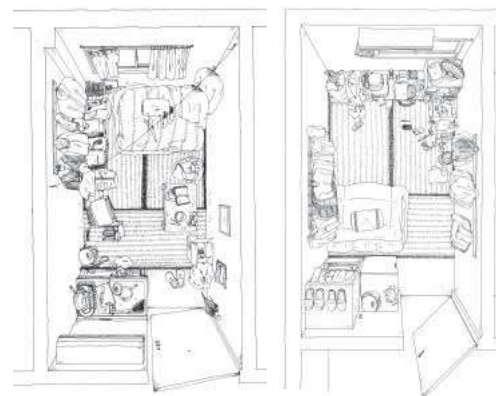


図3 Rさん(左)とNさんのすまい(西成)
スケッチ作成: 金沙智(元大阪市立大学大学院工学研究科前期博士課程)

衣服はスペースを確保するために、なるべく壁掛けとし、布団は折り畳んで隅に置く（そうしないと昼間の居場所が確保できない）。一人用の座卓は、卓袱台、物置、書斎机が兼用され、炊事道具は最低限であるが、どの住まいにも炊飯器は備わっている。衣食住の三要素が最少限に整えられたコンパクトリビングは、「起きて半畳、寝て一畳」を地で行く生活作法である。重装備の生活に慣れた目には、ままごとに見えなくもないが、その実、隙のない洗練された暮らしぶりである。(図3)

住戸が最低限の生活機能を備えるが故に、生活の多くを住戸外の都市機能に依存する先駆的な都市居住が実践されている。コインランドリーは洗濯するだけでなく、冬場には暖をとるための溜まり場になり、飲料の自販機コーナーはあたかも角打のように人が集い、天気の良い日は三角公園でテレビを見ながらお喋りをし、様々なNPOが運営する施設をデイルリビングや福祉の支援を受ける場として活用するなど、住まいから街までが一体的・連続的な生活・居住の場となるコレクティブタウンの様相を呈している。

(よこやま しゅんすけ)

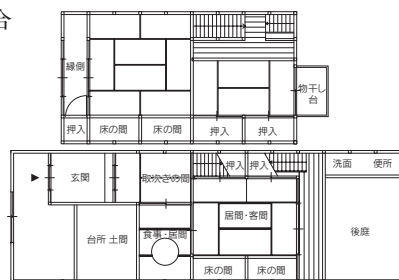


図1 格式の高い長屋

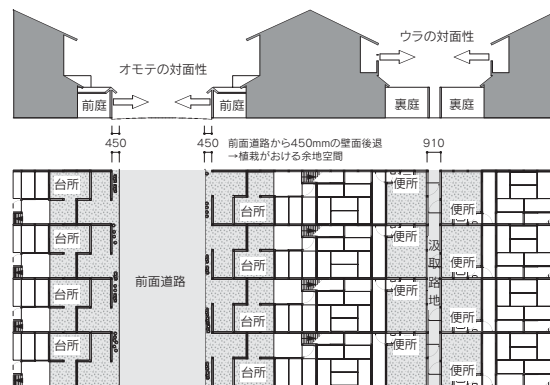


図2 長屋の対面性(オモテ・ウラ)

海外事例に見る 「らしくない」 ホテル

浦一也デザイン研究室

浦 一也

1947年 札幌生まれ
1972年 東京藝術大学大学院美術研究科修了、日建設計入社
1994年～2012年 日建スペースデザイン
現在 浦一也デザイン研究室、北海道日建設計デザインアドバイザー

■アフォーダンス

アメリカの心理学者、ジェームス・J. ギブソンが「アフォーダンス」のことを述べている。「有機体が生息する生活環境を探索することで得られる意味」のことだが、それではわからないので誤解を招くかもしれないが「らしさ」のことだと思ってしまう。ドアの押し板と引き手は、なんとなく区別がつくものだが、どうしていいかわからないものもこの世にはたくさんある。建築金物の世界など、かたちが行動を誘発することが少なくなっているのではないだろうか。

ホテルらしくないとはどういうことだろう。建築で見てみよう。

あるホテルが出火した。そのとき、各階の窓の外につけられた水平に広がる小屋根を伝って客が避難し、これはとても有効だとされた。それ以来、一部の地区などではホテル客室内からも二方向避難ということが言われ、ホテル外観には水平のバルコニーがふえた。つまりホテルらしいポツ窓の外観がなくなった。一時、このようなバルコニー型ホテル建築は集合住宅と区別がつかなくなり、避難がホテル外観の「らしさ」を変えてしまった。

インテリアということではどうだろう。生活環境は「ライフスタイルの変化」などといって、くるくると変化するようにみえるが、実はホテルはコンサバティブなもので、その変化は緩慢なものなのだ。

西欧のホテルはまだ伝統的なものが多い。スイートルームなど、中世風の装飾的なものではないと気が済まないという客やクライアントがたくさんいる。たしかに、すでに価値が定まったものに身を委ねることは大きな安堵感を招く。形にまつわりついた「文学性」みたいなものを求められるのである。しかし最先端と呼ばれる建築家やデザイナーは概してそんな安定や文学性を好まないから、そこに葛藤が生まれる。建築やデザインの永遠の課題であろう。

■勘違い

デザイナーが「らしくない」ものや革新的なものを求めるのは間違いではないが、そこには多くの場合、ある種の「勘違い」があるのではないと思う。人々に長い間培われた「らしさ」に象徴される価値の安定性を損ねたり、混乱させることが本来の目的ではないはずだ。デザイナーは奇異なモノを求めるあまり、安定した価値を混乱させるようなことをしている。それは慎むべきである。当然ながらその時代、立地、社会的背景、収益、エンドユーザーのニーズ、経済状況などを総合的に追求して新しいホテルの姿をデザインしていくのであって、それが今までの安定した価値から外れた「らしくない」ホテルの姿を第一義にして、そればかりを追求することは本末転倒といわなければならない。

「かたやぶり」ということばは歌舞伎からきている。「らしさ」とは違うが「かた」を知らずして「かたやぶり」はない。伝統や型を熟知してこそそれを破る表現が可能なのだ。

■意外性

能書きが長くなった。

「らしくない」ホテルを選んで泊まったことはないが、私が意外性を強く感じた海外のホテルがいくつかある。それはコンバージョン、習慣の違い、建築上の制約などからくるもので様々である。

〈フォーシーズンズ・イスタンブール〉図1

監獄を改修して高級ホテルとしている。確かに監獄は安全で静寂である。美しく改装すると清潔でもある。問題はイメージで、日本ではマイナ

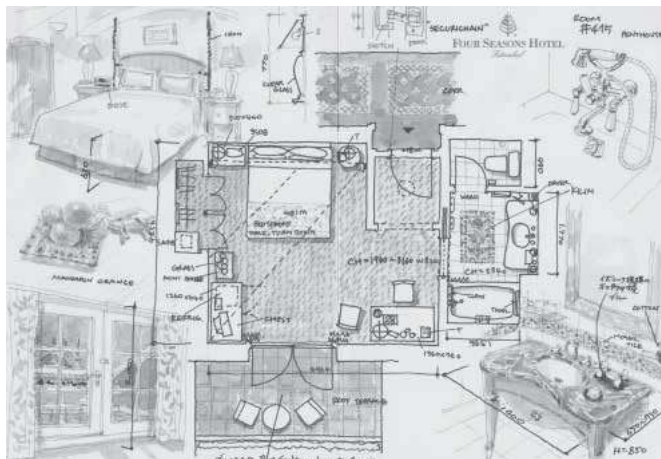


図1 フォーシーズンズ・イスタンブール

スイメージを払拭できないからこんなことはしないが、西欧ではこれを面白い向きがあるのだ。信じがたいがそれが売りのひとつで人気がある。部屋はよくできていて静かだからよく眠れた。

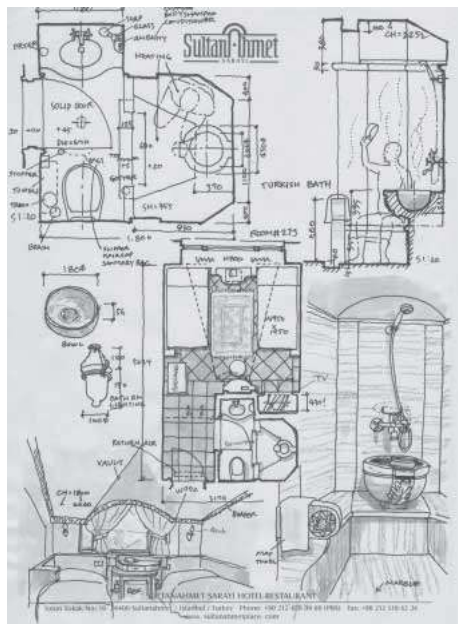


図2 スルタンアフメット・サラユ・ホテル

〈スルタンアフメット・サラユ・ホテル〉図2

これもトルコ。浴室にバスタブもシャワーもなく大理石のベンチと石をくり抜いた鉢と金属の器がカランの下にあるだけ。湯を鉢に溜めては器で体にかけるという。やや不安になったが、延々とそうしているうちに室内は次第に湯気で満たされ、汗が少しずつ出てきた。これがタルキッシュ・バス。私たちににとっては意外なスタイル。

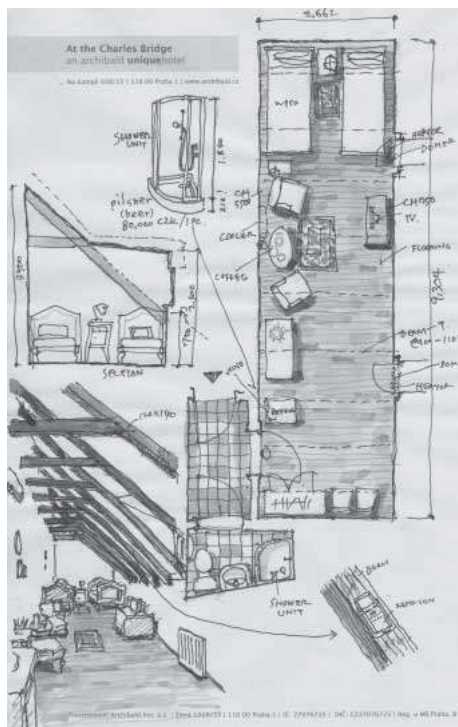


図3 アト・ザ・チャールスブリッジ

〈アト・ザ・チャールスブリッジ〉図3

こんな客室に泊まった。チェコのプラハ、カレル橋畔の小さなホテルの屋根裏部屋。9m以上の長さがあり、ベッドは最奥部。斜めの梁が出ていてあまり近寄ると頭を打つから注意深く歩かなければならない。まるで小公女にでもなった気分。

■ホテル建築

そもそも、ホテルは、旅の宿として、聖地に巡礼する者に部屋を提供することから始まったと思ってい。病気になるればそこで介護をした。病院と語源が同じなのはそのせいである。すなわちホテル建築は姿として現れないスタートを切った。

ホテル建築が効率優先で定型化されたのは20世紀になってアメリカのヒルトン・ホテルが始まりである。1：2平面の部屋を廊下の両側にずらりと並べ、パイプが通るスペースを2室で共有した。各部屋は効率よく廊下側からバスルーム、ベッドルーム、パーラー(リビングスペースのこと)と並べた。ベッドは入り口から丸見えではない。建物平面は長さこそいろいろだが奥行きは18mくらいにしなければならない。窓はポツ窓となり、全体に薄い墓石みたいな形になった。それはアメリカ型のホテル建築の「らしさ」として定着したが、欧州では石造やレンガ造のアパルトマンをホテルに改修していたものが多く、依然として新しいホテル建築はできなかった。

■溶けるバスルーム

「20世紀アメリカ型ホテル」が世紀末頃から変わりつつある。欧州型のホテルに人気が出てきた。それはアメリカのプラグマティズムへの懸念の表れとも言える。効率一辺倒はホテル側の論理で、エンドユーザーにとっては多様性や変化がたくさんあるほうがおもしろいのである。

また前にも「建築と社会」(2008年5月号)に書いたがバスルームが「溶け出した」のである。誤解がないようにいうとバスルームの形ははっきりしなくなってきた。ビューバスとかいって景色を見るため一部をガラスにしたり、シャワーだけにしたり、区画をなくするのまで現れた。つまり溶け始めた。

この現象は世界的に起きている。これはホテルが宿泊施設から別の施設に変わりつつあるからだ。バスタブは「水を張ったベッド」になりつつある。ホテルらしさが変わりつつあるのはバスルームからなのかもしれない。

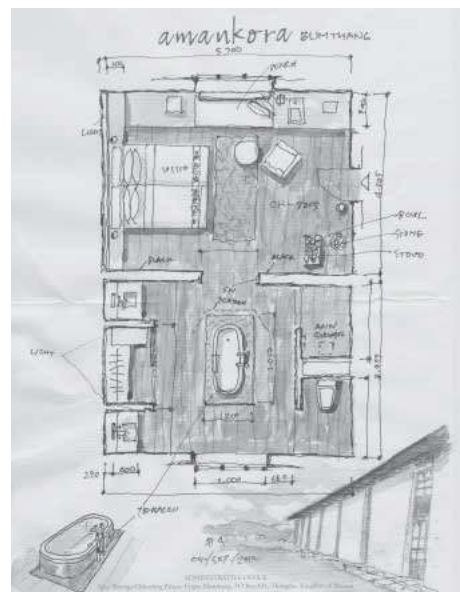


図4 アマンコラ・ブムタン

〈アマンコラ・ブムタン〉図4

ブータンにできた5つのアマンコラのひとつ。アマンのホテルは一般のホテルとはまったくコンセプトが異なるので比較できないが、ここにはバスルームという区画はすでにない。バスタブは隣室のど真ん中に鎮座していて、トイレとシャワーも閉じようとしたらそうできるというだけである。

■ホテルにおける「らしさ」と「らしくなさ」

冒頭に述べたようにホテルのエンドユーザーは概してコンサバである。奇異なものなど求めない客が大半であり、「らしい」ものほど安心する。家に帰ってきたような気にさせれば成功だというクライアントもいる。

しかしそうだろうか、それでは「かたどおり」にしかならない。ホテルは住宅ではなく非日常の空間である。デザイナーは新しい価値を生み出すことに心を砕かなくてはならない。なにしろ、社会をリードする人たちの一人であるからである。よくわかって、型を破るのである。

(うら かずや)

一般解から 個別解への転換

“オフィスらしさ” からの脱却

ワークスケープ・ラボ 代表

岸本章弘

1958年、兵庫県生まれ。
京都工芸繊維大学大学院修士課程修了。
オフィス家具メーカーにてオフィス等のインテリアデザイン、先進オフィス動向調査、次世代オフィスコンセプトの開発とプロトタイプデザインに携わり、オフィス研究情報誌『ECIFFO』の編集長をつとめる。
2007年に独立、ワークプレイスの研究とデザインの分野でコンサルティング活動をおこなっている。
千葉工業大学非常勤講師、京都工芸繊維大学非常勤講師等を歴任。
著書に『NEW WORKSCAPE 仕事を変えるオフィスのデザイン』（2011、弘文堂）など。

■「らしさ」に囚われたオフィス

最近、あるデータを見て驚かされたことがある。オフィス家具メーカーの Kokuyo が 2011 年の 1 年間に竣工したオフィスから 100 件を無作為抽出し分析したものである。それによれば、最も広く採用されているデスクレイアウトは「対向島型」で、全体の 92%。この調査を始めた 2004 年の 88% 以来、例年 9 割前後で推移しているという。さらに、それらの「島」に対して 9 割以上が、「ひな壇」と呼ばれる役職席を配置している。階層型の組織図をそのままデスク配置に反映させた、日本型オフィスの典型とも言えるレイアウト形式（図 1）が、毎年 9 割も再生産されているわけである。

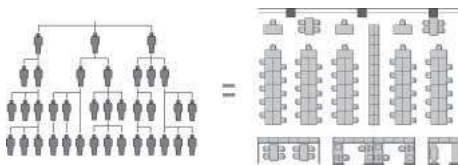


図1 組織構造と対向島型レイアウト

ビジネス環境の変化と ICT の進展に伴って、働き方が大きく変化しているといわれる今日にあっても、相変わらずこれほどの多数派を占めているのなら、これは「日本のオフィスらしさ」の象徴の一つと認めざるをえない。そして問題は、この「らしさ」をどう捉えるかということである。それが何らかの望ましい文化の伝承や規律の維持に貢献しているなら残せばいいが、新たな機能要件に合わなかったり求められる変革を阻んだりしているなら棄てるべきということになる。

結論から言えば、かつてこの対向島型レイアウトを正当化していた根拠の多くは今日ほとんど意味をなさず、その空間形式はそこの行動とミスマッチを起こしつつあり、もはや形骸化した「らしさ」の象徴と言える。本稿では、そうしたことを示す根拠を提示し、今後の変革の方策について考えてみたい。

■組織の配置から機能の配置へ

従来型の対向島型レイアウトの特徴はオフィス空間の中に「組織を配置」していることである。組織の構造と構成人員の関係が、それらが担う職務や意思決定の役割に沿って

配置され、階層上の序列や権威の違いもインテリア要素として明確に可視化される。こうしたことは日本に限らず、欧米においても特にマネジャーとスタッフの空間を明確に区別したオフィスとして多く見かけられる。

もっとも、もともとのオフィスの成り立ちからすればこれは当然ではある。ビジネス情報を効率的に処理し、その管理監督を効果的に行うために作られた空間であるから、仕事の役割や関係に応じて構成されている組織の構造を物理的配置に反映させることには理にかなっていた。しかし、今日の仕事と働き方の変化に伴って、従来型の空間構造とそこで働く人々の行動は徐々に乖離し始めている。

定型的な情報処理作業の多くが情報システムによって自動化され、オフィスワーカーにはより高度な課題解決や知的創造が求められるようになってきている。オフィスワークの中心が、定型的で分業型のデスクワークから、対話と協働を要する「テーブルワーク」へと移行しているわけである。（図 2）そして、変化と競争にさらされるビジネス環境の下で、多くの組織が階層的な縦割り構造から平坦で柔軟な態勢への移行を志向し、コミュニケーションの作法は指示命令系統に沿った対面型からオンラインチャネルを活用した臨機応変なものに転換している。

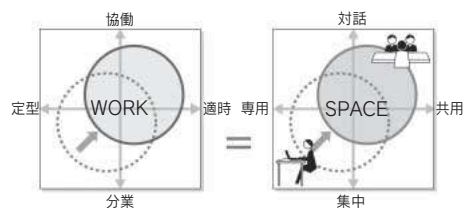


図2 デスクワークからテーブルワークへ、仕事が変われば必要な支援空間も変わる

こうした状況にあっては、もはやデスクワーク空間を中心にオフィスを構成することや、そこに組織の構造や人のステイタスを表現することの意味は失われている。代わってそこに配置すべきは新たな行動を支える機能であり、そこに表現すべきは働く人々を繋ぐためのメッセージである。

では、具体的にはどのような機能や意味が求められるのか。そのヒントはすでに多くの「らしくない」事例に見られる。以下では、そうした事例をいくつか拾ってみよう。

■百社百様のオフィスソリューション

●デスクワークとテーブルワークの融合

迅速なコミュニケーションと意思決定のために「立って仕事をする」ともいわれる、ユニクロブランドで知られるファーストリテイリング。そんな彼らの日々の行動を支援するオフィスは、チームのためのデスクワークとテーブルワークの双方の支援機能を併存させた空間と言えるだろう。執務空間の中心に配置されたワークテーブルはどれも4人掛けもしくは4席を1グループとして配置されており、どの席の脇にも通路がある。(写真3)

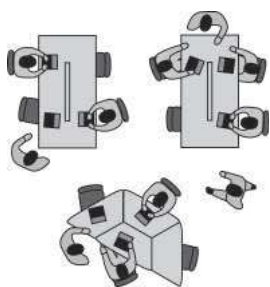


図3 4席単位のレイアウト



写真1 その場で立ったまま話し合って決める

こうすることによって、どの席に対しても誰からもアクセスしやすくなり、その場で話し合って決めるというスピーディなワークスタイルが可能になるわけである。(写真1)

●コミュニケーションスペース主導の空間構成

クライアント毎にプロジェクトチーム体制で対応することが多い広告代理店TBWA博報堂の場合、そのオフィスの中心を占めるのはカフェスペースが配された中庭とミーティングルームである。かつてボウリング場であったフロアを改装した天井の高いワンルーム空間には、そうしたコミュニケーションスペースの間にデスクワークスペースが分散配置され、ユニークなランドスケープを形成している。チームによるクリエイティビティを駆使して「創造的破壊」を目指す彼らにとって、このオフィスは自身の働き方を明確に体现する場となっているのである。(写真2)



写真2 エントランスから見下ろす中庭空間

●現場とつながるオフィス

自席や会議室から窓の外に目をやると、そこに見えるのは組立中の航空機の機体。ボーイングのレントン工場では、巨大な組立工場の中にエンジニア達が入居するオフィス棟が建っており、組立工程において生じる問題などに対して、工員と技術者が迅速に協働できる環境を整えている。生産プロセス革新プロジェクトの結果として生まれたこのオフィスは、ビジネスのバリューチェーンの中でとすると断絶しがちなフェイズを物理空間によってつなぎ、その結果として生産効率の飛躍的な向上を成し遂げている。工場やオフィスといった部分の最適化ではなく、ビジネスプロセスの視点で全体最適を目指したオフィス計画といえるだろう。(写真3)



写真3 会議室の窓から見える組立中の航空機

●理念を伝えるメディア空間

奥行き4m、総延長76mもあるコンクリート製の巨大なデスクが印象的なオープンスペース。ロンドンの広告代理店マザーのオフィスは、一目見ただけで記憶に残るインテリアである。創業当時、小さな会社だった頃には、全員がひとつのテーブルを囲んで活発な議論を交わしていた。それこそが自分たちの創造性の原点であると信じる彼らは、その継承すべき理念を会社が成長した後も持ち続けたいと願い、新オフィスへの移転に際して、このシンプルながらインパクトのあるインテリアを選んだのである。新たに入社するメンバーから顧客まで、全ての人にそのエピソードとコンセプトを瞬時に伝えることのできるユニークなメディアとなっている。(写真4)



写真4 全員で囲む巨大なワークテーブル

■ビジネスモデルの最適化を担う経営資源

近年のICTの進展によって、ネットワークにつながっていれば、いつでもどこでも仕事ができるといわれる。しかし、そんな「どこでもできる仕事」の多くは情報処理型のデスクワークである。そうした仕事の自由度が高まる一方で、それらは徐々に人手を必要としなくなっている。代わって人に求められるのは、知識の交換や経験の共有を通してイノベーションを生み出すことであり、オフィスにはそのための集まり繋がる仕組みが新たに必要になっている。

オフィスデザインの課題を、空間の課題ではなく行動の課題と捉え、望ましい働き方を効果的に支援する環境づくりと捉えること。そして、そのオフィスの役割をビジネスプロセスやバリューチェーンの枠組みの中で捉え、オフィス空間の最適化ではなく、ビジネスモデルの最適化を考えることが重要である。

多くの企業にとって、かつてオフィスは価値を生まないコストセンターと見なされていた。そのため、オフィスデザインの課題と解決策はオフィス自体の中に求められた。そうした姿勢が続く限り、デザインの目標や評価軸は、それ自体の効率化やコスト削減に向かうだろう。しかし、重要なのはビジネスとしての全体最適化であり、オフィスとしての部分最適化ではない。オフィスは経営資源の一部であり、多くの経営課題や戦略が企業ごとの個別解であると同様に、オフィス戦略もまた個別解であるべきである。

企業にとってオフィスをデザインすることは、そこでの自身の行動や組織の文化をデザインすることである。それらはビジネスモデルの重要な一部であり、そこに求めるべきは「オフィスらしさ」ではなく、それぞれが目指す「この会社らしさ」である。

(きしもと あきひろ)

“最もらしい” 商業施設とは

株式会社乃村工藝社
商環境事業本部 クリエイティブ局
デザイン2部 部長

山崎康正

1955年 西宮市生まれ。
1978年 京都工芸繊維大学工芸学部住環境学科卒、同年株式会社乃村工藝社入社、商業施設を中心に大小約300件のデザイン・設計・ディレクションを担当。2007年より現職。
主な業務 美々卯堺店（堺市景観賞）、カフェネスカフェ三宮、北野工房のまち、炉端料理 南や（NSGデザインコンテスト 最優秀デザイン賞）大阪駅セントラルコート環境計画、福臨門酒家大阪店。
宝塚大学・神戸芸術工科大学 非常勤講師。

■商業施設とは

1980年代中頃、当時流行りのカフェバーの設計で商業系アワードの賞を受賞し、クライアントに報告に訪れた。そのとき頂いたコメントが、「うちは賞をとる店はいいいから儲かる店を作ってください。」当時20代の私はジョークの奥にある商売の本音、店づくりに対する姿勢の根本を教えられた気がした。

商業施設といってもその幅は果てしなく広い。商空間単体としての店舗内装、その商業空間を含む建築（個店から商業ビル、ショッピングセンター）、そしてその集積としての商店街から商業地域へと、規模・内容はまさに大小様々である。また、市に代表される仮設店舗、催し、はたまたWebショップとその軟度の幅にも際限がない。ここでは空間をアクティブレイヤーとして話を進めようと思うが、かなり縮尺の違うレイヤーを重ねないと、らしさを考える事は困難と思える。

商業施設は、百貨店、スーパーマーケット、総合スーパー、ショッピングセンター等の複合大型商業と、個人店舗、チェーン店、インポートブランド等に代表される専門店に大別される。ともに時代の流れ、経済動向に左右されながら流通業・製造業・飲食業・不動産業・レジャー産業・建設業界等、事業者及び運営者の浮沈に合わすように多様な変遷を遂げてきた。

時流に乗り、消費者動向にシフトし、豊かで楽しい場を提供することを常に追い求める商業施設の様はまさに時代を映す鏡そのもの



カフェネスカフェ三宮

といえる。消費者は常に新しいものを求める。新鮮な商品、斬新な空間、受けたことのないサービス、消費心理をくすぐる環境にはすぐに反応する。それに加え供給側は、店舗の品質・安心・安全性をも供え持つことで、顧客の確かな信頼を得ることが必要不可欠な条件となる。また、供給者サイドに立つ設計者はそういった与件を満した空間を創造することが職能であり、消費者の生活を豊かにし、事業者も繁盛する、集客装置を提供すべくより良い商空間づくりを日々目指している。

■商業施設の功罪

大型商業、特にショッピングセンターの発展はほぼアメリカを模範とする形で移行してきたといえる。西海岸やニューヨークの郊外型ショッピングセンターを手本にした商業施設の出現、それは顧客を感動させ、購買動機を増進させる。時間消費型の大型商業開発は、非日常という合言葉のもと、全国的に広がりを見せた。その流れは郊外から市街地に逆輸入され駅周辺の開発も盛んに進んでいる。

そこで最近私なりに感じる不安事がある。大型商業施設が増え続ける中、流通の効率化による商品の集中購買や出店テナントのパターン化も相まって、どこの施設も商品的にも空間的にもある種画一化されてきている印象があり、それにより地域色も薄れ、施設自体も没個性化しているのではないかと思える。大型の郊外型ショッピングセンターが日本中に行き渡り、地元商店街のシャッター街化が進み地域の商業地図を塗り替える様はあたかも地球の温暖化による森林の減少傾向と重複する。地域らしくない街へと進みかねない。大型アウトレットパークになるとその商圈は府県をまたぐ巨大なものとなっており、地域色は埋没し、購買活動自体もレジャー化してきているともいえる。

いずれにしても商業上の問題はその旬の期間がいつまで続くのか。実はそこを如何に延ばすかが肝心で、人気の継続が運営者にとっての手腕の見せ所となる。当初のコンセプトに基づく一貫性のあるテナントミックス、営業成績の状況判断と時代の的確な読みに基づく改装やテナントの入れ替えが商業施設の成



美々卯堺店



美々卯堺店 内部

功への必須条件となる。

専門店の場合は、1980年代一世を風靡するDCブランドを契機に空間デザインが注目される。店舗デザイナーが一躍脚光を浴び、パブルと歩調を合わせるようにデザイン重視の時代となる。斬新さと個性を競い、らしくない商業空間を皆が標榜する。結果、なんでもありのデザインの混沌が時代を象徴し、それが商業施設らしさに移行する。そして、いよいよ拍車がかかりまた違う何か、らしくない空間を求めスクラップアンドビルトを繰り返す。それは商業施設の宿命でもあり、生きた商業施設らしさであるともいえる。

少し気になるのはそこに美意識の存在が多様化しているのか、はたまた稀薄化しているのかが明確でないところである。ただ、当時のデザインパブルは着実にデザインの質を底上げし、世界に通じる優秀なデザイナーも多く輩出することとなる。

建築的にも商業寄りのハイエンド志向のデザインが目につくようになる。商業施設のみならず、特異性を打ち出すような建築群が街に割拠し出す様に店舗デザインを生業とする私でさえ少なからず不安を抱いたことも事実である。

■最もらしい商業施設とは

ここで、運営面を含めた店舗づくりの考え方を少し整理したい。

まずは長続きする店舗。老舗店舗が代表格であるが、息の長い、客を離さない商品、飽きの来ない空間、おもてなしの心・伝統を感じさせるサービス、リピート客のシェアが圧

倒的に多い、また来たい店。当然値ごろ感も満足、そういった施設は投資回収もある程度の期間が見込める。収支計画はイニシャルコストを比較的高く設定し、設備や仕様を含め質の高い空間とすることが可能となる。本物を目指して上質な施設づくりが可能となる。

対して短期集中型は仮設店舗に代表される期間限定ショップや短期で投資回収を目論む店舗。特に高い集客力が必要なため、話題性の高い人気商品、パブリシティにも取り上げられる斬新な空間・サービス・演出と、行列に並ぶこともいとわない満足感を提供する必要がある。投資コストは抑え目になりがちでコストプランニングはもちろん、即効性のある企画力が重要となる。事業者は収支バランスを考え、いかに短期で投資を回収できるかを考えるとともに、いかに顧客に満足を提供できるかを考え、設計者はその事業者の意図を確実につかみ、いかにFITした提案ができ、実現するかを考える。オープンすれば答えは売上数値としてすぐに跳ね返る。住宅や公益施設と違い、利益が出なければ撤退も考えて取り組む必要がある。



JR東京駅

こういった店舗の様々な集積が複合商業施設となり、商店街となり、街並みを形成してゆく。

そして最もらしい商業施設と考えると次のようなポイントが思い浮かぶ

- 活性化している。
- 社会貢献している。
- 文化となりうる。

にぎわいがなければ商業施設とはいえず、そのためにはソフトとハードが一体化している前提がある。商業と空間の一体化した施設は強いアピール力があり魅力にあふれた空間となりうる。

そこにはデベロッパーの一貫性が重要で、商業コンセプトに沿ったテナント、MD構成か。それを空間が表現できているか。イベントを含め顧客満足を生む運営・サービスが出来ているか。また、時代に即して適宜修正ができていないか。その総合力が問われる。

時代に対応し、継続できれば地域社会にも貢献でき、ひいては地域文化を生み出すことにもなる。

そういう意味合いで、商業施設のあるべき論的にいえば「商品・サービス・価格・空間・情報が高い次元でバランスがとれている施設」が、最もらしいということになるだろうか。

ここ数年盛んに商業施設開発が進むのが、駅・空港・サービスエリアといった主要交通インフラの拠点である。官庁舎の次に固い建築群が実は今やもっとも新しい商業施設でもある。

もしかするとそれらは、今もっともらしい商業施設であるべきなのかもしれない。

(やまさき やすまさ)



JR大阪駅

編集後記

特集 “らしくない” 空間

インテリア・住宅系分科会

“らしくない” 空間がほしい

いわゆるオフィスでもホームオフィスでも作業場でもない、今までと異なるイメージのワークスペースで仕事をしたい、アトリエと庭を合体させたような場所に家の機能も追加して暮らしたい、と、こんなことによく考えを巡らせている。“らしくない” 空間での普通の時間を過ごすことで、周囲に広がっている日常生活に抵抗を示しているのか、このような空間を考えデザインすることは、新しい視点や今までと異なる考え方を私に気づかせ、日常生活を楽しくしてくれる。（ペリー史子）

最近、首都高速ドライブにハマってしまいました。典型的なインドア派の自分“らしくない” 趣味だなど思いながらも、合流と分岐を繰り返す走り応えのあるコースで車を走らせるのはたまたま楽しい！ 脇見運転はできませんが、3号渋谷線上りの正面から迫ってくる六本木ヒルズの夜景など、目に飛び込んでくる風景も気分を盛り上げてくれます。

私がこれだけ何かにハマるのは久しぶりなのですが、問題は自分の車を持っていないことと、大阪府民なので埼玉の実家に帰った時しか運転できないことでしょうか。どちらも致命的です。

さて、次はいつ運転できることやら…（泣）

（小西貴宏）

特集記事会議に衝撃が走った。掲載候補作のセレクト中だった。オープンプランの小学校に、悲願の間仕切りがいよいよ完成、と喜びの校内報が伝えられたのである。果たして、「らしくない空間」は「錦の御旗」か、それとも「あだ花」の危険が潜むのか。

そこをあぶり出したく企画した特集だった。多くの施設で“らしくない” は褒め言葉と同義語である。さらに言うと、建築とは“らしくない” への挑戦の歴史、とも言えるだろう。だが“らしい” も実は偉いのかもしれない。そう感じる“らしくない” に疲れた私が居る。（上記小学校の掲載には精査を必要とし、今回は見送った。）（塚口眞佐子）

本来の“らしさ” とは、過去の積み重ねが裏打ちされたものではないでしょうか。それゆえ、可視化されたその「かたち」や「いろ」には、理にかなった説得力があるのだと思います。昨今のファスト化が進む社会で生まれるモノたちは、表層だけを追いかけて消えていくような儚さを感じます。私たちの身の回りのモノがその理からかけ離れないように、作り手として本質的をとらえて、次の時代につないでいくモノづくりを心掛けたいと思います。（谷垣浩一）

普段、何気ない会話の中で“らしい” “らしくない” という表現を使っていますが、分科会のふとした発言がきっかけとなって、これほどまで広く・深く思考できるテーマであったとは予想外でした。論考の中で見受けられた「意外性」「既成概念」「かたやぶり」というキーワードが表わすように、“らしい・らしくない” ものとは、我々が無意識のうちにかたちづくっているエモーションの一部かもしれません。また“らしい” ものの定義も多角的に述べられており、読み応えのある特集となりました。今回の編集過程は、いつもと違う熱気に包まれた「らしくない分科会」であったことは間違いありません。（間瀬一博）

今回の特集である“らしくない” 空間を考えるあたり、まず“らしい” 空間とは？との疑問が生じました。今回の各論もそのような部分にふれながらまとめていただいておりますので、そのあたりを踏まえながら読んでいただくと面白いかと思います。また、皆様もご自身で一度“らしくない” 空間を探してみてください。そして、今は“らしくない” と思っていた空間が数十年後、いつの間にか当たり前の空間になっている。そんな時代が来た時に振り返るときっと面白いですよ。

（川合隆之）

日ごろの生活の中でふとうれしくなる時がある。こちらが全く予期していないモノに出会った時が特にそうである。例えば、誰かとの会話のキャッチボールを一つとってみても、ストレートの中にいきなり変化球を投げられると驚く、少し考え、可笑しくなるといった経験がそれにあたる。ある文脈の中での予定調和的な内容だけの会話に比べ、少しはずした意外性を含む場合はスパイスとして全体の内容を豊かにする。そういった日常の“らしさ” の中にある些細な“らしくなさ” も大事にしていきたいものである。（酒井雅男）

このあいだオスカー・ニーマイヤー氏が亡くなった。104歳という大往生だが、99歳で再婚していたという記事のほうに驚いた。が、何日かそのことについて考えていると、あまりにもニーマイヤー氏らしいと思い始めてきた。彼の建築のあの曲線の美しさは無類の女性好きでなければ不可能だったのだろうと。あまりにも「らしすぎる」と妙に納得してしまい、勝手に彼のプライベートを想像しながら彼の建築作品集の曲線美を堪能した。女性の体の曲線を何度も手でなぞっている彼の姿を勝手に想像してしまった訳だがあながち間違ってもいい気もする。大建築家に何とも失礼だが、今回更に尊敬の念が高まったのは言うまでもない。（黒柳 亮）

建物全体の省エネ性能を 評価する基準へ一本化

—改正省エネ基準の概要—

植村義幸

国土交通省住宅局住宅生産課住宅省エネルギー係長

東日本大震災に伴う原発事故と電力供給力の低下を踏まえれば、産業部門や運輸部門も含めた全体のエネルギー計画の見直しが必要である。なかでも増加の著しい民生部門のエネルギー消費を削減することは重要な政策課題となっている。

経済産業省、国土交通省および環境省が連携して、有識者、実務者等から構成する「低炭素社会に向けた住まいと住まい方推進会議」を設置し、平成22年6月より、住宅・建築物における省エネ・省CO₂対策の今後の方向性の検討を行い、中間とりまとめを平成24年7月に公表した。

本稿では、こうした今後の取組の重要な基礎となる省エネ基準の見直しの概要について紹介する。

省エネ基準見直しの必要性

現行の省エネ基準は、①建物全体の省エネ性能を客観的に比較しにくい②再生可能エネルギーの導入効果が適切に評価されにくいなどの課題がある。

今回の見直しでは、省エネ基準を「一次エネルギー消費量」を指標として建物全体の省エネ性能を評価する基準に一本化する。この

際、外皮の熱性能については、室内温度分布の確保等の観点から一定の水準（平成11年基準相当）を別途求める。

見直しの概要

■水準の設定

見直し後の省エネ基準の水準は、外皮基準については現行と同程度とし、一次エネルギー消費量基準は現行水準の外皮に標準的な設備を導入した水準を求める。

■一次エネルギー消費量基準の考え方

一次エネルギー消費量基準は、地域区分や床面積等を共通条件とし、実際に設計する住宅の仕様で算定した一次エネルギー消費量が、基準仕様（平成11年基準相当の外皮と標準的な設備）以下となることを基本とする。

算定対象となるエネルギー消費量の用途は、住宅では、「暖冷房」「換気」「照明」「給湯」「家電・調理」および「太陽光発電による再生可能エネルギー導入量等」である。「家電・調理」は設計時点での評価が難しいことから、床面積に応じた標準値を用いて算入する。

設計一次エネルギー消費量に加味される省エネ手法としては、負荷削減（外皮の断熱化、節湯型器具の採用、太陽熱温水器の利用等）、効率化（設備効率の向上）、エネルギー創出などの取り組み（太陽光発電等）がある。

■外皮の熱性能に関する基準の考え方

現行基準では、外皮の熱性能に関する基準はエネルギー消費量削減を主目的として設けられている。

今回の見直しでは、一次エネルギー消費量による指標が導入されるため、主にヒートショックや結露の防止など、エネルギー消費量では評価されない適切な室内温度分布の確保の観点から基準を設定する。

外皮の熱性能に関する指標は、建築物では現行の省エネ基準における外皮性能の指標を

用いることとするが、住宅は、現行の熱損失係数（Q値）から外皮平均熱貫流率（UA値）に変更する。Q値は、住宅の床面積当たりの熱損失量を示す指標である。

しかし、小規模な住宅では床面積に対する外皮表面積の割合が大きく、より熱が逃げやすくなるため、通常の住宅と同じQ値を適用すると、相当の断熱厚が必要となる場合もある。小規模な住宅については基準値を緩和することが必要となっている。

今回の見直しでは、住宅の規模にかかわらず現実的な断熱水準を求めるため、指標をQ値から単位外皮面積当たりの貫流熱量である外皮平均熱貫流率（UA値）に変更した。

また、現行基準ではすべての地域で、断熱性能、日射遮蔽性能の基準を設けているが、寒冷地（図2地域区分1～4）では、日射遮蔽性能の向上が冬期の日射取得を削減し、暖房エネルギー消費量の増加につながる場合があることから日射遮蔽性能の基準は設けない。

一方、蒸暑地（図2地域区分8）では、断熱性能の向上が冷房のエネルギー消費量の増加につながる場合がある。日射遮蔽性能の基準により一定の断熱性能は確保されることから、断熱性能の基準は設けないこととする。

地域区分 ()内は日分率	1 (Ia)	2 (Ib)	3 (II)	4 (III)	5 (IVa)	6 (IVb)	7 (V)	8 (VI)
断熱性能	○	○	○	○	○	○	○	○
日射遮蔽性能	○	○	○	○	○	○	○	○

地域区分 ()内は日分率	1 (Ia)	2 (Ib)	3 (II)	4 (III)	5 (IVa)	6 (IVb)	7 (V)	8 (VI)
断熱性能	○	○	○	○	○	○	○	—
日射遮蔽性能	—	—	—	—	○	○	○	○

図2 外皮の熱性能に関する基準の合理化

おわりに

東日本大震災とそれに伴う電力需給の逼迫を踏まえ、これまで以上に省エネ化が期待されている。住宅・建築物をより省エネ性能の高いものへと誘導するためには、住宅・建築物における省エネの取組を適切に評価する指標を整備する必要がある。

これに加え、住宅・建築物を購入・賃貸をしようとする人々に対し、省エネ性能をわかりやすく示すとともに、住宅・建築物の環境性能に関する国民の理解を高めるようなインセンティブの付与や、ラベリングの価値を評価する市場を形成することが必要である。

国土交通省は、こうした取組を支援するとともに、引き続き法律、予算、税制等の政策手段を活用して、住宅・建築物の省エネ性能の向上に取り組んでいく。

(うえむら よしゆき)

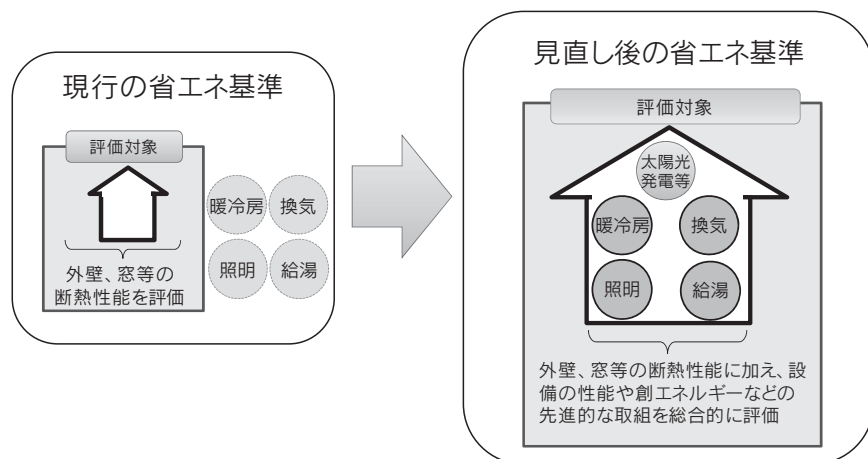


図1 省エネ基準見直しのイメージ



“有機ELといえば山形” の実現に向けて

～広がる有機EL照明の可能性～

山形県産業技術振興機構

産学官連携有機エレクトロニクス事業化推進センター

ゼネラルマネージャー

事業化推進部長

村上賢一 ・ 島田新一

山形と有機EL

山形県は、「おいしい山形」として知られる豊かな農業県だけではなく、山形鑄物などの伝統工芸品から電子、機械、食料品、ニットまで幅広い製造業が盛んな工業県でもある。

その山形県が力を入れているのが有機EL照明とその他の有機エレクトロニクス産業の振興だ。当機構では、有機ELについて「つくる産業×つかう生活×まなぶ社会」をキーワードに、産学官連携した21世紀型の新たな産地づくり、『有機ELといえば山形』の実現に取り組んでいる。

有機ELの特徴

有機ELは、2枚の電極（陽極：透明ITO膜、陰極：アルミ薄膜）の間に薄い発光性有機膜を挟むサンドイッチ構造（図1）をしている。防湿のため2枚のガラスで密閉封止する必要があるが、それでも全体の厚さは2～3mmと大変薄く、この①薄い、しかも面発光ということが有機ELの一番の特徴である。

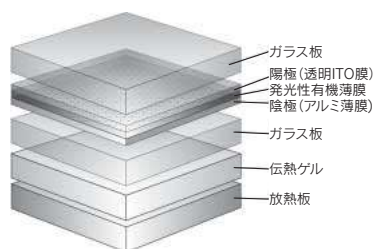


図1 有機ELパネルの構造

その他の特徴として、②発光スペクトルがブロードで（図2）、自然光の下のようにモノが見える（演色性が高い）。③紫外線レスで絵画・美術品の褪色・劣化を防止する効果が期待される（山形美術館で実証事業を実施中）。④発光する有機材料の組み合わせで様々な色に発光する。⑤陰極に透明ITO膜を用いる透明パネルや、基板にプラスチックを使用して曲がるパネルをつくることのできる等がある。

こうした特徴を活かし、近い将来一般照明はもとより自動車用や飛行機用の照明、その

他医療用、製造業の外観検査用、建築部材等、様々な分野での応用や新用途の開発、展開が期待されている。

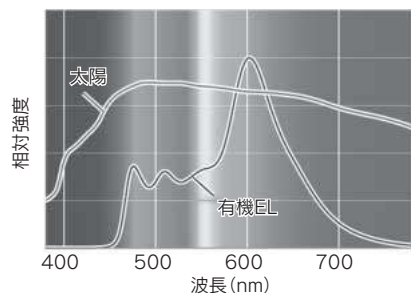


図2 有機EL照明パネルの波長分布（例）

有機ELの課題

製品化、商品化を進める課題として指摘されるのが明るさと価格の問題である。

現状、入手可能な有機ELの輝度は3000～5000 cd/m²程度で、発光効率に関しては、蛍光灯（～100 lm/W）、LED（50～80 lm/W）、有機EL（10～45 lm/W）の順となっているが、大手メーカーではオールりん光デバイスと光取り出し技術の開発により100 lm/Wを超える効率を実現している。

灯具としての器具効率の面では、蛍光灯やLEDは60～70%とされるのに対し、有機ELは平面発光という特性から反射板等が不要のためそれが100%に近く、有機ELの60 lm/Wは蛍光灯やLEDに十分拮抗するとされている。

価格については、LEDは1～4円/lmまで下がっているが、有機ELの市販価格はいまだ～200円/lmと高く、有機ELの普及のためには価格が最大の課題である。現在、市販の有機ELは蒸着プロセスで製造されているが、これが山形大学等で研究が進められている塗布・印刷プロセスが採用されるようになれば、製造コストの大幅な低減が図られ、価格面の課題解決も見込まれてくる。

山形における有機EL活用の展開

次世代照明としての有機ELは、先行するLEDと比べて価格や明るさ、また寿命等の面でいまだ発展途上にあるが、山形県内では、2008年米沢市に世界最初の有機EL照明パネル製造企業Lumiotec社の誕生以来、一般照明としての導入の試みが進められ、これまで個人住宅、青果店、スーパーマーケット休憩室、住宅会社のモデルハウス（図3）等に採用設置されている。

昨年は、県や米沢市の助成も手伝って、省エネと高演色性を活かした付加価値の高い照明として、県内の高級旅館、米沢牛高級料亭（図4）、また店舗展示の屏風絵照明（図5）、企業の会議室照明と次々と実用化されている。

当機構では有機ELの実用化を進める会員制

組織OLEDヤマガタを運営し、製品化のための各種セミナー開催や新しい照明の試作活動のほか、製造業における部品、製品やカプセル等の外観検査光源としての開発、さらには透明パネルを活かし玄関ドアや子供部屋ドア等、建築への応用に取り組んでいる。

OLEDヤマガタの会員企業タカハタ電子では、昨年11月のHOSPEX Japanで東北パイオニア製造等のパネルを使った新しい医療用照明のブランドをデビューさせた。



図3 モデルハウスのキッチン照明



図4 米沢牛高級料亭に導入された有機EL照明（製品名『YUKI AKARI』）



図5 屏風絵照明

次世代に向けて、そして未来のあかり

当機構では、有機ELの普及啓発と次世代を担う人材育成のため、小中高から大学まで有機ELの出前授業に力を入れ、今年度は延べ47クラスで実施することとなっている。

また当機構では、山形県、山形大学、会員企業の協力を得ながら、当センターの前身である旧有機エレクトロニクス研究所設立から今日まで10年間にわたる有機EL開発の取り組みと製品化、商品化の試みの集大成として、3月5日～8日東京ビッグサイトで開催されるライティングフェアに参加する。

“未来のあかりを私たちの生活に”を基本コンセプトに、「もてなすあかり」「くつろぐあかり」「装うあかり」「いたわるあかり」のテーマごとに製品や試作品を展示し、『有機ELといえば山形』を国内外に強くアピールし、率先して有機EL照明の市場開拓につなげていくこととしている。

（むらかみ けんいち・しまだ しんいち）

甲子園ホテル

(現・武庫川女子大学甲子園会館)

桐浴 邦夫

再読 関西近代建築

モダンエイジの建築遺産

■建築の経緯と展開

現在、武庫川女子大学のキャンパスにある甲子園会館は、甲子園ホテルとして昭和5年(1930)、遠藤新の設計によって建てられたものである。北に六甲の連山を遠望し、東に武庫川の松並木を臨む風光明媚なロケーションで、当時周辺では、甲子園球場や数々のスポーツ・リクリエーション施設が建設され、リゾート都市としての住宅地が阪神電鉄によって整備されつつあった。リゾートを意識したこのホテルの経営には、かつて帝国ホテルにおいて手腕を振った林愛作が呼び寄せられた。はじめ阪神側はもう少し海辺に近い土地を考えていたようだが、林と遠藤は候補地を探し求め、現在の土地を見いだしたという。

林は帝国ホテルの支配人を任されていたとき、その新館の設計をフランク・ロイド・ライトに依頼し、またその設計および現場管理のスタッフとして遠藤新を起用した。甲子園ホテルを任されたとき、林は迷わず遠藤に設計を依頼した。林はリゾートホテルについて、確固たる考えを持っていた。従来の日本の旅館はプライバシーの点などにおいては問題があるが、そのサービスは大変優れたものである。設備のゆき届いた西洋式のホテルに日本式のサービスを加えたホテルをつくりたいと考えていた。それを十分に理解していた建築家が、遠藤新であった。

ただこの建築のホテルとしての役割は短いもので、わずか数十年であった。戦争も激しくなると、川西航空の宿舎として使用されていたといい、昭和19年(1944)には海軍病院となった。戦後は進駐軍により接収された。

そして大蔵省の管轄を経て、昭和40年

(1965)、武庫川女子大学の所有となり、平成18年(2006)には改修工事が行われ、現在に至る。

■建築概要

北側の正面から見ると、左右に立てられた二本の塔が印象的である。遠望すると五重塔か、あるいはその相輪のようにも見える。中央正面には玄関がやや小さく扱われる。緑釉瓦を葺いた小ぶりの屋根と庇を幾重にも組み合わせたウィングが、シンメトリカルに左右に延びる。壁面には四枚一組で用いられる装飾タイルとボーダータイル、そして日華石と呼ばれる北陸方面で採れた凝灰岩を組み合わせている。彫りの深い建物で、いわゆる「ライト式」と呼ばれるものである。庇には明かり採りのスリットが設けられ、光を取り入れることができるが、一方で雨宿りはできない。荷重の軽減が目的かも知れない。似た形式はライトの山邑邸(芦屋市、遠藤も設計スタッフに加わる)にもみられる。

天井が低く、少し窮屈な感じを受ける玄関から、奥にひかえる2階まで吹き抜けのラウンジ越しに、庭園が望める。廊下は林の意向で極力短くつくられている。西ウィングを少し進むと、南側に水と光を楽しむ設えがある。噴水に高窓から差し込んだ光が時々刻々と変化し、美しい。その横には地階から1階まで吹き抜けのパンケットホールがある。天井は市松模様を応用した照明器具がはめ込まれている。一般に市松模様がもてはやされるのは、ブルーノ・タウトの桂離宮礼賛の昭和8年(1933)以降とみられるが、ここではそれに先駆ける。もっともタウト以前においても、桂



①玄関と東ウィング (現在)

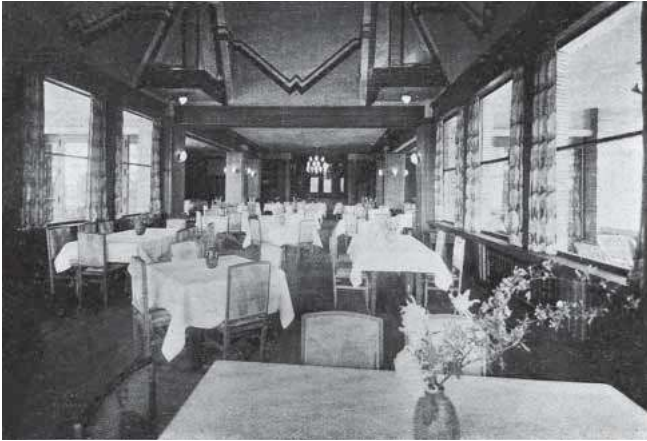
所在地／兵庫県西宮市戸崎町
設計／遠藤新
施工／大林組
竣工／昭和5年4月
構造／鉄筋コンクリート造
規模／地上4階、地下1階
種別／ホテル(学校)



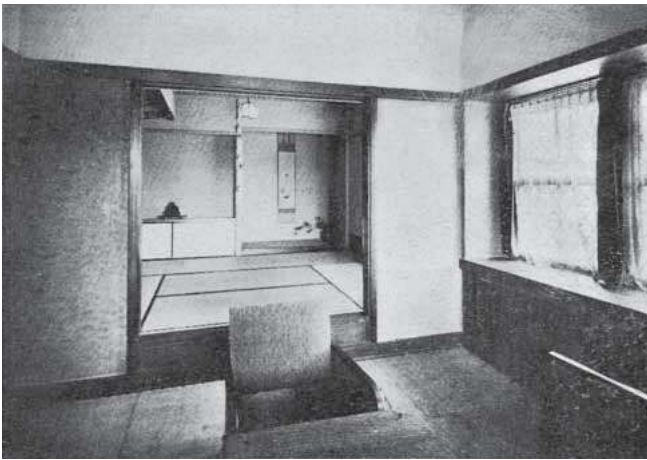
②正面外観



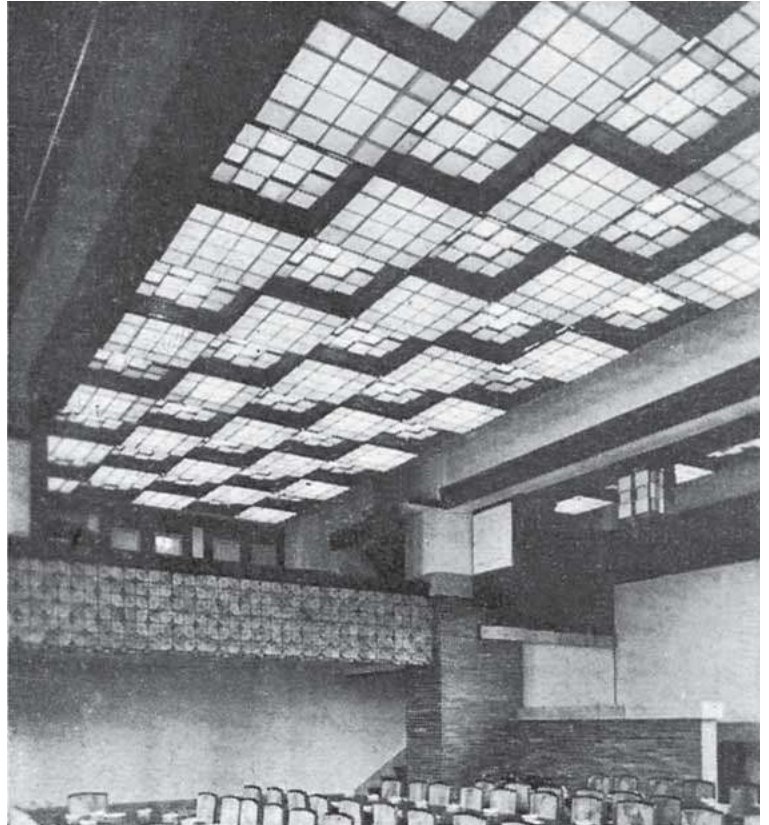
③南側外観



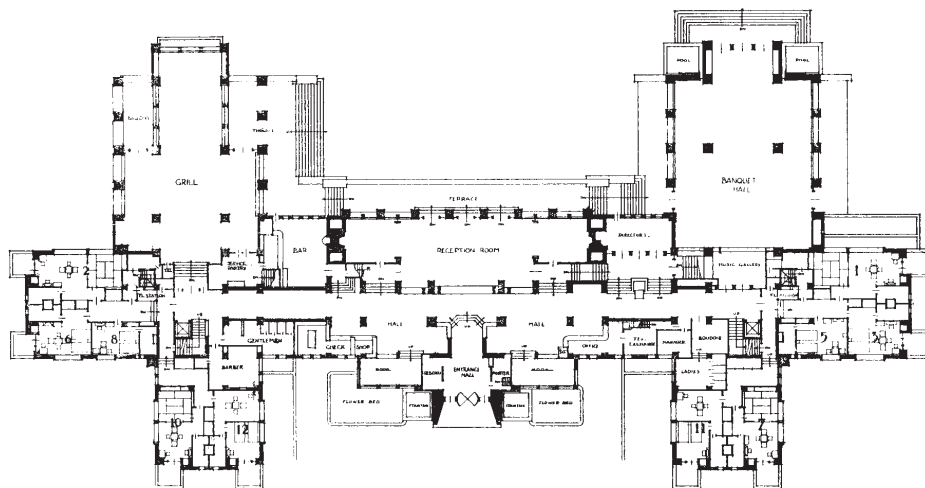
④食堂



⑤客室 和洋が組み合わされたスイートルーム



⑥宴会用大広間（バンケットホール）天井は立体的な市松模様の照明



⑦1階平面図

GROUND FLOOR

「建築と社会」第13輯第6号（昭和5年6月号）より



⑧南側外観



⑨アールデコ調の装飾 随所に幾何学的な装飾が見られる



⑩バンケットホール 明らかに和風を意識している



⑪底に開けられたスリット



⑫玄関からラウンジ 狭い玄関の奥に庭園の広がりが見える



⑬バンケットホール脇の噴水 光と水の演出



⑭4階和室 平天井と楽天井の組み合わせにより立体的な構成を演出



⑮旧食堂天井 ライトを受け継ぐ幾何学的な線の組み合わせ

は建築界において、よく知られた存在であった。

一方東ウィング奥には、現在は学生のスタジオとして実習に使用されているダイニングルームがあった。天井はライトの帝国ホテルや山邑邸に見られるような、線による幾何学的な装飾が施されている。

さて1階の一部と2階3階は、かつて客室が並んでいたところである。スイートルームは和室と洋室が組み合わされた部屋となっている。ホテルとしてはじめて和洋が一体となった部屋であった。和室は洋室より少し高く床を上げ、両者の視線を意識した組み立てである。この構成は藤井厚二が聴竹居で試みていたが、当時の大きな課題ともいえよう。和室には床の間が備わり、天井は掛込天井で、立体的な構成である。現在4階の和室にその名残がみられるが、そこでは平天井と落天井の組み合わせとなっている。

南側に回ると、中央のラウンジの柱が強い印象を与えている。北側正面の玄関が控えめな表情であるのと対照的である。また壁面にはアールデコ調の装飾が各所に施されている。

■設計者遠藤新

設計者遠藤新は、明治20年（1887）、福島県に生まれた。東京帝国大学に学び、卒業設計はホテルであった。在学中の実習では帝国ホテルを訪れ、林愛作との出会いがあったという。そのときの縁だろうか、当時ライトが設計をはじめていた帝国ホテルの図面の手直しを頼まれたという。おそらく林からすると、日本人としての感性が必要であったのかも知れない。

卒業後、はじめは明治神宮造営局に勤務する。このとき神宮宝物殿のコンペに参加し、入選を果たしている。図面を見ると複雑な屋根の組み立てが特徴で、立体的な構成を意識したものであった。大正6年（1917）には、林に請われて帝国ホテルの設計スタッフとなり、ライトとともに渡米し、タリアセンで設計業務にかかわる。翌年帰国し、チーフアシスタントとして帝国ホテル建設に従事した。大正11年（1922）には独立し、遠藤新建築創作所を開設。帝国ホテルのオープンは大正12年（1923）であるが、トラブルもあって、直前に林とライトはこのプロジェクトから立ち去ることになる。遠藤はライトから残りの仕事を託され、その完成を見届けた。

遠藤はその後、東京を拠点に住宅を中心に作家活動を行う。甲子園ホテルの仕事は、再び林に呼ばれたことによる。大正7年（1918）には長野県戸倉の笹屋ホテルの設計

を行う。これは数寄屋風の建物で、座敷の縁側に椅子を置いた現在の旅館の原形をつくっている。その後満州において設計活動を行っていたが、戦後引き揚げてからは体調を崩し、昭和26年（1951）に没する。

遠藤の作品は師事したライトの作風を忠実に受け継いだものであった。忠実さゆえ、その手法はモダニズムの時代にはあまり評価されなかった。しかし現在においては、その見事なまでの継承に対して評価が高い。一方、日本への意識も見逃してはならない。

■ライト、林、遠藤、そして日本

フランク・ロイド・ライトは、また別に浮世絵コレクターとしての顔も持っている。日本への興味は明治26年（1893）のシカゴ博での日本館、鳳凰殿との出会いにさかのぼる。明治38年（1905）には初来日し、各地をめぐり、浮世絵や美術品を蒐集していた。

有機的建築を標榜するライトの建築は、従来西洋においては対立した概念であった、建築と自然が融合するところにその醍醐味がある。後に発表するカウフマン邸（落水荘、1938）は滝の上に立てられた住宅であるが、それ以前の建物についても、たとえば深い軒によって空間の内外の繋がりを重視している。趣味の浮世絵を通じて、あるいはたびたびの来日によって、自然と一体化し、内から外へと曖昧に変化する日本建築の空間に触れ、そこから大きな影響を受けたことと推察される。

一方、林愛作は、明治6年（1873）に生まれ、若くして渡米し、日本美術を扱う山中商会に勤務する。明治42年（1909）に帝国ホテルの支配人として帰国するが、そのときニューヨーク支店長であった。日本美術に造詣の深いライトとの接点は、アメリカにおいて十分あったと考えられる。

さて、再び甲子園ホテルを観察しよう。正面玄関を入ると、すぐ奥に鮮やかな緑が飛び込んでくる。ラウンジを通して南側の庭園が見えるのである。これは例えるなら結界としての山門（三門）越しに寺院の境内を見るようなものであろうか。南禅寺や知恩院が思い浮かぶが、直接的な形ではない。南に回ると、北側の玄関の控えめな表現とは対照に、存在感のある柱が表現され、さしずめ七間三戸の楼門といったところか。

北側正面から見える2つの塔は薬師寺にも重なる（ご承知のように、西塔は昭和戦後の再建であるが、二塔が並び立つ伽藍配置は知られていた）。南に庭があり、池を従えた配置は寝殿造にも似る。小さな屋根を重ね、庇とともに深い陰翳をみせる手法は、「ライト式」

であるが、日本の形でもある。のちに丹下健三らがモダニズムにおける日本の表現として、水平ラインを強調し陰翳を意識した作品を発表するが、ある意味でその先駆けと位置付けることもできよう。内部の壁面には水平に廻らされたカーテンボックスや木製のボーダーがあり、それらは長押にも準えられ、壁面を分割した意匠は寝殿造あるいは書院造の室内とも読める。また随所に水が取り入れられ、表現されているのも、日本空間の象徴であろうか。

批判を承知で、甲子園ホテルを日本建築と重ねてみた。しかし遠藤のライトや林とのかかりから考えると、日本というものを意識せずにこれを建てたとは、到底考えられない。メタファーとしての日本が仕込まれていると考えるのは無理であろうか。

最後に2つの文章を紹介しよう。1つは大正6年（1917）林が『住宅』誌に投稿したエッセイ、「茶人になれ」というものである。それは住宅の設計についての話題であるが、茶室についてのことではない。茶人の家のように精神的な側面を重視せよとの主旨である。形として日本式であるか西洋式であるかはこだわらないとしている。また大正11年（1922）、『科学知識』誌にライトは「新帝国ホテルと建築家の使命」という記事を書く。帝国ホテルは、日本に存在する「古代の建築の精神」を「新しい手法で表現しようとした」ものである、と記されている。そしてこれは、遠藤新の訳であった。

主要参考文献

- ・『建築と社会』、昭和5年6月
- ・『新建築』、昭和5年7月
- ・谷川正己『日本の建築明治大正昭和 9 ライトの遺産』、三省堂、昭和55年
- ・山形政昭「旧甲子園ホテルの建築」『住宅建築』、平成元年2月
- ・『遠藤新生誕一〇〇年記念—人間・建築・思想』、INAX、平成元年
- ・『遠藤新作品集』中央公論美術出版、平成3年
- ・遠藤陶『帝国ホテルライト館の幻影』、廣済堂、平成9年
- ・黒田智子『近代日本の作家たち』学芸出版、平成18年
- ・三宅正弘『甲子園ホテル物語 西の帝国ホテルとフランク・ロイド・ライト』東方出版、平成20年
- ・酒井一光「武庫川女子大学甲子園会館（旧甲子園ホテル）前編・後編」『タイルの本』平成23年3月・4月

（きりさこ くにお／京都建築専門学校）

尾瀬 耕司

—OSE KOJI—



「旧木下家住宅」にて

経歴

1992年 神戸大学工学部建築学科 卒業
 1994年 同大学院自然工学科建築学専攻 修了
 1994年 出江建築事務所株式会社 入社
 1997年 出江建築事務所株式会社 退社
 1999年 尾瀬耕司・くみ建築事務所 設立
 2001年 神戸建築文化財研究所 設立

何を残す？

初めてお会いした瞬間からその雰囲気が、新進気鋭の建築家にある○
 ○な雰囲気がなく、落ち着いたものがある、穏やかさを感じたのはその人柄と
 仕事の内容にあったのかもしれない。

神戸を中心に育った尾瀬耕司氏は、大学卒業直後に建築家の事務所で
 数年働いて木造の勉強・実務をしたのち、出身大学からの紹介もあり若
 くして文化財保存に携わってきた。いまに残された建築物に携わった当
 時の関係者や材料に語り掛け、その心や想いを見出し・見極め、どこを
 どう残すのかを自問自答しながら判断していく。保存の仕事はそんな思
 考の繰り返しと教えていただいた。

そんな自我をすべて表現しえない「保存」の仕事が、お会いした時か
 ら雰囲気にあらわれていた。

一般的に建物を文化財として保存する場合、一般公開を求められ、表
 面にあるものの保存以外に、耐震性能と防災性能、バリアフリーを付加
 することが求められる。見えない部分でその機能をできるだけ補完し、
 改修後にその痕跡が残らないようにまとめる手腕が問われる。

木造の場合ほとんどが解体修理されるが、「解体が設計の始まり」とい
 われるほど、この行為において建物の実態を図面以外から現物で確認し、
 保存方法等の大きな方針が決定される。同時に、当時の材料と直接触れ
 合うことで、詳細まで当時の想いを汲み出していく。新築建物なら敷地
 やその周辺地域の歴史などが与条件となるが、さらに既存建物と解体さ
 れた状況をすべて確認した状態が設計の与条件になる。

与条件が多いほど設計の難易度は高く、継続されてきた建物の歴史の
 一部に手を入れる行為は慎重さも要求される。

ただ、修理する以上100%をオリジナルには戻せない、文化財とはいえ
 基本的に予算やスケジュールの制約もあり、どこに価値において何を残
 して何を変えるか取捨選択を迫られ、その行為に設計者の独自性が発揮
 されるという。

もう一つ大切だと感じたのは、取捨選択して方針を決定する際、オリ
 ジナリティを発揮する自分の判断以外に、数十年後に同じく保存改修を
 する人へのメッセージを意識して保存行為をしていること。

このような意識をもって建物の設計に向き合うことは少ない。もちろ
 ん新築でもそこまで考えている建築家はいないわけではないが、日本の
 建築の歴史を継続的に積み重ね、厚さを増していくには、重要な意識だ
 と思う。

兵庫県には、全国の先駆けとなった「ヘリテージ・マネージャー（歴
 史文化遺産活用推進員）」制度があり、歴史的建築物の発見・保存に生か
 す試みが展開されてきた。

4期生の同氏をはじめ、日本の建築界もそのような建築に尽力してい
 る人々にスポットライトが当たるよう、意識改革が必要と感じた。

聞き手 中村圭祐（竹中工務店）
 写真撮影 河合止揚



流響院の茶室

京都工芸繊維大学名誉教授
中村昌生

流響院の地は、真々庵から北へ続く地で、碧雲荘の西方、白川に近く、東山を借景するに絶好の場所である。もと岩崎小弥太の別荘であった。ここは一带南禅寺の塔頭のあった所で、明治39年、塚本与三次が、碧雲荘の西に山荘を造った。それが今の清流亭である。その南に造られた山荘が岩崎家の巨陶庵である。

清流亭の南は露地と幽邃な池庭であるが、巨陶庵の庭は、遠景に東山を借景して広々とひろがる池泉回遊式の庭で、小川治兵衛父子の作、そのなかに露地と茶室がつくられている。建物は^{へいぐし}弊串によると大正15年の造立であった。

巨陶庵は戦後進駐軍に接収され、その後龍村美術織物が織宝苑として利用していたが、平成17年真如苑が譲り受け、修復工事を施し、平成21年流響院と命名された。

織宝苑時代には、内部が展示所に使用されていたので、板間で間仕切りも取り払われていたのを、図面によって間仕切り等を復活、諸室は座敷に復された。襖などの装飾は現代作家の絵筆に委ねられた。幸い、外観はほとんど当初からの姿が保たれていて、庭屋一如の山荘の美しさは眺めることが出来るのである。

清流亭と流響院との境は、塀で仕切られ、段差もあるが、もとは続いていたように思われる。大正の御大典の時、清流亭は東郷元帥の宿所となり、元帥が清流亭と名付けたとも伝えられているが、流響院には、元帥が流響院の玄関の前に立つ写真が残されていることから、そのように推測される。岩崎家が譲り受ける時には、既存の建物があり、大正15年に建て増され、現在の姿になったのでなかろうかと推察される。

清流亭は名工として知られた上坂浅次郎が手がけているが、現在の流響院の建物には彼らしい手法が見られないようである。詳しく見れば同じ手に成ったところがあるやも知れない。弊串に記す棟梁は谷口鶴蔵であった。

建物は全体数寄屋造りの穏かで瀟洒な造りで、用材の取り合わせに工夫を凝らせ、軽妙な手法を随所に演出している。

南端に張り出した広間棟、池畔から爪先上りに沓脱石に導かれる。その苑路の右は小高くなって、姿のよい灯籠と蹲踞が配置され、苑池と溶け合うように露地がつくられている。そして茶室がある。座敷続きの中の四畳半の茶室である。織宝苑の時代に、この茶室の修理に立ち合ったことがある。その床の構造を見て感心した。足堅が柱を緊結して、束は一本も立っていない。淡々とした造りの四畳半であるが、そこに秘められた工夫の技が輝いていた。

また庭間から、建物の東側外観を眺める時、中央あたりに特に出張って設けられた座敷がある。三方に高欄を付した縁をめぐらし、寄棟造り瓦葺屋根に桧皮葺の下屋を廻し、羽を広げたように深々と、緩い勾配でさしだされている。寝殿造りの泉殿を思わせる。出入口には蓐戸が吊られているから一層そのように見える。

高欄といっても低く華奢なもので、縁は高さ二尺程、ちょうど池はこの縁先まで迫っており、庭からは池に浮かぶ座敷のようにさえ見える。苑路はこのあたりは沢渡りになる。

檼は、座敷の桁から約八尺余り、水面まで軽快にさし出されている。三方へさし出た化粧屋根裏を支えるのは、圣四寸程の杉丸太、それが交わる両端には支柱を立てていないから、さらに軽妙さを加えている。

この泉殿風の座敷によって、庭と建物との一体感が強調されている。



主屋旧書斎の軒



泉殿風の座敷の前方、池畔に木立に囲まれ、露地の一境がある。両端に切石を連ねた自然石の延段を進み、竹を詰打ちにした戸を吊った中門を潜ると、北西向に建つ茶室涼流亭の側面があらわれる。

苑路の左手に蹲踞がある。やや大きく掘られた海の中央にほぼ円形の水鉢を据え、その先、海の中に鉢明りの灯籠が生けこまれている。青竹の樋を二段に引き込んだ筧には、岩走る水を掬む趣がある。

茶室は四畳半、それに水屋、勝手の間、勝手口（土間）等から成る。

外観は、屋根が甚だ複雑な構成をみせている。茶室四畳半の部分は、柿葺切妻造りの前面に深く庇を付けおろした、通例の草庵茶室の外観である。しかし屋根の勾配は緩く、建ちを極力低くおさえ、さらに起りをつけて温和しい姿を形づくっている。付けおろしの庇の両端は、切妻屋根の軒に抑えられて窮屈にさえ見える。それは納まりを窮屈にしても、屋根を低めたかったからである。

草庵茶室の屋根は、なるべく低くつくるのが通例である。少しでも^{そび}聳える感じにならな



涼流亭外観

いようにするのが、茶の湯が求める造形である。それで少しの余裕も生じないように、寸法を決めてゆく必要がある。必ずしも寸法通り施工が出来なければ無理な納まりが生じる。それで余裕をみすぎると、緊張感の少ない姿になる。どのあたりで調和を図るかが作者の工夫のむつかしさである。

涼流亭の作者は建て物の高さを、極力低める作風の人である。それは茶室だけでなく、付属部分を含めた全体の屋根の造り方にもあらわれている。すなわち、茶室の屋根は、茶室だけ梁間一間半にして屋根を低め、背後水屋、勝手部分は梁間を広げて棟を高くし、さらに付属部分は別屋根にして、総体に高く屋根をつくらないように構成を工夫しているのである。

正面土間底は、右に袖壁を付し、入口は間口五尺七寸余、三枚障子の開放的な入口である。右端に沓脱石を据える。左端に戸袋を設けているが、隅柱との間に僅かに壁を隔てている。内法高は四尺八寸、障子の腰板はなく、框のせいを四寸にしている。入口の間口部のあけ方、障子の腰の加減に、甚だ繊細な工夫を注いでいる。

間取りは四畳半原畳床である。すなわち四畳半の客畳の一畳を板敷とし、板の上に床を設けた構えである。一枚板の上に床柱だけを建てる場合と、框を矩折りに廻す形とある。ここは後者の実例である。すなわち、一畳の広さの中に前板と脇板を入れているのである。四畳半の中に床を取り込んでも、前板と脇板のあることによって、座中に広さを感じさせる、合理的な間取りの工夫である。表千家六代原叟（覺々斎）の好みと伝えられている。

床柱は、栗の六角なぐり、剣先を見付に立てている。そして床框には档丸太、壁付の相手柱は温和しい磨き丸太を取り合わせている。



涼流亭床の側

床脇の吹抜の壁留は竹である。何といても、栗の床柱が、力強さを感じさせる。

そして框の档丸太がまた目を惹く。档丸太は強い。しかし出節が多く、本末の差が^{もとすえ}大きく、荒々しさがあって扱いにくい材である。框の档丸太は、ずいぶん選び抜いた材のようである。5カ所に節があり、適当にハツリを施し、節とハツリ目の配置を程よくして、実に妙味のある景色をつくり出している。档の持味を生かした絶妙な框である。因みに床柱の通りの壁付の柱、点前座入隅にも档丸太を立てている。

客座の天井は、普通の座敷と同じ竿縁天井、その高さも六尺六寸に張られている。そして床の前板から脇板の上は別の天井を張っている。その部分だけノネ板の網代を四寸五分下げて張っている。そのために床の前、竿縁天井との境に垂れ壁がついている。原叟床では、客座の天井がそのまま、前板、脇板の上まで延びているのが普通で、このような垂れ壁は異色な手法である。さすがに垂れ壁の^{かべどめ}壁留は省かざるを得なかったであろう。点前座の上は、^{すすだけ}煤竹の粉を張り、^{へぎ}煤竹の竿を配した落天井としている。天井の材料、手法共、通例の草庵茶室とは異なっている。

また客座側の壁面には、中央に大きく障子四本建ての窓を開けている。左右の壁もほぼ同じで、窓はほとんど中央に開いている。鴨居、敷居と方立は角柄に組み、草庵には珍しい謹直な意匠である。墨蹟窓を除いて、客座には躰口も下地窓も連子窓もないのである。

茶室の背後が水屋で、台目三畳分の板間にそれぞれ台目幅の水屋棚と地袋をそなえている。襖引違い建てを隔てて北に三畳敷がある。その東一畳の南に向板を入れ丸炉を切る。

西北隅に板簀子の流しを設け、茶道口との



涼流亭客座の窓

間は^{くれ}榑板張りである。

こうした二室から成る勝手は、茶事の時の便が周到に考えられている。懷石の準備にも極めて働きがよい。勝手口から踏み込む土間も広く、右手に腰掛風の板間がある。



涼流亭
勝手口敷居の新目

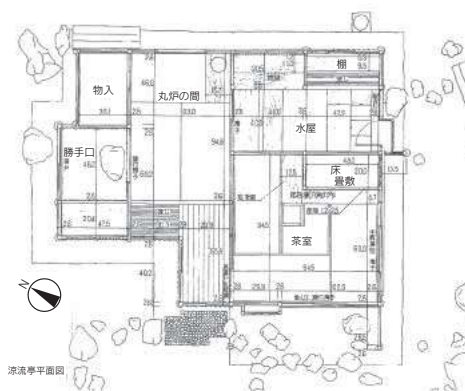


岩崎小弥太は、表千家十二代^{せい}惺斎に指示し、巨陶庵で茶を楽しんだと伝えられる。蒐集した名器は静嘉堂文庫に収蔵されている。惺斎の依頼で久田無適斎が岩崎家のお茶を指導していた。おそらく涼流亭での茶事にはしばしば関わったに違いない。

それでは涼流亭は千家の好み、無適斎の指導によるものであろうか。原叟床の茶室であることは、そのような推測がふさわしいが、しかし原叟床の特色が生かされていないこと、草庵茶室としては異色な手法や、千家風の好みとは異なる材料の取り合わせなどから、これは茶匠の指図によるものではなく、施主の要望をきいて工匠が工夫した茶室であると考えられる。

岩崎家が譲り受ける以前に造られていた茶室であるかも知れない。清流亭を手がけた上坂浅次郎の輩下には北村捨次郎もいた。北村は後年碧雲荘の諸建築に技を揮った。建て物を低く造る彼の得意の作風や档丸太を巧みに扱いこなす技術と通じるものが、この涼流亭にも見られ、捨次郎の若い頃の仕事ではなかったろうか、そんな想像もめぐらすのである。

(なかむら まさお)



涼流亭平面図

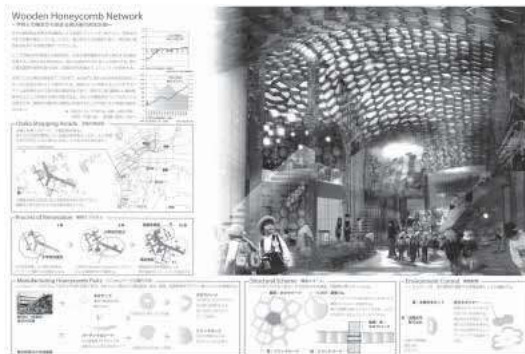
審査発表

大阪「ええとこ」そうせい(創生)プロジェクト

2012 第2弾 OSAKA

「新ええとこ」提案コンクール

リアルなコミュニケーションを生む
「新ええとこ」を提案して下さい。
アイデアの表現は自由です。



優秀賞

Wooden Honeycomb Network ～学校との融合から始まる商店街の再生計画～

鍋谷めぐみ・加藤美穂・山崎篤史
大西陽子・條 昌子・福本晃治
大野正人・萩平隆司・堤奈緒子
鈴木承慈・伊藤杏奈・佐藤菜生
仲谷彰人・Edward Hsu

大阪は全国でもアーケードの多い都市である。多くのアーケードのなか、さびれた商店街に焦点をあて、良さを生かしながらか活性化を提案する試みである。都市の木造化も同時に試み、住民参加の形で

都心に人々が快適に集う場を作りたいと考えた。いろいろな用途が混然一体となり、都市の楽しさを機能的・空間的に楽しむ事が可能となる再生計画である。



優秀賞

線状につながる緑地

岩倉 巧

アスファルトで覆われた車道を剥がし、緑地の道をつくることで、車によって占領されていた車道や駐車場を地域住民に解放する計画である。細い線状の公園や小さな広場を通して、木造密集住宅地の中をぐるぐると巡るネットワークが生まれ、屋外カフェやフリーマーケットなど人々のアクティビティが活発にあふれる場所や玄関の鉢植えや近所の人の立ち話など日常的な生活風景が垣間見える場所など様々なものを繋いでいくことで、道を介した新しいコミュニティをつくりだす。



応募作品: 37点

最優秀賞: 該当なし

優秀賞: 5 作品

入賞作品は(株)日本建築協会HP

<http://www.aaj.or.jp>

に掲載。

また大阪住まい情報センター 4 階住情報プラザにて 2 月 9 日～2 月22日まで展示

■審査講評 橋爪紳也

(大阪府立大学21世紀科学研究機構教授)

人と人とのリアルなコミュニケーションを産みだす場を「新ええとこ」と定義、日常・非日常、双方の生活において、市民が出会う場を設けることで、防災・孤立化の防止などに貢献することができる。主催者の想いを受けて37作品が寄せられた。十分に時間を費やした審査の結果、今回は最優秀賞に値する作品はないという結論に到り、優秀賞5作品を選定するにとどまった。

全体の印象を述べておこう。建物が密集した住宅地、商店街を対象とした提案が目についた。既成市街地では、従来型のコミュニティが崩れており改善が必要だとする考えなのだろう。いっぽう地域を分断し景観的に課題があると指摘されがちな都市の護岸や高架橋の下の空間を扱う作品も多い。

ただ残念ながら、多くの作品に既視感があった。これまでも、しばしば提案されてきた発想を超えることのない案が多数であった。具体例を挙げれば、橋上のコミュニティ空間としての利用を提案する作品が複数あったが、早くから類似の提案があり、すでに2012年の秋には中之島のガーデンプリッジで社会実験が行われている。アイデアより実践が先んじているかたちだ。

優秀賞のなかでは「中之島国際ランドスケープびえんなーれ」の企画は、実行可能な提案であると思う。景観をフレームで切り取る試みは、テーマパークやアートイベントで先例があるが、アーチスト、造園家、市民グループの3者が協働するという点に新味を感じた。

「Wooden Honeycomb Network ～学校との融合から始まる商店街の再生計画～」は、新素材を活用したエコロジカルなアーケードの提案が面白い。ただ学校と商店街の融

合によるコミュニティづくりなどのシステム提案は、応募の書面からは十分に読み取ることができなかった。単なる空間デザインにとどまっていると思う。

「めしストップ大阪」は、バス停に隣接した道路に常設店舗の営業を認めようとするもの。占有許可を得ることが可能かどうかはさておき、大阪らしい業態を各停留所に配置して、ネットワーク化をはかる発想を評価したい。店舗に人がいることで、確かに防犯には資するだろう。朝の時間帯の営業のありかたなどの提案もあれば感じた。

「線状につながる緑地」は、戦前の木造長屋がまだ残る空堀界隈にあって、現行の車道の一部のアスファルトをはがして緑化し、歩行空間への転用をはかるもの。また密集した市街地のなかに広場を設ける提案もある。新しい発想とは思えないが、「新ええとこ」を求めている今回の趣旨にそった作品として評価したい



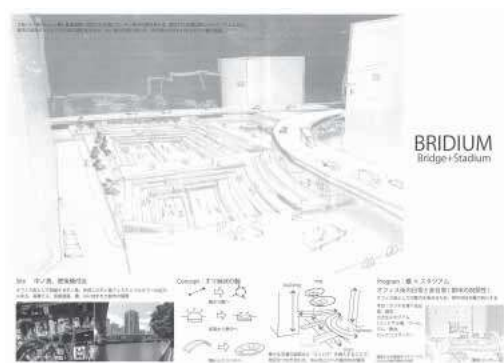
優秀賞

中之島国際ランドスケープびえんなーれ

中原文雄

大阪の顔、中之島の「新ええとこ」を舞台に世界のアーティスト、造園家、市民グループ3者が協同製作する「国際びえんなーれ」の開催である。アーティストはフレームの視点を定め未来予想図を創作する。造園家は背面

に絵とコラボする「緑と花の屏風」を設計する。市民グループがその緑を育てケアする。「びえん」は美苑となり美縁へと育つ。チームワークとコミュニケーションが出来映えに反映されるそんな「市民参加型びえんなーれ」である。



優秀賞

BRIDIUM Bridge+Stadium

中川聡一郎

オフィス街として発達する中之島に日常と非日常の双方を魅力的にする新たな橋を提案する。既存の橋と高層ビルと阪神高速道路に囲まれた都市の隙間のような土佐堀川の水面上に丸いすり鉢状の橋を架ける。

囲まれた空間は都心のスタジアムとして、皆の目に触れる都市の顔となり、スポーツや野外コンサートなど都市のスペクタクルとなって、大阪をさらに「ええとこ」に変えてゆく。



優秀賞

めし ストップ! 大阪

野村直毅・三田村 聡

大阪の特徴の一つである独特の食文化に着目し、既存のバス停の横に屋台を提案する。各屋台は地域のコミュニケーションの拠点となり、それらは、バスのネットワークによってつながれる。食文化をきっかけとしたコミュニケーションのネットワークによって大阪の街全体が活性化されていく。



「BRIDIUM Bridge+Stadium」は、オフィス街にある既存の堰（実態は人道橋）を活かしつつ、河川をスタジアム化することで、祝祭性を高めようというもの。河川の流路を半分に減じ、また観客のための空間を設営することで、舟運の妨げになるため提案の場所ではリアリティはない。ただ交通空間に特化している都心の河川空間を、コミュニティの場に転じさせたいという想いは理解できる。

次年度以降、このコンクールが継続されるのであれば、ぜひハードとソフト双方におよぶ、先例のない提案を期待したい。

岩崎美紀子

（筑波大学人文社会系国際公共政策専攻教授）

今回このコンクールの審査員をお引き受けたのは、私が座長を務めた総務省研究会で提示した「新しい公共空間」の考え方で、建築を通じて社会に貢献するという日

本建築協会の理念に、相通じるものを感じたからです。人が自分あるいは自分たちだけの私的世界に閉じこもらず、外への関心をもって、社会の成員であることを意識して過ごすことができれば、厚みのある市民社会が形成されます。しかし実際に外にでても、居場所がなく人とつながることができなければ、漂流することになります。ネットを駆使してバーチャルな空間で人とつながる試みが隆盛していますが、生身の人間がリアルな空間で居場所があることを実感できることが大切だと思います。

リアル空間における場所では、実存の様々な人々が交差します。家でも仕事場でもない中間的領域が場所として存在しそこで少しだけ時を過ごすことができる、それが「ええとこ」なのではないでしょうか。

大阪と聞いてまず浮かんだイメージは水辺でした。水辺の場所は、川に沿った河岸だけでなく川を横切る橋もあり、歩くのが

苦にならない「動」の空間となっています。その特徴を残したまま、そこに留まり時を過ごす「静」の空間ともなることで、コミュニケーションが生まれます。河岸では、「私」の専有空間と「官」の管理空間がそれぞれ独占的に峻別されずにつながることができれば、それは市民に共通の空間となります。橋は、川を渡ることによって両岸をつなぐだけでなく、そこでのマルシェは水面の上という特殊な状態で人をつなぐ魅力ある場にもなります。

今回の応募作品にもいくつか水辺を扱ったものがあり注目しましたが、審査会において実際にすでに取り組まれている内容と類似したものであることがわかり、「場所の価値」を高める大阪の先進性を実感しました。さらなる独創性と実現可能性を要求するレベルの高さに到達している最優秀作品はなく、優秀賞として5点を選定しました。

▶「河口龍夫 — 聴竹居で記憶のかけらをつなぐ」展

東日本大震災から2年を迎え、3.11で失われた言葉や感覚、記憶を呼び覚ますきっかけになることを願い、現代美術家の河口龍夫が昭和初期の住宅「聴竹居」に作品を展示する。戦災や震災をくぐり抜け長い時を刻んだ建物に、人間の記憶と深く結びついた種子、貝殻、匂い等が題材の河口の小作品約60点を展示。

会場 聴竹居 京都府乙訓郡大山崎町大山崎
■見学 (定員 各20名)

日時 3月2日(土) 10:00/11:00/12:00
3月3日(日) 10:00/11:00/12:00

会費 1,300円 (建物見学料1,000円込)

■トーク (定員 各40名)

会費 2,000円 (見学料1,300円込)

トーク① 3月2日(土) 14:00~16:00

話し手 河口龍夫氏 (現代美術家、筑波大学名誉教授、京都造形芸術大学客員教授)
鞍田崇氏 (哲学者、総合地球環境学研究所特任准教授)

トーク② 3月2日(土) 17:00~19:00

話し手 河口龍夫氏
堀部安嗣氏 (建築家、京都造形芸術大学大学院教授)
森桜氏 (アート・コーディネーター、当展企画者)

■茶話会 (定員 各25名)

会費 2,000円 (見学料1,300円込、お茶と特製和菓子付)

茶話会① 3月3日(日) 14:00~16:00

話し手 河口龍夫氏、
鞍田愛希子氏 (植物研究家)

茶話会② 3月3日(日) 17:00~19:00

話し手 河口龍夫、森桜氏

●申込期間 2月18日(月) まで (申込多数の場合は抽選の上2/22までに通知)

●申込方法 以下を明記の上メールで morisakura@nifty.com (森オフィス) まで

- (1) 希望日時 (第1・第2)
 - (2) イベント名
 - (3) 申込者氏名、職業、所属、電話、メール
 - (4) 同伴者 (1名まで) の氏名、職業、所属
 - (5) 合計人数
 - (6) 当展へのメッセージやトークでの質問
- 詳細は下記の聴竹居ホームページ参照

http://www.chochikukyo.com/

①特別企画展 国立トレチャコフ美術館所蔵 レーピン展

イリヤ・レーピン (1844-1930) は19世紀後半のロシア美術を代表する画家であり、歴史画、風俗画、肖像画など様々なジャンルで傑作を生み、ロシア・リアリズムの旗手として活躍した。本展では、ロシア絵画の殿堂であり、世界最大のレーピンのコレクションを所有する、モスクワのトレチャコフ美術館の所蔵品から、レーピンの初期から晩年に至る、様々なジャンルの油彩と素描約80点を紹介。日本初の大規模なレーピンの回顧展となる。

期間 2月16日(土)~3月30日(土)
10:00~17:00 (入場は16:30まで)

休館日 月曜日

会場 姫路市立美術館

姫路市本町68-25

TEL.079-222-2288

観覧料 一般1,000円、大高生600円、
中小生200円

■講演会

会場 姫路市立美術館 2階講堂

定員 100名 (当日先着順)

聴講料 無料 (①23日は当日観覧券が必要)

①「絵の読み方ーレーピンを中心に」

講師 中野京子氏 (作家、ドイツ文学者)

日時 2月23日(土) 14:00~

※当日13:30より整理券を配布。

②「イリヤ・レーピンの絵を読み解くー1870-80年代の歴史画と風俗画」

講師 杉山昌夫氏 (神奈川県立近代美術館主任学芸員)

日時 3月3日(日) 14:00~



イリヤ・レーピン《思いがけなく》1884-1888年
トレチャコフ美術館蔵

②特別展 天下の城下町 大坂と江戸

現代日本の都市の多くは、江戸時代の城下町が基礎となって発達した。なかでも大坂と江戸は、特に規模の大きな城下町であり、他の城下町のモデルともなった。それは、「豊臣秀吉」と「徳川家康」という2人の「天下人」が、政権の拠点として構想し建設した「天下の城下町」であったことによる。特に大坂に関しては、政治の実権が豊臣氏から徳川氏に移るといふ歴史に合わせるかのように、都市の構造や景観を変えてゆくことになる。本展では、前史としての織田信長の城下町に始まり、大坂と江戸それぞれの城下町の誕生から完成に至るまでの歴史について、絵画資料や古地図、古文書や発掘資料など、約250点の資料によって紹介する。

期間 2月2日(土)~3月25日(月)

9:30~17:00 金曜日は20:00まで
(入館は閉館の30分前まで)

休館日 火曜日

会場 大阪歴史博物館 6階 特別展示室
大阪市中央区大手前4-1-32
TEL.06-6946-5728

観覧料 一般800円、大高生600円、
中学生以下無料

■講演会「大坂と江戸」

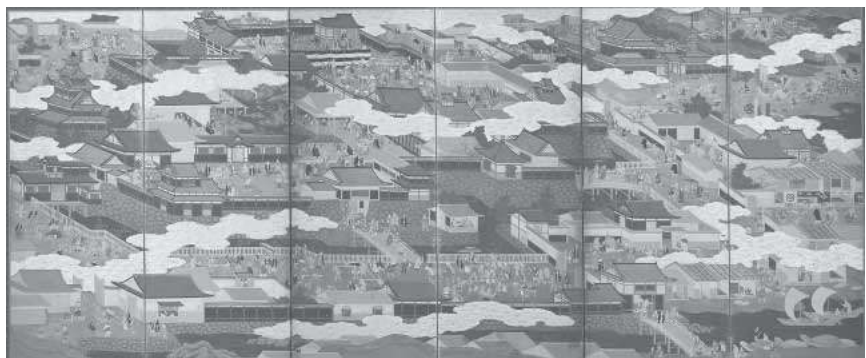
日時 3月10日(日) 13:30~15:00
(受付は13:00開始)

講師 脇田修氏 (大阪歴史博物館館長)

会場 大阪歴史博物館 4階 講堂

定員 250名 (当日先着順)

参加費 300円 (ただし、特別展の観覧券もしくは半券呈示の方は無料)



「京・大坂図屏風」六曲一双のうち右隻・大坂図 江戸時代 大阪歴史博物館蔵

③日中国交正常化40周年特別展 中国 王朝の至宝

中国で最古の王朝といわれる夏の時代からおよそ4000年の間、中国各地にはいくつもの王朝が誕生し、特色ある豊かな文化が育まれた。それらは、相互に影響を与えつつ多様な展開をとげ、世界に冠たる中国文化を形成し、日本をはじめ、近隣地域にも多大な影響を及ぼした。本展では、夏から宋の時代にわたる歴代の王朝の都・中心地域に焦点をあて、それぞれの地域の特徴が凝縮された代表的な文物を対比しながら展示する新たな手法で、多元的でダイナミックに展開してきた中国文化の核心に迫る。また、2008年に発見された「阿育王塔」など日本初公開となる最新の発掘成果を含め、国宝級の「一級文物」約60%というスケールで貴重な文物168件を紹介。

期 間 2月2日(土)～4月7日(日)
9:30～17:30 土・日曜日は19:00まで(入館は閉館30分前まで)
休館日 月曜日(2/11は開館、翌2/12休館)
会 場 神戸市立博物館
神戸市中央区京町24
TEL.078-391-0035
観覧料 一般1,500円、高大生1,100円、
小中生600円

■記念講演会

会 場 神戸市立博物館 地下講堂
定 員 各180名
聴講料 無料(観覧券が必要)
※当日13:00より講堂前で整理券を配布

①「中国文明の謎」

講 師 松本伸之氏(東京国立博物館学芸企画部長)

日 時 2月2日(土) 14:00～15:30

②「四川古代王国と秦始皇帝陵の出土文物」

講 師 曾布川寛氏(京都大学名誉教授)

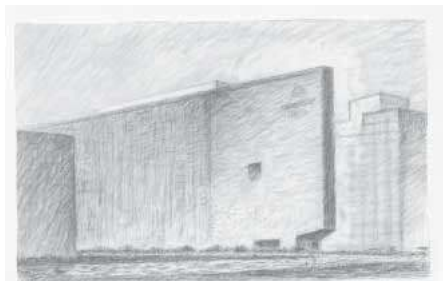
日 時 3月9日(土) 14:00～15:30



あいくおうとう
阿育王塔【一級文物】北宋時代・大中祥符4年(1011) 江蘇省・南京市博物館蔵

④第12回村野藤吾建築設計図面展 ー都市を形づくる村野藤吾のファサードデザインー

村野藤吾(1891～1984年)の仕事の主軸の一つに、都市の街角の表情を形づくる建物として、オフィスビルや銀行、商業ビルや百貨店といった作品群がある。それらの建物は、村野独自のデザインが施された独特の雰囲気を醸し出し、その街のランドマーク的な存在として長い間人々に親しまれてきた。しかし、こうした高い価値をもつ村野の建築が次々と取り壊しの危機を迎えている。そんな中、村野が都市に何をもちたそうとしたのか、その独自のファサードデザインと形態操作にどのような意図が込められていたのかを確認することは、建築が都市に何をできるのか、良好な都市景観はどのようにすれば守り育てることが可能なのかなど、建築と都市の明日を考える上での貴重な手がかりとなる。



日本興業銀行本店(現・みずほコーポレート銀行本店)スケッチパース
京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵(I-019-C-62)

⑤「こころの京都百選」完成記念 特別展

古くから多くの人々が、京都を想うところを様々なかたちで表現してきた。そのような京都への想いと芸術の営みを現代へと受け継ぎ、未来に伝えていくために、京都府では平成23年度から2カ年にわたり、現代京都の日本画壇を代表する作家に依頼し、京都の風景を描いた100点の新作日本画シリーズ「こころの京都百選」を制作した。その完成を記念し、本展では江戸時代の画家が描いた京都の姿にはじまり、明治・大正・昭和・平成と続くそれぞれの時代の日本画家たちが思い描いた「京都」のイメージを紹介。京都を訪れた画家たちの京都への想いも交え、過去から現代へと連なる美しい京都の姿を展覧する。

期 間 2月9日(土)～3月24日(日)
10:00～18:00 金曜日は19:30まで(入室はそれぞれ30分前まで)
休館日 月曜日(2/11は開館、翌2/12休館)

会 場 京都文化博物館
京都市中京区三条高倉
TEL.075-222-0888

本展では、村野藤吾が都市の中で試みた大小21件の建築作品を取り上げ、現存する作品を撮り下した現況写真も含め、原図や模型などの資料を通して、端正で格調の高いデザインに込められた建築思想の在りかを確認する。

期 間 2月4日(月)～5月6日(月・祝)
10:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 日曜・祝日、2/25、2/26、3/12、3/13ただし4/28～5/6まで無休

会 場 京都工芸繊維大学美術工芸資料館
京都市左京区松ヶ崎御所海道町
TEL.075-724-7924

観覧料 一般200円、大学生150円、
高校生以下無料

■記念シンポジウム

「村野藤吾の都市へのまなざし」

日 時 4月20日(土) 14:00～17:00

会 場 京都工芸繊維大学60周年記念館1階
記念ホール

パネリスト

塚本由晴氏(建築家・東京工業大学大学院准教授)

酒井一光氏(建築史家・大阪歴史博物館学芸員)

司 会 松隈洋氏(京都工芸繊維大学美術工芸資料館教授)

定 員 150名(入場無料。当日先着順)

日本画 こころの京都

観覧料 一般1,100円、大高生700円、
中小生400円



三宅風白「稚児之図」昭和4年 八坂神社

本欄掲載の①～⑤の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手(80円)を日本建築協会事務局までお送りください。

編集委員会

第1回編集委員会+広告企画小委員会

12月12日(水) 18:00~19:30

出席者 米井委員長ほか6名

議 事 [編集委員会]

- (1) 1月号~5月号特集報告と検討

[広告企画小委員会]

- (1) 8月号特集「うめきた」企画検討

- (2) 広告依頼先検討

第8回インテリア・住宅系分科会

12月6日(木) 19:30~20:30

出席者 間瀬幹事ほか6名

議 事 2013年2月号特集について

第9回構造分科会

12月7日(金) 18:00~19:30

出席者 橋本幹事ほか5名

議 事 (1)「構造の頁」について

- (2) 12月号特集企画について

- (3) 5月号特集について

第7回設備分科会

12月5日(水) 18:00~20:30

出席者 赤澤幹事ほか5名

議 事 (1)「設備の頁」の企画について

- (2)「見学会の企画」について

- (3) 次回の特集テーマについて

第9回法令分科会

12月12日(木) 15:00~17:00

出席者 平山幹事ほか7名

議 事 (1)「法令コーナー」の企画

第9回作品作風小委員会

12月20日(木) 19:00~20:20

出席者 稲垣副委員長ほか5名

議 事 (1) 作品の掲載状況並びに掲載予定の報告

- (2)「gallery」掲載報告・予定

教育委員会

第3回工高生教育小委員会

12月13日(木) 18:00~19:00

出席者 宇都委員ほか5名

議 事 (1) 第58回工高生デザインコンクール実施報告

- (2) 第59回工高生デザインコンクール募集規定の検討

出版委員会

第8回出版委員会

12月20日(木) 18:00~19:00

出席者 上原委員ほか7名

議 事 (1) プロのノウハウと特装本の経過報告

- (2) 進行中のテーマについて

10年委員会

第7回10年委員会

12月6日(木) 18:30~20:00

出席者 設楽委員長ほか4名

議 事 (1)「新えとこ」提案コンクール表彰式等について

- (2) 学生のための見学会について

特別委員会

第2回 群 像

12月4日(水) 18:30~20:00

出席者 本多委員会代表他6名

議 事 (1) 群像登壇者の選出・担当について

- (2) H25年2月以降の担当について

第42回 群 像 (インタビュー)

12月11日(火) 15:30~16:30

出席者 中村 圭祐 (インタビュアー) ほか1名

場 所 旧木下家住宅

インタビュー 神戸建築文化財研究所 主宰 尾瀬 司 氏

第43回 群 像 (インタビュー)

12月27日(木) 12:00~16:30

出席者 黒川 祐樹 (インタビュアー) ほか2名

場 所 ギャラリーK

インタビュー 木村松本建築設計事務所 木村松本 氏

見学会

「中之島フェスティバルタワー」見学会

12月3日(月) 14:00~16:30

講 師 江副 敏史氏 (株)建設設計

委 員 瀬戸川委員長ほか5名

参加者 28名

講習会

「平成24年度建築工事実務講習会」開催

12月6日(木) 9:00~17:30

場 所 大阪府建築健康会館6階ホール

講 師 施工計画 大村 泰正氏

(清水建設株)

松下 嘉宏氏

(株)竹中工務店)

仮設見積 笹田 秀幸氏

(株大林組)

受講者 46名

2012年建築関係団体合同忘年懇親会

12月14日(金) 18:00~19:30

場 所 シティプラザ大阪2階「旬」

参加者 225名

編集委員会 (平成24年度)

■副会長

設楽 貞樹

本多 友常

■編集担当理事

浅野真一郎

佐藤 榮一

竹中 統一

立成 良三

松村 孝治

三柴 利雄

吉村 英祐

◎米井 寛

■副委員長

勝山 太郎

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

高橋 和也

田中 直人

不動 剛志

紅谷 昇平

松田奈緒子

三宅 次郎

△守井 辰

吉村 英祐

★建築計画系

荒木 宏之

大西 広朗

清原 健史

静 茂夫

下坂 浩和

野田 隆史

福田 容明

矢嶋 陽平

△米山 剛史

★インテリア・住宅

川合 隆之

小西 貴宏

黒柳 亮

酒井 雅男

谷垣 浩一

塚口真佐子

ベリー史子

△間瀬 一博

■構造分科会

秋田 智

石田 大三

岸本 光平

小芝 淳一

志摩 好宣

瀧野 敦夫

角田 耕一

△橋本 宗明

松村 健

向井 洋一

◎委員長 ○副委員長 △幹事

■設備分科会

△赤澤 正治

岩城 憲治

梶井 宏修

北野 勝也

樺田 輝生

谷野 太志

夏井 重行

野崎 正二

橋本 直樹

福谷 周

梶井 貴廣

宮崎ひろ志

村上幸三郎

■施工材料分科会

桜井 和男

△高橋 秀一

萩原 友貴

中野 敬史

藤丸 啓一

渡邊 聡

■法令分科会

岩見 吉剛

河野 学

小松 輝樹

越智 有子

吉岡 忠

△平山 英

吉田 純

鷲尾 真弓

■作品作風小委員会

居内 章夫

池上 明

○稲垣 和江

井上 雅祐

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉橋 尉仁

倉瀬奈千子

澤田 純一

輦野 敦司

豊田 充広

鳥居 久人

西田 佳代

芳谷 晴彦

増田 敬彦

廻 はるよ

■広告企画小委員会

大谷 金由

小川 雄介

小山 昭

権代 晃

○前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

印刷 2013年1月29日

発行 2013年2月1日

発行人 社団法人日本建築協会

大阪府中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 (株)中島弘文堂印刷所

定価 1200円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます。

空調・衛生・クリーンルーム設備
(設計・施工)



本社・本店 東京都港区浜松町1-25-7 電話03(3432)5711
大阪支社 大阪市淀川区加島1-58-59 電話06(6302)2270
支店 北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設計施工



本店・大阪本社 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号 電話(06)6441-8231
東京本社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号 電話(03)3261-8231
支店 名古屋・福岡 札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・
広島・高松・熊本
営業所 帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・
福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所 旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店 シンガポール・ホンコン
技術研究所 〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地 電話(0492)58-1511

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応するために

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761/FAX.06-6976-8765
東京事務所 〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1丁目9番地ニュー御茶ノ水ビル601号
TEL.03-3526-5580/FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail:sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛸池西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

コンクリートのひび割れ対策に

NETIS 登録済み
KT-040018-V

DENKA
DENKI KAGAKU KOGYO KABUSHIKI KAISHA

高性能膨張材

デニカパワーCSA

JIS A 6202
適合品

特性

- ・乾燥収縮の低減
- ・自己収縮の低減
- ・水密性の向上(防水性)
- ・温度ひび割れの低減

主な用途例

- ・合成デッキスラブ
- ・土間スラブ
- ・RC 構造物
- ・自己充填コンクリート
- ・マスコンクリート 他

膨張材以外にも

- ・無収縮グラウト材
(タスコン)
 - ・躯体防水材
(シャガード)
 - ・ポリマーセメントモルタル
(RIS シリーズ)
- など、各種混和材(剤)を
ラインナップしています。

●資料のご請求お問い合わせは・・・

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社 本社
〒629-3101 京都府京丹後市網野町網野 126
TEL 0772-72-2220 FAX 0772-72-2888
舞鶴営業所・福知山営業所・豊岡営業所

金森藤平商事株式会社 大阪営業所
〒561-0817 大阪府豊中市浜1丁目1番7号
TEL 06-6332-6861 FAX 06-6332-6884

小浦産業株式会社
〒550-0004 大阪府大阪市西区靱本町1丁目14番6号
TEL 06-6443-6181 FAX 06-6443-6270

TAKENAKA

守る、 創る、 思いやる ビルへ。



野坂徹夫：画

災害から人々の暮らしを守る。
エネルギーを創り、分けあう。
都市を、そして地球を思いやる。
これからのビルはこうじゃないとね。

想いをかたちに

 竹中工務店